

Reading The Muslim Mind

ムスリムの考え方を知る

16億人が信奉するイスラームの教え

ハッサン・ハトフト

序文 アフマッド・ザキ・ヤマニ

愛、信頼、人類のために尽力する人びとへ

アメリカン・トラスト・パブリケーションズ

American Trust Publications, USA

Copyright © March 1995 American Trust Publications

著作権所有

米国にて印刷

1996.1997.1998.2001.2002.2003.2005 年再版発行

米国議会図書館出版データ目録

Hathout, Hassan.

Reading the Muslim Mind / Hassan Hathout; with a foreword by Ahmad Zaki Yamani
p.cm.

Includes bibliographical references and index.

ISBN 0-89259-156-0. - ISBN 0-89259-157-9(pbk)

I. Islam 1. Title

BP161.2H84 1994

297—dc20

94-46150

CIP

お礼の言葉が最後になりましたが、同僚のヘダブ・アル・タリフィ女史はいつも原稿を瞬く間にタイプし、修正や見直しも快く引き受けてくれました。皆様方に神の恩恵があらんことを祈念します。

ハッサン・ハトフート

謝 辞

私は本書を最後まで書き終えられたことを神に感謝します。闘病中も引きこもつて書き続けました。そうでもしなければ、「今は忙しくて、手が離せないから」と自分に言い訳をして、いつまでもこの執筆を後回しにしていたことでしょう。クルアーンは次のように述べています。「そのうち(嫌っている点)にアッラー²からよいことを授かるであろう。」(第4章19節)

預言者ムハンマドは、「人に感謝しない者は神にも感謝しない」と述べています。妻サローナスがこの執筆を限りなく支え続けてくれたことに心から感謝しています。それは決して驚くようなことではありません。彼女は結婚後五十三年間、常に私を支え続けてくれました。

また、本書の執筆を薦め励まし続けてくれた兄弟や友人たちにも感謝します。彼らは、依頼される数多くの講演よりも本の方が時を超えて読み継がれると助言してくれました。大切な友人であり、高潔な人であるキャロル・デ・マース女史に特に感謝します。彼女は自ら進んで原稿を入念に見直し、編集上の貴重なアドバイスを与えてくれました。

本書の執筆を楽しみながら落ち着いて書き進められたのは出版社の皆さんのおかげです。

¹ 全人類への導きと慈悲として神が啓示した最後の啓典である。クルアーンは、神の真正なる啓示として現存していることを確かめ、神への信仰、神の眞の特性と、人類への神の意思を人間に教え、地上における人生の目的とその在り方を説明している。クルアーンは23年間に天使ジブリール（ガブリエル）を介して、預言者ムハンマドに啓示された。

² 唯一神のアラビア語による正式名称、宇宙の創造主、またアーダム（アダム）、ヌーフ（ノア）、イブラーヒーム（アブラハム）、ムーサー（モーゼ）、イーザー（イエス）、ムハンマドなどすべての預言者の神である。

第四章 イスラームの分析

シャリーアの概要 87

シャリーアの法源 87

シャリーアの目的 87

教会と国家 90

民主主義 95

内的自我 102

イスラームの五つの柱 113

イスラームの倫理観 113

クルアーンの魅力 126

預言者ムハンマドの言葉 128

第五章 現代の諸問題 135

第五章 現代の諸問題

新世界秩序 144

ジハード 145

目 次

序文	アフマッド・ザキ・ヤマニ	9
はじめ
第一章 神とは	29
第二章 神の存在とは	32
イスラームの教え	38
第三章 イスラームと他の一大宗教	48
啓典の民	49
教義の違い	52
ユダヤ教徒	55
キリスト教徒	64

序文

アフマッド・ザキ・ヤマニ³

イスラームは、世界の主要な宗教の中でもユダヤ教（ユダヤ民族）、キリスト教（キリスト）、仏教（仏陀）などとは異なり、宗教の名称が民族や人物に由来していない。イスラームの名称は、預言者ムハンマドには由来していない。歴史上オリエンタリストが「マホメット教」とか「マホメット教徒」と呼ぶこともあつたが、そうした呼び方はいずれもムスリム（イスラーム教徒）が自分たちの宗教や自らを呼ぶ名称ではない。

「イスラーム」は、二つの語源「タスリーム（服従）」と「サラーム（平和）」に由来している。「イスラーム」とは、創造主と人間および人間同士の関係を定める完全で統一された教えである。

全能の神に対する人間の関係は、被造物が創造主の意思に絶対服従するというものであり、この関係が「イスラーム」という言葉の本質的かつ一般的な意味であり、預言者ムハンマドを通じて啓示された信仰に限定されるものではない。実際、クルアーンには、預言者ムハンマドよりも以前に登場した数多くの預言者が取り上げられている。イブラーイヒー

³ アフマッド・ザキ・ヤマニ氏はサウディアラビアの元石油鉱物資源相であり、優れた実績を持つ現代の政治家の一人である。イスラーム学者としても著名であり、ハーバード大学ロースクールのイスラーム・シャリーアの講座に毎年参加している。彼の活動は、著書*Everlasting Shari'ah* (Saudi Publishing House, 1970)、その他多くの著書や講演など、イスラームに関する事柄だけにとどまらない。また、英国ロンドンを拠点とする著名な世界エネルギー研究所の創設者であり所長でもある。さらにイスラーム遺産財团アルフルカーンの創設者、会長でもある。この財團は、イスラーム関連資料の保存、記録、出版などを積極的に行っている。

家族と性革命	170
生命医学の倫理	171
生殖の問題	172
臓器提供と臓器移植	173
死の定義	174
安樂死	175
遺伝子工学	176
	177
	178
	179
	180
	181
	182
	183
	184
	185
	186
	187
	188
	189
	190
	191
	192
	193
	194
	195
	196
	197
	198
	199
	200
	201
	202
	203
	204
終わりに	205

※本書の神という表現は全宇宙の唯一の創造主であるアッラーを指す。

戦いをし向ける者に対し（戦闘を）許される。それはかれらが悪を行ふためである。アッラーは、かれら（信者）を力強く援助なされる。（第22章39節）

ムスリムと非ムスリムの一般的な関係、特にムスリムと啓典の民との関係は、本書の序文で取り上げられる内容ではなく、詳細に論じるべき多面的な問題である。敢えていうならば、この関係の土台となる二つの原則は寛容と平和である。これはクルアーンと預言者の教えが命じている原則である。この教えに矛盾する歴史上の出来事は、その時代のムスリムの責任であり、決してイスラームのせいではない。同様に、キリスト教徒がその教えにふさわしくない行動を取つたとしても、それはあくまでキリスト教徒の個人的な問題であり、決してイーサー（イエス）の教えのせいではない。

さらにイスラームでは、ムスリムは他人と仲良くしなければならないと説いているが、自分自身も心穏やかでなければならぬと教えてている。それはムスリムが神の意思にすべてを委ねていることから生じる当然の結果である。イスラームの他にない特質は、人生の精神面と物質面の双方が生み出す両立性と調和にある。ムスリムの行動において、信仰による精神的な教えが物質的な側面をもコントロールし、導く。商取引や個人的な行動に関するイスラームの法律に精通している者は、このことを十分理解している。また、イスラー

ム（アブラハム）の宗教、そしてすべての預言者の宗教はイスラームであつたと、クルアーンは語つている。

これはあなたがたの祖先、イブラーヒームの教義である。かれは以前も、またこの（クルアーン）においても、あなたがたをムスリムと名付けられた。使徒はあなたがたのための立証者であり、またあなたがたは人びとのための立証者である。

（第22章78節）

人間同士の関係は、「イスラーム」の二つ目の意味である平和が基本となる。平和は当然、寛容と慈悲を伴う。預言者ムハンマドが描くムスリムとは、「他のムスリムに対してその舌と手が安全な者のことである。」また預言者ムハンマドは、何度も寛容さを褒めたたえ、「神は寛容な者に慈悲深い。彼らは物を売るときも、買うときも情け深い」と說いた。

イスラームにおける交戦規則は、現代の軍事用語でいうならば、ムスリムが非ムスリムに脅かされたときに限つて、非ムスリムと戦うことができると定めている。ムスリムの戦いはこの交戦規則に従つている場合にのみ神に認められるのである。クルアーンでは次のように述べられている。

人類の歴史には中国文明、エジプト文明、ギリシア文明、ペルシア文明、ローマ文明など数多くの文明が登場してきた。イスラーム以前の文明はそれぞれ際立った特長を持つていた。ギリシア文明では哲学が発達し、ローマ文明は建築物が有名である。イスラーム文明においては、学問の主要な分野である医学、天文学、化学、数学、哲学、建築学が発達した。しかし、イスラーム文明を他の文明から際立たせる最も重要な点は、その誕生の時期が歴史上正確にわかっていることである。イスラームの信仰は紀元七世紀に預言者ムハンマドを通じて啓示された。他方で、他の文明は数世紀をかけて発展した後、目に見える形で現れたのである。つまりその正確な開始時期、言い換えるなら正確な発生時期がわかつていないのである。さらに、他の文明はそれが生まれた社会環境の中から発生してきているが、七世紀のマツカのアラブ人には、秀でた文明を生み出す能力や知識はなかつた。彼らは一般的に無知で読み書きができなかつたのである。彼らの社会的基盤を揺るがし、その社会構造をくつがえしたのが預言者ムハンマドの呼びかけである。人びとはその呼びかけ、すなわち神の啓示によつて社会を一新し、それを当時の世界のあらゆる方角に向けて伝え、歴史の流れを変えていったのである。

だが実際には、イスラーム以前に支配的であつた部族的なアラブの慣習は、クルアーンと預言者ムハンマドのスンナ⁴（言行）によつてすべてが刷新されたわけではない。その一

⁴ スンナ。「生活の方法、過程、規則、様式、行動」であり、イスラームの文献では、預言者ムハンマドの生活の実例や様式を示すために使われている。これはイスラーム法の二番目に重要な法源である。

ムの礼拝は祈りの言葉と体の動作を組み合わせたものであり、その目的は精神の真髓を確かめ、強めることである。ムスリムの日々の礼拝は、複数の体の動きが組み合わされてい る。まず、ルクー（立礼）は主の偉大さの前のムスリムの謙虚さを表している。そして、この定められた姿勢で「偉大なるわが主に讃えあれ」という言葉を繰り返す。またスジュー ド（叩頭）と呼ばれる、身を伏せ、頭を地面につける姿勢は、神の限りない偉大さの前で人間がいかに微々たる存在であるかを表している。神のしもべであるムスリムはこの謙虚な姿勢で、決められた言葉「高貴なるわが主に讃えあれ」を繰り返す。ムスリムは、こうした動作を通じて自らの主である創造主に仕える意思を表し、信頼と信仰を神の慈悲と恩寵にゆだねるのである。立礼と叩頭はムスリムの究極的な謙虚さを表現している。その謙虚さは唯一絶対の神のためだけであり、他の誰のためでもない。ムスリムはクルアーンで次のように教えられている。

わたしたちはあなたにのみ崇め仕え、あなたにのみ御助けを請い願う。

（第1章5節）

イスラームの信仰は、人間関係において、平等であることを命じている。

烈火に焼かれるであろう。（第4章10節）

孤児の財産の管理を任せられたムスリムが、孤児の財産を自分の財産と合わせて投資のために使った場合に誤って孤児に返していないことを恐れて、孤児の財産を預言者に返すこととで、神の掟を犯すことを免れようとして。その状況のときに、クルアーンの別の一節が啓示された。

あなたがたがもし孤児に対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたがよいと思う二人、三人または四人の女を娶れ。だが公平にしてやれそうにもないならば、只一人だけ（娶る）・・・。（第4章3節）

残念なことに、ムスリムはクルアーンが授けた一夫多妻制の法的寛容さを、その付帯条項には目もくれず悪用してきた。一部のムスリム男性は、一夫多妻制が認められた社会的状況や命じられた条件によって保証された細心の注意と重大さを考慮することなく、複数の女性と性的関係を結ぶ許可書として悪用してきた。

特に富を得たアラブ人の中には、一夫多妻を例外ではなく常習にしてしまった者もいた。

部は認められ、修正され、新しい法律倫理体系に組み込まれていった。当然イスラームと合わないものは破棄された。クルアーンまたはスンナが直接扱っていない慣習の一部は、のちに法学者や専門家が原典に基づいて解釈した。彼らの決定によって、ベドウインの好ましくない旧習の一部がシャリーア⁵（イスラーム法）の中に紛れ込んだ。この部分のシャリーアは不变というわけではなく、後述するように、各時代の優れた法学者の精査を待たねばならない。この問題は、時間を掛けた討議と説明を要する長く入り組んだテーマであるが、家族法の分野からその一、二の例を挙げて説明することができる。

一夫多妻制、また男性が自分の意思で妻を離婚できる権利は、イスラーム以前のアラビアで広く受け入れられていた。男性は好きなだけ多くの妻を娶り、また勝手気ままに離婚して新しい妻を迎えることができた。この慣習は、預言者の時代の半ばまで続けられていた。イスラームは、一時に持てる妻の数の上限を定め、複数の妻を持つ場合彼女たちを平等に扱うという条件を付けたのである。最初から条件が付けて制限された一夫多妻の権利は、男性が孤児の世話をしたときの状況と密接に関係している。クルアーンは、孤児の正当な財産を着服する者たちを次のように脅かしている。

不当に孤児の財産を食い減らす者は、本当に腹の中に火を食らう者。かれらはやがて

⁵ クルアーン、預言者ムハンマドのスンナを二大法源とするイスラーム法。これらの二大法源に特別説明されていない事柄については、論理的推論（イジュティハード）から導き出される。

離婚（の申し渡し）は、二度まで許される。その後は公平な待遇で同居（復縁）させるか、あるいは親切にして別れなさい。（第2章229節）

もしかれが（三回目の）離婚（を申し渡）したならば、かの女が他の夫と結婚するまでは、これと再婚することは出来ない。だが、かれ（第二の夫）がかの女を離婚した後ならば、その場合兩人は罪にならない。もしアッラーの掟を守つていけると思われるならば・・・。（第2章230節）

この点に関してクルアーンは非常に明確に説明しているにもかかわらず、ムスリムの夫は一回の離婚申し渡しで三回の離婚をすべて有効とすることが多かつた。クルアーンが配偶者に考え方を与えている冷却期間を守るべきであるとする一部の法学者は、一回の申し渡しまたは同時期に行われた三回の離婚は、一回分の離婚申し渡しと見なすべきであると主張した。しかし、預言者ムハンマドの後の二人目のハリーファ（カリフ）であるウマル・イブン・ハッターブは、これほど重大な事柄を人びとがあまりにも軽く扱つていいのを見て、三回の離婚の申し渡しは三回分すべてを有効にするという規則を定めた。さ

彼らは一時に四人の棒を越えることはないが、その気になればいつでも離婚の手段に訴えた。離婚が合法とはいへ、預言者ムハンマド（かれに神の平安あれ）の言葉によつて「神が最も忌み嫌う合法なこと」だと十分に承知していたが、世俗的な快楽を得るために離婚に訴えた。さらにクルアーンは、離婚という望ましくない法的措置を有効とさせる手順を明確に示している。婚姻関係がこじれてしまつた場合、最初にとるべき措置は調停である。

もしあなたがたが、両人の破局を恐れるならば、男の一族から一人の調停者を、また女の一族からも一人の調停者をあげなさい。両人がもし和解を望むならば、アッラーは両人の間を融和されよう。（第4章35節）

調停がうまくいかなかつた場合夫は離婚の手続きをするが、三ヵ月と十日間保留された後に最終的に有効となる。この保留期間中妻は娘家に留まり、夫に離婚を思い直す機会が与えられている。離婚は合法とはいへ神にとつて望ましいことではない。この離婚に至る調停の手続きは夫婦の間で二回まで有効とされる。しかし三回目の離婚手続きは直ちに有効となり、離婚した夫婦は、妻が他の男性と再婚してその夫と離婚するまで前の夫とよりを戻すことはできない。クルアーンでは次のように述べている。

ないのはそのためである。犯罪を証明する責任が極めて煩わしいため、現実には刑の執行は不可能に近い。

純粹にイスラーム的な社会では、人びとがみな親切で打ち解けた雰囲気に囲まれることはそれほど不思議ではない。こうした特長は、高い文明を確立するためにイスラームが定める必要条件である。そして当然はあるが、この文明社会の構成員である人間は、創造主アッラーが定めた理想のモデルとして最高の資質を備えていなければいけない。

しかし、残念なことに世俗的な衝動に駆らせた一部のムスリムが主の命令に従わなくなってしまったために、今日のムスリム社会において、その言動や振る舞いが完全にイスラーム的である人びとを見出し難い状況になっている。私の個人的な経験では、そうした人びとはごく一握りしかいないが、ハッサン・ハトフート博士は間違いなくその中の一人であると明言できる。ハトフート博士の依頼で彼の著書『ムスリムの考え方を知る』の序文を書くことは私にとって非常に喜ばしいことであつた。本著を読むことで始まつたことではないが、彼の思想を学ぶことで「現実的な理想」の世界への旅に導かれた。

ハトフート博士はイスラームを現実的な意味で理解している。イスラームとは、むしろそのように理解すべきである。神とその唯一性を信じることは、神の啓示と預言者ムハンマドの教えを受け入れるだけではなく、論理的思考による精力的な知的訓練の産物でもあ

らに、この問題に関する預言者ムハンマドの教えは、男性が特定な状況では離婚できない条件を定めている。例えば、妻の生理が終わるまで、または生理の後妻と性交渉があつた場合次の生理が来るまで離婚できない（生理中の性交は禁止されている）。預言者の教友アブドゥッラー・イブン・ウマルがこの決まりを破つたとき、預言者ムハンマドは直ちに妻のところに戻るように命じた。

これらは、ムスリム社会を外から観察した人びとが私たちの法体系に対して歪んだ見解を持つようになつた、一部ムスリム社会の忌むべきやり方の例である。しかし、このことに関わらず、シャリーアは特に女性と憲法上の問題に関して、現代においても人権の保護、社会と個人の構成に対応しているユニークな法体系である。

他の法体系では見られない、人類のためになる素晴らしいシャリーアの特徴が、イスラームの刑法の厳しさを誇張する一部のムスリムのせいで影を潜めてしまつたことは非常に残念である。刑罰を強調することはイスラームを著しく誤解した結果であり、外国のオリエンタリストはいうまでもなく、ムスリムも犠牲となつていている。イスラームは、泥棒の手を切斷したり、密通者に石を投げるためではなく、人間の尊厳を守り人権を保護するために啓示されたのである。違反者に厳罰を処する理由は、刑罰を性急に与えるためではなく、むしろ犯罪を防ぐためである。刑の執行が認められるまで多くの段階を踏まなければなら

第三章は、イスラームおよびイスラームと他の二大宗教との関係について客観的で興味深い説明を行っている。ムスリムではなく、イスラームのことを知らない読者は、特にキリスト教とイスラームとの関連性について驚くであろう。クルアーンは次のように語る。

またあなたは、信仰する者に一番親愛の情を抱いているのは、「わたしたちはキリスト教徒です。」と言う者であることを知るであろう。これはかれらの間に、司祭と修道士がいて、かれらが高慢でないためである。（第5章82節）

イスラーム文明は、西洋文明の学問や芸術のさまざまな分野において明確な痕跡を残している。イスラーム文明は、西洋世界が自らの文明を築き上げる土台を提供した。アラビア語やその訳語が西洋文明の中に多く取り入れられ、使われていることから明らかである。例えば、「大学」のアラビア語訳はジャーミアであるが、この言葉の語源であるジャーミイは都市や地方の大きなマスジドを意味している。医学や天文学、法律などの学問が最初に教えられたのがマスジドの中であり、学生たちはそこで先生を囲んで座り学んだ。西洋では、教育のために特別な建物を建て、そこにアラビア語のジャーミイ、すなわちラテン語

る。このような知的労力は、宇宙、そして宇宙の中の人間の存在について私たちに沈思熟考を促すクルアーンの無数の教えに適っている。人は、知的労力によって創造主に関する知識を深めるのである。クルアーンいわく、

本当に天と地の創造、また昼と夜の交替の中には、思慮ある者への印がある。または立ち、または座り、または横たわって（不斷に）アッラーを唱念し、天と地の創造について考える者は言う。「主よ、あなたは徒らに、これを御創りになつたのではないのです。」（第3章 190—191節）

本書の第一章のタイトルである「神とは」は、ムスリムが神を理解し、信仰の完全な受け入れを容易にする道筋を描いている。彼の文体は、若者を瞬時に納得させ、懷疑的な大人には説得力を持つ。第二章では、神の存在を示す要因に関する著者の論理的な分析とともに、神の存在の帰結をさらに論理的に詳しく分析している。その帰結は、人間、復活と來世、人間と動物の違い、さらに始祖イブラーヒーム（アブラハム）という人物に共通の出発点を持つ三大一神教であるユダヤ教、キリスト教、イスラームの中に見出すことがで
きる。

セフ）といった預言者の名前はイスラーム社会でよく知られている。ムスリムとユダヤ教徒の間の紛争はあくまで政治的なものであり、宗教的な性格ではないことが示されている。実際に、ユダヤ教徒にとってイスラーム国家の方が他のどの場所よりも安全であり、人間としてまつとうな扱いを受けることができると最初に認めるのはおそらくユダヤ教徒自身であろう。歴史的にもスペインでイスラームの統治が終わりを告げたとき、スペインのユダヤ人は新天地を求めてイスラーム国家オスマン帝国に亡命している。

同じように、イスラーム世界とキリスト教世界の間の寛容と協力の絆も、誠意と政治的な意思さえあれば十分に強くなりえる。この二つの宗教は共に憎しみを求めているのではない。この二つの宗教の間には、ムスリムに長年押し付けられ、今も押し付けられている不公正の歴史を終わらせるなどを十分正当化できる共通の利害がある。今こそ、この不公正のすべてに終わりを告げ、長年にわたって醸成されてきた憎しみと憤りを取り除くために手を携えるときが来ている。

本書において、最も多くページを割き、極めて重要な意味を持つ第四章はイスラームの構造を分析している。ハトフート博士は、イスラーム法典であるシャリーア、政教分離、民主主義を簡潔に概説している。さらに、イスラームの精神面について、ムスリムを導き、ムスリムの中に博愛、慈悲、あらゆる善への愛を植え付ける信仰箇条と道徳的メッセージ

でユニバシタス、現代英語ではユニバーシティという名前をついた。この意味において西洋がイスラーム文明から模倣したのである。ムスリムの学生が学業を收めたときに授与される学位はイジャーザと呼ばれるが、その意味は英語のライセンスに対応している。ヨーロッパの国々で使われている学位の名称である。

ムスリムとキリスト教徒の過去の対立は政治的な理由から起きたものであることを、今こそ知る必要がある。この対立はイスラームが宗教として出現してきたために引き起こされたものではない。著者が指摘しているように、今日の支配的な文明をユダヤ教とキリスト教が融合したものであると説明することは適切ではない。その主張は、ムスリムがこの現代文明に及ぼした極めて大きな影響を揉み消そうとしているにすぎない。イスラームの影響力はユダヤ教よりもはるかに大きいものであった。むしろ現代の文明はユダヤ教、キリスト教、イスラームが融合したものであると考える方がより正確である。第三章は、クルアーンがユダヤ教の預言者ムーサー（モーゼ）を尊重していることを明らかにしている。ムーサーとユダヤの民の闘いの物語は、クルアーンの中で何度も繰り返され、実際にムーサーの名前は私たちの預言者ムハンマドの名前よりも数多く出てくる。他の預言者イスマーリー（イシュマエル）、イスマーク（イサク）、ヤアコーブ（ヤコブ）、ムーサー（モーゼ）、ハールーン（アロン）、ダーウード（ダビデ）、スライマーン（ソロモン）、ユースフ（ヨ

策の研究はたゆまず続けられている。したがつてシャリーアに対する必要性も進化してきた。シャリーアの必要性の進展は、預言者ムハンマドの死の直後から始まっていた。変化をもたらした最も大胆な人物の一人が二代目のハリーファ（カリフ）ウマル・イブン・ハッターブであった。彼は、場合によつてはクルアーンの規則の一部を応用または一時停止することもあつた。⁶私の序文は、その事柄を詳細に説明するのに適切な場ではないのが、「イジュティハード（法学上の推論）」に関する二つの主流学派の違いを取り上げることだけに留める。一番目の学派は、イスラーム法源（クルアーンとスンナ）とその文字通りの解釈を厳密に守り、その目的はあまり考慮しない。二番目の学派は、法律制定の根底にある目的と英知を尊重する。

ハトフート博士は、バニ・クライディアハの領地の外では「アスル（午後の礼拝）」の礼拝を行わないようにと命じられていた兵士の話を取り上げている。一部の兵士たちは、自分達の目的地に着く前にアスルの礼拝の時間が終わりそうになつたため、礼拝を済ませることを選んだ。そのとき彼らは、預言者の命令が礼拝をやめるという意味ではなく、目的地にできるだけ早く着きなさいという意味だと解釈した。残りの兵士たちは預言者の命令を文字通り解釈し、目的地に着くまで礼拝を行わなかつた。後日、預言者は両者の解釈とともに正しいと認めた。なぜなら両者とも正しい根拠に基づいていたからである。ウマ

⁶ とはいへ、ハリーファ（カリフ）・ウマルの決断は彼の個人的な判断によるものではなかつた。クルアーンの禁止令と、当時の現地の状況への応用を彼なりに理解し、解釈した結果であった。このような状況において、彼は常に預言者の博識な教友に相談した。彼らは当時諮問委員会を作っていたが、彼らは全員一致でウマルに同意した。

⁷ 文字通りの意味は「努力」である。イスラーム法において、特に法源（クルアーンとスンナ）の中で特別な教えがない場合、問題や課題に関する論理的推論のよる最大限の努力を行い、イスラームの禁止命令とその真意を確認することである。

を取り上げている。ここで私は、ハトフート博士のシャリーアに関する非常に興味深い説明について、さらに若干書き加えたことがある。私たちは次に挙げる二つを明確な区別しなければならない。一つ目は、数は少ないがクルアーンの規則と命令、そして預言者の認証された言行録の中で具体化された規則であり、それらはすべて神聖かつ不变の法源である。二つ目は、さまざまな時代のさまざまな宗派のイスラーム法学者やその他の学者が生み出した膨大な法的見解である。この二つ目の法律はムスリムにとつて宗教的に拘束力を持つものではないため、神聖かつ不变なものとは見なされていない。

イスラーム法の法源の一つに、法学者が「マサリ・ムルサラ」と呼ぶものがあり、それは大まかに「公共の利害」と訳すことができる。初期の法学者たちはこの法源を使って新たな法律を定め、預言者の時代には存在しなかった状況で、イスラームの法源であるクルアーンとスンナの中で定められていない状況に対処した。さらに法学者は「公共の利害」の原則を、クルアーンとスンナの規範を解釈する上での指針とした。さらにイスラームの法源（クルアーンおよびスンナ）と「公共の利害」の間に矛盾が生じた場合には、クルアーンとスンナよりも「公共の利害」を優先する者が出ってきた。これは想像しがたいかなり過激な措置であつた。

時代の変遷と共に生じる新しい問題や、イスラーム社会の必要性の変化に対応する解決

外の広い場所に移して、そこで参加者全員と何日も過ごしながら、大多数の合意が得られるまで問題を話し合い、統治者はその決定に従う義務があった。

イスラームには、シユーラー制度に則った大多数のルールの他にも、人権という考え方が確立していた。イスラームにおいて、信仰・言論・活動の自由、国家における市民間の平等は、他の国々がこれらの権利を彼らの制度の中に取り入れるまで苦難の道を歩み始める遙か以前から既に保証されていた。しかし残念なことに、イスラームの黎明期以来、さまざまなことが変容し、イスラームの法体系の本来の特徴はその多くがむしばまれてきた。一部のイスラーム国家では、イスラームと民主主義は全く相容れないものであるという印象が避けがたい。

著者は、通常ムスリムが子供時代に学ぶイスラームの五つの柱を明瞭かつ簡潔に説明している。創造主との関係、信仰箇条、日常の行動において神が命じたことと禁じたことを守る上で、ムスリムが完璧を目指してどのように努力しているかを、ムスリムでない読者に分かりやすく説明している。ムスリムの生活の中で、特に他人に対する行為や言動は最も周囲の目を引く。この点で、イスラームが定める倫理基準は高く、生活のあらゆる面に及んでいる。真のムスリムは、同胞のムスリムに親切であり、寛容かつ謙虚であり、善行にいそしみ、自らの親類縁者にも同じように振舞う。著者は、本書において何世紀にもわ

ル・イブン・ハッターブは、彼自らのイジュティハードについて、イスラーム法源を文字通り解釈するのではなく、立法の英知と目的を重視する考え方には拠っていた。絶えず変化する状況に対処するために、法律を解釈し、あるいは応用、発展させることを選んだのである。ハトフート博士の見解を読むと、彼もまた同じ解釈の方法から学んでいることがわかる。

著者は、イスラームと民主主義の関係についても実に的確に説明している。クルアーンとスンナが定めているように、イスラームの統治体制は、特定な形式の憲法体系を持つてない。むしろクルアーンとスンナは、どんな憲法も依拠できる基本的な原則を定めている。統治者は人びとによって選ばれ、法律によってのみ統治することができる。社会の問題は、大多数の決定によって決めなければならない。これこそがシユーラー⁸（協議）制度の真髓である。預言者ムハンマドは、イスラーム国家の首長である彼の権限において、彼の行動が神の啓示によって命じられていない場合は、シユーラー制度に諮らねばならなかつた。実際にシユーラーを行う方法や形式は、それぞれの時代や地域の必要性と状況に従つた決定に委ねられた。このように、不可欠の要素である柔軟性は保証されていた。ウマルがハリーファであつた時代の歴史をもう少し詳しく見てみると、彼は通常、マスジドでシユーラーを行つていた。議題が難しく、さらに議論を要する場合、彼は会議の場を郊

⁸ 協議。ムスリムは、クルアーンの中でシユーラーのプロセスを経て決定を下すように命じられている。公共の意志によって指導者を選び、指導者が人びとに影響を及ぼす決定を下すには、指導者は人びとと協議しなければならない。ムスリムの政府は、シユーラーの方法に従うことが義務付けられている。イスラームに独裁者の居場所はない。

はじめに

私は英國占領時代のエジプトに生まれた。このことは私の人生に大きな意味を持つこととなつた。というのも、物心ついてから始めて思い出すことといえば、母が何度も言つて聞かせた言葉であった。

「お母さんはね、お前がお腹の中にいるときからハッサンと呼んでいたのよ。それはね、英國をエジプトから追い出すためにお前を捧げようと決めていたからなんだよ」

母の言葉は幼い私の心中に深く刻み込まれた。この言葉のおかげで無邪気な子供時代や怠惰な青春時代を過ごすことはなかつた。私の人生に使命と目的が与えられたのである。私の世代は、英國の占領に対して手段を選ばず闘つた前の世代の志を受け継いでいた。私たちは英國やエジプトの傀儡政権から見ればテロリストであつたが、エジプトの庶民や英國以外の国々にとつては自由の戦士であつた。英國によるエジプト占領終結の日を目撃できたことは幸運であつた。しかし、のちに英國に留学した私は、英國人に親愛の情と敬

たつてムスリムに影響を及ぼしてきたクルアーンとスンナの素晴らしい例を挙げて、ムスリムでない人びとも、イスラームの教えを具体的に説明している。

最後の第五章では、現代の世界で論争的となつてゐる政治的問題や社会的問題を取り上げてゐる。それらに関する著者の見解と提案する解決方法は、イスラームのシャリーアとシャリーアが導入した道徳律に関する著者の深い洞察力を反映してゐる。ムスリムの中には、著者の理論や結論とは相容れない考え方を持つ人がいるかもしれないが、そのような意見の違いはイスラームでは大いに歓迎されている。この点について預言者ムハンマドが私たちのために定めた決まりとは、次のようなものである。「問題点について眞実と解決方法を求めて、知力を使い正しい答えを見出した者は、二つの徳を得ることができよう。解決方法を求めはしたが眞実を見出せなかつた者にも、知力を用いたことに対しても一つの徳が与えられる」単にクルアーンとスンナの文字通りの意味ではなく、その精神と英知を求める方を選んだハトフート博士の努力に対して、一つではなく、二つの徳が与えられるはずである。

能界の一部の集団にとつて使命となつてしまつてゐる。

イスラームの眞実の姿を知つてもらうことは、私たちの基本的人権であると確信している。人びとの間の平和や調和は作り事や欺瞞ではなく、正しい理解を土台にしてのみ築くことができるとして信じてゐる。お互いに正しく理解し合うことによつて、本当の類似性と違いを認識し、願わくば、その違いを尊重し、乗り越えることによつて、私たちは共存することができるるのである。

地球上で十億の民が信じる宗教イスラームの眞実の姿を伝えるために、本書がささやかも貢献できれば幸いである。

「愛」を持つて本書を贈る。愛は神から贈られたものであり、憎しみは悪魔の仕業である。

ハツサン・ハトフート

意を抱くようになった。私は、国民とはその国の国會議員や政治家の外交政策とはかけ離れた存在であることに気づいたのである。ずっと後になつて、私は米国に渡り、そこに定住することになったときも同じことを感じた。

私は不屈の精神で学問に打ち込んだ。産婦人科の医学コースに進み、社会的、学術的基盤を確立するために、スコットランドのエдинバラ大学で博士号を取得した。私の学位論文は「正常および異常なヒト胚形成に関する研究」であった。私は、大学教授、学部長、臨床医、科学者、教育者になるという人生の夢、さらに地元、国内外を問わず専門家の間で高い地位を得るという人生の夢を実現したことに満足している。

しかし、こういったことはすべて、いわば呼吸に必要な両肺の片方を得たに過ぎなかつた。もう一つ渴望したことは宗教の研究であった。その研究とは、自分の宗教と他の人びとの宗教を学ぶことであつた。私の読書量は宗教を専門とする学生のように広範囲ではなかつたが、私が学んだ科学と医学は自分の宗教を考え、理解し、説明するための貴重な手段となつた。

二つの言語と文化圏の中で過ごすうちに、イスラームは西洋で広く知られている姿とその本来の姿が異なっていることに気づいたのである。その理由について、私たちムスリムの側にも責任があると思っているが、イスラームに対する罵詈雑言は政治やマスコミ、芸

明確で単純なことではあるが、創造物が神の証であると認識することは、ムスリムを理解するうえで一番重要な考え方である。おそらくイブラー・ヒーム（アブラハム）も同じような思考過程を経て神にたどり着いたのであろう。当時の人がひとが崇める偶像がまやかしであると確信したイブラー・ヒームは、星、月、太陽など、神として崇められているものについて考えた後、それらがある一定の法則に従っていることを見出した。そして彼は、その法則を定めている唯一の神について深く思いをめぐらした。このことについてクルールーの説明は大変興味深い。

われはこのように、天と地の王国をイブラー・ヒームに示し、かれを全く迷いのない信者にしようとしたのである。夜（の暗闇）がかれを覆うとき、かれは一つの星を見た。かれは言った。「これがわたしの主です。」だが星が沈むと、かれは言った。「わたしは沈むものを好みません。」次いでかれは月が昇るのを見て、言った。「これがわたしの主です。」だがそれが沈むと、かれは言った。「わたしの主がわたしを導かれなかつたら、わたしはきっと迷った民の仲間になつたでしょう。」次いでかれは太陽が昇るのを見て、言った。「これがわたしの主です。これは偉大です。」だがそれが沈むと、かれは言った。「わたしの人びとよ、わたしはあなたがたが、崇拜する者と絶縁します。

神とは

孫娘に、「お前は神様を信じるかね。」とたずねたことがある。孫娘は「もちろんよー！」と即座に答えてから、少し間をおいてから「ママがそう言つたの」と付け加えた。そこで私は彼女の本棚から一冊の本を取り出して、「この本は誰が書いたと思う？」とたずねた。すると彼女は即座に著者の名前を読み上げた。言葉のやり取りを続けながら、孫娘に次のように言った。「では作者の名前が書いてある表紙を破つて、この本には作者がいなくて、本自身が書いたと言われば、お前はどう思う？」彼女は当然のように「そんなこと、ありえないわ」と答えた。その後、私たちの会話はスムーズに流れ、本が作者の証であると同じように、創造物は創造主の証であるということを孫娘に筋道立てて説明することができた。

なる。神のすべての属性における神の領域は無限という言葉で表現できる。実際に数学では無限を数学的事実として認め、それを特別な記号で表わしている。もちろん、私たちは無限が実際にどういう意味を持つていてかを把握できないが、それは極めて当然のことである。なぜなら私たちは限りある存在であり、無限のものを把握できないからである。神は私たちを理解しており、私たちは有限であるがゆえに神を理解する」ことはできないが、神の創造物を通して神の徴や兆候を知ることで神を認識する」ことができる。無限のものは二つや三つ、あるいはそれ以上の数に分けることができないために（数学的事実）、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラーム教徒、ヒンドゥー教徒、その他多神教徒のための唯一の神というものはありえない。神は唯一なのである。」の唯一性こそがイスラームの宗教理念とムスリムの信仰の根源なのである。

かれ（英語の大文字の He）といふ名詞で神を表す場合、当然そこに性別は含まれていない。神は性別を超えた存在であり、問題はこの単語が限定的で一方的な意味で使われていることである。言語によつては（英語も含めて）唯一最高の創造主を表す言葉がないといふ事実を知つておかなければならない。そこで「神（God）」といふ言葉を（人間が創つた）他の神と区別するために、その頭文字を大文字の「G」にして、他の神は頭文字を小文字の「g」にする必要がある。他の言語では「He」に特別な名前がつけられている。ア

わたしは天と地を創られた方にわたしの顔を向けて、純正に信仰します。わたしは多
神教徒の仲間ではない。」（第6章75・79節）

神の概念は、人びとが想像するほど広く受け入れられているものではない。私は、元共
産圏出身の科学者だけではなく、欧米の科学者仲間の多くが無神論者であることに驚かさ
れた。私も人生のある時点までは、その仲間に入ろうと懸命の努力をしたことがある。母
国エジプトの大学生の間では、第二次世界大戦後の一時期、無神論者であることが流行で
さえあつた。私も周囲の仲間に同調しようとしたが、神の存在しない宇宙という考え方には
どうしても納得がいかなかつたのである。この問題についてある夜、辞書を開いて言葉の
意味を探していたときにある一つの考えに思い至つた。辞書の中で言葉が正しく配列され
ているのは印刷所での爆発のせいであると、誰かが私に言つたとする。その爆発で頭文字
が吹き飛ばされ、その後辞書の中で並んでいるアルファベット順に並んだと想像してみよ
う。私はこの考え方にもうしても納得がいかなかつたのである。

神が究極の創造主であるとするならば、あらゆる点において神「以上」のものはありえ
ないことになる。もし神が何かより「以下」のものであるならば、神は限界を持つことにな
り、哲学で言われている「最高なるもの」または「根本原因」であることと一致しなく

ラビア語では「Allah」である。神を「God」（英語）、「Dieu」（フランス語）、「Adonai」（く
ブライ語）、「Allah」（アラビア語）と呼びながら混同する必要はない。私は講演の際に「あ
なたが神を信じるのなら、アッラーとは一体なんだか」と何度も質問されたことがある。
この質問はそれほど無邪気なものではない場合もある。よく分かっていないの学者の中
には、ムスリムは神（God）を崇拜するのではなく、彼らがアッラーと呼ぶ別の神を信じ
ているを教えるのがいる。

河まで、創造物はそれらを支配する法則に従っている。私たちの体を構成する原子や分子も自然界の創造物と同じであり、人間の体の中で同じ法則に従っている。原子と分子がより複雑になり核酸（生命の基本的構成要素である）を形成すると、化学と生物学と融合し、その独自の法則に従う。この点に関して、私たちは驚くほど高等動物と似ている。

学生のとき、人類は動物界の長であると教えられた。それでも私たちは自らを動物とは見なしていない。人類は循環、呼吸、消化、代謝、免疫、運動、知覚、再生などの諸機能を持つて他の動物と生物学的特長を共有しているが、同時に私たちを人間たらしめているものが私たちの生物学的特長ではないことが分かつていて。これまで研究されてきたあらゆる種の中で人間だけが他の生物を越えた種である。人間とは、生態だけが行動パターンの決定要因ではない超生物学的存在である。私たちは他の動物と同じ本能と欲望を持つていて、動物が単純なパターンで本能と欲望に反応する一方で、人間の反応は遺伝子学的な行動パターンを超えた複雑なメカニズムによって維持されている。人間は生き物としての生態を動物と共有しているが、それを超えた価値や信条や精神性の世界に飛び込んでいったのである。実際に、私たちは生物学的な器（肉体）の中に住んでいる精神的な創造物であるといつても過言ではない。人生の主な関心事が生物的欲求（および欲望）を満たすことであり、精神力が欠落する者は、強いて言えば動物のようであるといえる。

神の存在とは

イスラームの教え

神は存在する。

そう言うと、「それがどうしたの」と言い返す人がいるかもしれない。神が存在するかどうかを悩む必要があるのか、それとも神の存在は神学者や哲学者だけが関心を持つ学問上の問題にすぎないのだろうか。神が存在する（また神が存在しない）場合、人間の社会に対して現実的にどのような影響を及ぼすのだろうか。

神が存在し究極の創造主であるという考え方に基づいて、神のさまざまな創造物を観察してみると、人間は他の創造物とは明らかに異なる存在であることがわかる。原子から銀

「責任」 人には選択の自由があるからこそ責任が生じてくるのである。私たちは、自ら選んだことには当然責任が伴うことをよく理解している。これは宗教が考え出したことでない。無神論の社会においても、交通信号を無視すると罰せられる。宗教の世界における責任とは、人は自由を与えられずして、裁かれたり、最後の審判に對峙する必要はないという意味である。それゆえ自由は、宗教的觀点のみならず世俗的觀点においても人間として基本的かつ本質的なことである。神は人間を自らの行動に責任を持つ種として創造した。私たちの選択の範囲や影響を及ぼす能力を超える出来事は、「運命」の領域であり、当然私たちはその運命に責任を取ることはできない。

人間とは絶えざる葛藤と決断を繰り返しながら人生を送る種である。人間の心は善悪を判断できるがゆえに絶えず揺れ動いているが、同時に意志の力や自己抑制力に働きかけることができる。そうでなければ私たちは過ちを犯し、その結果を受け入れなければならぬ。動物はこのような内面的な葛藤に苦しむことはない。動物はやりたいと思うことに單純に反応するが、それを責められることはない。聖典によると、天使が善い行いだけをするのは、彼らが邪惡なことができないためである。動物は予め決められたことに反応する

人間を見ると、創造主は大変重要な四つの固有な特長を人間に与えていることがわかる。それは知識、善悪の判断、選択の自由、そして選択に伴う責任である。

「知識」 人は知識を愛し、より多くの知識を絶えず学ぼうとする。人の頭脳には、観察力、想像力、理性、分析力、推論力（実験から結論を導き出す）が備わっている。これらの能力を使って過去や未来を探求し、私たちの内部や周りの自然を解明しようとする。そして、さまざまな方法でその結果を記録し表現する。

「善惡の判断」 本来善は常に人をひきつけ、悪は人を不快にするものだと期待することは単純すぎるといえる。人生は複雑であり、人間の心が暗示にかかりやすく、理由付けしがること、そして悪徳は非常に魅惑的であるという事実が物事を複雑にしているが、善悪の判断は生来人間に備わっているものである。

「選択の自由」 人の選択の自由は創造主が人類に授けた「自主性」から生じている。当然この自由は絶対的なものではなく、限られた範囲をはみ出すと機能しなくなる。しあその範囲内において、この自由は人生において最も重要である基本的な価値である。

最後の審判の日に裁かれるのである。

神は私たちに自主性を与え、同時にその責任をとらせる。人間はもともと完璧なものとして創られているわけではない。困難や誘惑に直面しても最善を尽くすことが求められる。この「最善を尽くすこと」は誰にでもできる簡単なことではない。人は懸命に努力し、人生は永遠の闘いの場となる。それゆえ神は人間の努力を認め、その奮闘を評価し、最高の創造物として愛てる。神は、人間が選択の自由と責任という試練を厳しいながらも乗り越えることを望んでいる。そのための最善の方法は、神が私たちの最後の拠りどころであり、主であることを忘れず、また神が私たちに示している善きこと、悪しきことを念頭に置き、最後の審判の日に自らの行いの証明をしなければならないことを心に刻んでおくことである。そのために神は、人類の中から特定の人びとを選び、神ならではの方法（直接的対話、碑文、インスピレーション、天使の仲介など）で神のメッセージを人びとに伝える使命を彼らに授けた。そのメッセージとは、唯一の神を崇拜し、善行に勤しみ、惡徳を避け、最後の審判の前に神の前で証明しなければならないことを常に念頭に置くことである。これが預言の考え方であり、歴史を通じて数多くの預言者と使徒が人類に送られてきた。長い歴史の中で、神が聖典の中にその名前をあげているものもいれば、神が聖典を受けたもの、また奇跡を行う特別な力を授けたものもいる。この預言の継承の中で最後の重要な

が、私たち人間は選択の自由が与えられている。これこそがまさに人類の尊厳である。聖典によると、天使は罪を犯すことなく神に従い、アーダム（アダム）は罪を犯してしまうが、その罪にもかかわらず、神が天使に命じてアーダムに叩頭させた理由は、人間が持つ選択の自由が故である。

ここで少し本題から離れて、宇宙と人間のことについて考察する。宇宙を科学的に研究すると、私たちは極めて微妙な均衡を保っている宇宙の中に生きていること、またごくわずかな不均衡も宇宙の崩壊につながることがわかつてくる。

人間社会を見てみると、悪徳、邪惡、罪と呼ばれるものに完全に身を委ねる人びとが、見かけはその生活を十分満喫した後亡くなる。対照的に、真実を求め、正義のために戦い、理想のために苦闘しながら人生を送った人も、また最期にはあの世にいく。それがすべてだろうか。いずれの人生にとつても死がすべての終わりなのであろうか。私たちの最も内なる何かがそのことを受け入れようとしない。それなら人間の責任の所在はどこにあるのだろうか。死が物事の終わりであるならば、人生は宇宙全体を支配している微妙な調和と相容れなくなる。それゆえ唯一の結論とは、死は終わりでは「ありえない」ということである。死後に続くものは無ではなく、生前の帳尻が合わされ、責任が全うされる別の世が続くのである。これが宗教の教える来世である。人びとは究極の審判者である神によって

るとムスリムが信じているクルアーンの中で次のように語られている。

かれがあなたに定められる教えは、ヌーフに命じられたものと同じものである。われはそれをあなたに啓示し、またそれを、イブラーヒーム、ムーサー、イーサーに対しても（同様に）命じた。「その教えを打ち立て、その間に分派を作つてはならない。」（第

42章13節）

本論に入る前に、ムスリムでない人びとのためにクルアーンについて簡単に説明する。ムスリムは、クルアーンは一語一句文字通り神の御言葉を記したものであり、天使ジブリール（ガブリエル）によって預言者ムハンマドに伝えられたものだと信じている。クルアーンは、新約聖書とほぼ同量の書物であるが、そのすべてが一度に啓示されたものではない。短い文章の中にさまざまなテーマが取り上げ、様々な問題や出来事について語っている。その啓示は二十三年間にわたつて下され、完成された。

預言者ムハンマドがクルアーンのある部分の啓示を受け、それを周囲の信者たちに伝えたいときは、その部分を常に引用記号「と引用終了記号」で示し、言葉は「神曰く」で始められ、「神は真実を語った。」で結ばれた。新しい啓示は直ちに人びとの記憶に委ねられ、

三人の預言者がユダヤ教、キリスト教、イスラームというイブラーヒーム（アブラハム）に由来する一神教の教祖たちである。この三人はすべて始祖イブラーヒームの子孫である。ムハンマドはイスマーイール（イシュマエル）の子孫であり、ムーサー（モーゼ）とイーサー（イエス）はイスハーア（イサク）の子孫である（イスマーイールとイスハーアはイブラーヒームの二人の息子である）。

この時点では、ユダヤ教徒の間で預言者の系譜はムーサーで終わっていると指摘することが適切である。ユダヤ教徒にとって、イーサーはマスイーフ（メシア）ではなく、聖母マリヤム（マリア）も彼女が申し立てたような貞節な女性ではなかった。ユダヤ教徒は今でもマスイーフの出現を待つており、キリスト教を神聖な宗教として認めていない。キリスト教徒はユダヤ教を神聖な宗教として認めているが（ユダヤ教徒はキリスト教をそのように見なしていないが）、キリスト教徒にとって預言者の系譜はキリスト教で終わっている。ユダヤ教やキリスト教がイスラームを神聖な宗教と認めていないにもかかわらず、ムスリムはユダヤ教もキリスト教も聖なる啓示に基づいた宗教として認めている。ユダヤ教徒とキリスト教徒はムハンマドが神の真正なる預言者、使徒であるとは認めていない。ムーサー、イーサー、そして彼らに啓示された聖典を信じること、また彼ら以前の預言者の系譜を信じることは、すべてのムスリムにとって大切な信仰の一部である。神の御言葉であ

また当時使われていた素材に書き写された。クルアーンが完成したとき、ムハンマドはそれを最終的な形に並べ（必ずしも啓示の年代順ではなく、神の指示によつて）、以後クルアーンは一言一句元の形のまま保存されてきた。この点からしてもクルアーンは、聖典として非常にユニークである。アラビア語から他の言語へ翻訳されたものはクルアーンとは呼ばず、クルアーンの意味の翻訳となる。というのも翻訳は人の解釈であり、神の御言葉そのものではない。

クルアーンに用いられているアラビア語はとても真似することのできない文学的奇跡であると考えられている。当時のアラブ人たちが何人も模倣してみようと挑んでみたが、彼らにはとても真似することはできなかつた。アラブ人たちは自分たちの文学的な才能を誇りに思つていたが、クルアーンの言葉や表現に驚きを隠すことができなかつた。当時イスラームと激しく敵対していた者の中にも、クルアーンの一節を聴くやいなやイスラームに帰依した者がいたほどであつた。

権利も含まれている。イスラームにおいては「他者」の領域は十分保護されている。イスラームは決して排他的な宗教ではない。聖職者であろうとながろうと、いかなる人間も、神の慈悲や寛容さを制限したり、神を代弁して報いや罰を与えることは許されていない。「やがてあなたがたは、主の御許に帰るのである、そのときかれはあなたがたの争つたことについて、告げ知らせられる。」（第6章164節）

啓典の民（ユダヤ教徒とキリスト教徒）

人類の中でユダヤ教徒とキリスト教徒はムスリムに最も近く、共に「啓典の民」という尊称を与えられている。彼らは唯一の神を信じる人びとであり、神から啓典を授かつた人たちである。また彼らは預言者の系譜を共有している。ユダヤ教徒やキリスト教徒の友人の多くは、聖書の預言者がイスラームでも預言者であることに驚く。この三大宗教は共通の道徳律を持つている。クルアーンには次のように述べられている。

言え、「わたしたちはアッラーを信じ、わたしたちに啓示されたものを信じます。ま

イスラームと他の一大宗教

クルアーンによると、すべての人間は人種、家柄、信条を問わず、人間であるということだけで尊厳に値する。クルアーン曰く、「われはアーダムの子孫を重んじて海陸にかれらを運び、また種々の良い（暮らし向きのための）ものを支給し、またわれが創造した多くの優れたものの上に、かれらを優越させたのである。」（第17章70節）

イスラームは、人類が一つの家族であることを強調している。「人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。かれはひとつ魂からあなたがたを創り、またその魂から配偶者を創り、兩人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる。」（第4章1節）。すべての人間は同じように基本的人権を持つ。その中には強制されることなく自由に宗教を選ぶ

である。妻自身の宗教に従つて信仰する権利を保証することはイスラームの義務である。

イスラーム国家では、啓典の民についての法的見解として、「彼らは私たちと同じ権利を持ち、私たちと同じ義務を負う」とする。啓典の民はイスラーム国家が与える社会的保障や諸利益に関してムスリムと同等の資格を持つている。またムスリムは啓典の民に対し反感や偏見を持つてはいけないと警告されている。預言者ムハンマドは「啓典の民を傷つける者は、私を個人的に傷つけていることになる」と述べている。

事実、イスラーム社会は最初から多元的な共生社会であった。ムハンマドがマディーナに移住し、最初のイスラーム国家を設立したとき、当時そこに住んでいたユダヤ教徒をはじめとするすべての部族と協定を結び、宗教上の自由、ムスリムと対等の権利や義務を約束した。

イスラームは排他的な宗教ではない。その教えは（多くの人びとが考えるような「アラブ人」や「東洋」の宗教ではなく）、全人類への普遍的な呼びかけである。イスラームは啓典の民を含めすべての人類に呼びかけていますが、たとえ彼らがイスラームに入信しなくとも、その人が敵であるとか、不信心者であると決め付けてはいらない。実際に、「不信心者」という言葉の起源は西洋であり、十字軍がムスリムを不信心者と呼んだのである。

善き行いは、それがどこに存在しようと常にイスラームは認めている。「かれら（全部）

たイブラーヒーム、イスマーイール、イスハーケ、ヤアコープと諸支部族に啓示されたものと、ムーサーとイーサーに与えられたものと、主から預言者たちに下されたものを信じます。かれらの間のどちらにも、差別をつけません。かれにわたしたちは服従、帰依します。」（第2章136節）

イスラームという言葉は文字通り「神の意思への服従」を意味する。

ムスリムは啓典の民が与える食べ物（アルコールや豚など特別に禁じられているものを除いて）を食べ、自分たちの食べ物を彼らに与えることでお返しをすることがイスラームで許されている。

「啓典を受けられた民の食べ物は、あなたがたに合法であり、あなたがたの食べ物は、かれらにも合法である。」（第5章5節）。さらにムスリムの男性はユダヤ教徒やキリスト教徒の女性との結婚が許されている。「また信者の貞節な女、あなたがた以前に、啓典を受けられた民の中の貞節な女も。もしあながたが（貞節な）女に姦淫や密通をせずに、きちんと婚資を与えるならば許される。」（第5章5節）。そのような状況でムスリムの夫が、妻にイスラームに改宗するように強いることは違法である。なぜなら「宗教には強制があつてはならない。」（第2章256節）というクルアーンの命令に反するから

である。私見ではあるが、ムスリムを排斥しようというただそれだけの目的のために政治的に結び付けられているのである。現代の文明をより適切に表現するならば、「ユダヤ教とキリスト教とイスラームに共通した」と表現しなければならない。この三大宗教はいずれもイブラーヒーム（アブラハム）の伝承に根ざしており、イスラーム文明の時代に現在文明の礎を築いたのである。ムスリム、ユダヤ教徒、キリスト教徒、さらにその他の人びとは寛容と協調の枠組みの下で安全かつ公正に生活を送ってきたのである。

三大宗教に多くの共通点があるとはいっても、イブラーヒームの信仰に由来するイスラームと他の共同体の間に存在する教義上の違いを見ることも有益である。他の宗教を敵対視したり攻撃するためではなく、相違点の概略を描くことによって、蔓延している多くの憎悪や反感の根底にある無知や誤解による中傷を続けるよりは、ユダヤ教徒とキリスト教徒の読者がイスラームに対する彼らの立場を明らかにし、評価し直すために役立てるためである。

おそらくイスラームと他の二大宗教の最も大きな違いは、ムスリムがどのように神を認識し、神に対してもどのように自分たちを表現するかにある。神はその属性において永遠であり、無限であり、絶対である。私たちは神の形を想像することができない。また神を限りのある存在、あるいは神を無限でない存在として描く方法で神を定義することはできな

が同様なのではない。啓典の民の中にも正しい一団があつて、夜の間アッラーの啓示を読誦し、また（主の御前に）サジダする。」（第3章113節）。個人であれ、集団であれ、神の慈悲を独り占めできると主張したり、逆に他の人たちへの神の慈悲を否定することはできない。「本当に（クルアーンを）信じる者、ユダヤ教徒、キリスト教徒とサービス教徒で、アッラーと最後の（審判の）日とを信じて、善行に勤しむ者は、かれらの主の御許で、報奨を授かるであろう。かれらには、恐れもなく憂いもないであろう。」（第2章62節）

教義の違い

イスラームはユダヤ教やキリスト教と多くの共通点を持ち、その実像も西洋の多くの人が抱いている固定観念とはかけ離れたものである。実際にイスラームは、キリスト教とユダヤ教との間よりも、キリスト教またはユダヤ教により近い宗教である。イスラームは「の二つの宗教を聖なる啓示に基づく宗教であると認めているが、ユダヤ教徒はキリスト教もイスラームも認めていない。」の点からすると、「ユダヤ教とキリスト教を融合した、もしくはユダヤ教とキリスト教に共通の（Judeo-Christian）」という表現は誤った呼び方

ユダヤ教徒

ムスリムはユダヤ教徒を従兄弟と呼ぶことがある。それはイブラーヒーム（アブラハム）が、イスマーイール（イシュマエル）を通じてムハンマドの祖先であり、またイスハーアク（イサク）を通じてヤアコープ（ヤコブ）およびその子孫であるユダヤ教徒の祖先になるからである。周知の通り、イブラーヒームはサーラ（サラ）と結婚するが、サーラは老齢になるまで不妊であった。サーラの息子であるイスハーアクが生まれる前に、イブラーヒームはハージャル（ハガル）と結婚し、彼女はイスマーイールを懷妊し出産している。クルアーンによると、イブラーヒームを試すため、また神の御心に沿わせるために、神はイブラーヒームに一人息子のイスマーイールを、何世紀かの間にマッカとなりやがて預言者ムハンマドが生まれることになる場所に連れて行くように命じた。食料の蓄えがなくなり、息子のために水を探し求めた母親ハージャルの苦しみと突然ザムザムの泉が溢れ出たことは、毎年行われるハッジ（大巡礼）の儀式の中でカアバを訪れるムスリムが思い起こす故事となっている。このマスジドは唯一の神を崇拜するために、イブラーヒームとイスマーイールが建てた最初のマスジドとされる。神は、すでに子供を産むことができない年齢になつていたサーラを懷妊させ、ヤアコープの父となるイスハーアクを産ませた。ヤアコープはの

いのである。神を語るときには、最も敬虔な言葉が使われている。そのため、神がエデンの園を歩いたとか、また神が天使を集めて、「見よ。人間はわれ等に似せて創られた」とか、神は（洪水の後）自らの決定と行動を後悔し、「そうしなければよかった」と言つたとか、神は六日間働き、七日目に休息したとか、人間が神と取つ組み合いをし、神をほとんど打ち負かしたなどといった（聖書の）記述は、ムスリムにとつて心理的に受け入れられないのである。

もうひとつの違いは、神が任命した預言者と使徒に関する考え方である。ムスリムは、預言者と使徒は神のメッセージを伝え、彼らの共同体の模範となるために神によつて特別に選ばれた人びとであると信じている。社会が偶像崇拜に陥つたり、人間が神に配偶者を結びつけたり、神が命じる道徳律から逸脱した場合は、必ず預言者や使徒が送られ、正しい道を思い起こさせ過ちを正してきた。もし完全無欠な人間がいるとすれば、預言者と使徒はその典型であり、完璧さを絵に描いたような人たちである。聖書の中で神の預言者たちが他人を欺いたり、性的な罪を犯す場面が描かれているが、そのような預言者が神の法に反して重大な罪を犯すといった考え方は、イスラームの教えとはおよそかけ離れている。ムスリムとして考えられる唯一の結論として、このような預言者の描写は人間が聖典を改ざんした結果としか思われないのである。

ハーケがイブラーヒームの一人息子であった時代はなく、イスハーケはイスマーメールよりも十三歳年下であり（創世記によると）、父親が亡くなつたときこの二人の息子はまだ生きていたはずだからである。

ムスリムは、神の命令に従い一人息子（イスマーメール）を神に奉げようとしたイブラーヒームの試練を偲んで、ハッジ¹⁰（巡礼）の儀式の中で毎年祝つてゐる。ムスリムにとってイスマーメールもイスハーケも同様に愛される尊い預言者である。

クルアーンは、ユダヤ教徒やイスラエルの子孫たちについてのべ五十回取り上げてゐる。この五十回は、ムーサー（百三十七回）とタウラー（律法／十八回）の引用を除いた回数である。クルアーンはユダヤ教徒とイスラエルの子孫を大いに褒め称える一方で、厳しく非難し、責めている。

イスラエルの子孫たちよ、われがあなたがたに与えた恩恵と、（わが啓示を）万民に先んじ（て下し）たことを念い起せ。そして誰も外の者のために身代りになれない日のために、またどんな執り成しも許されず、償いも受け入れられず、また誰一人助けることのできない（日のために）その身を守りなさい。そしてわれがあなたがたをフィルアウンの一族から救つたときを思い起せ。かれらはあなたがたを重い刑に服させ、

¹⁰ ズル・ヒッジャ（巡礼月）にカアバに巡礼に行くこと。カアバはイブラーヒーム（アブラハム）と彼の息子イスマーメール（イシュマエル）が神を信仰するために最初に建立了した神殿であり、現在のサウディアラビアのマッカにある。ハッジの最後には犠牲祭が行われる。身体的にも金銭的にもマッカへ旅する余裕のあるムスリムは、少なくとも一生に一度巡礼に行くことが義務とされている。

ちにイスラエルと改名し、12人の子供の父となつた。

聖書がハージヤルをイブラーヒームの妻として、またサーラの召使として描いているため（創世記16・3）、ユダヤ教徒とキリスト教徒の大半がイスマーイールをイブラーヒームの嫡出子と認めていないことに、ムスリムたちは若干当惑気味である。私が持っている聖書欽定訳では、イスマーイールの名前は用語集にも見当たらず、彼の物語はイブラーヒームの名前を検索することによってやつと確認することができた。創世記（16・16・17・23・25・26・21・11）では、繰り返しイスマーイールを「かれ（イブラーヒームの）の息子」と呼ぶため、息子であることは否定できないはずである。さらに、イスラエルの子供たちの母方を辿ると、創世記の中で、イスラエルが二人の従姉妹ラシエルとレア、そして彼女たちの召使であるジルパとビルハと結婚し、その四人の妻からイスラエルの十二人の子供が生まれたと記されている。その十二人の子供の中で母親が召使であるからといってイスラエルの子供として劣つていると主張した者はこれまで誰もいない。イスマーイールには別の基準があるのだろうか。創世記（22・2）の中で、神はイブラーヒームに次のように言っている。「君の子、君の愛する独子、イスハーカを連れてモリヤの地に赴き、そこでイスハーカをわたしが君に示す一つの山の上で半切と燔祭として奉げなさい」。この説明について、ムスリムはイスハーカの名前が故意に挿入されたと感じている。というのも、イス

⁹ 欽定訳聖書、英国：Collins World, 1975.

は褒め称えてはいない。実際にクルアーンは、異教徒や偶像崇拜者の世界の中でユダヤ教徒が長年にわたつて唯一の一神教徒であつたことを十分に考慮している。しかしキリスト教とイスラームの登場によつて、ユダヤ教徒が唯一の一神教徒であり、それがゆえに選ばれた民であると主張する根拠を失つてしまつたのである。少なくともキリスト教徒とムスリムが感じていることである。

イスラームは選ばれた民という考え方を認めていない。神はクルアーンの中で次のように述べている。

人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。

これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたの中最も主を畏れる者である。（第49章13節）

人間の良し悪しは、その人が特別な祖先から生まれたからではなく、人格の高潔さのみで決まる。そのことについて、クルアーンの中で、神がイブラヒーム（アブラハム）に約束した場面で次のように生き生きと描かれている。

あなたがたの男児を殺し、女児を生かしておいた。それはあなたがたの主からの厳しい試練であった。またわれがあなたがたのために海を分けて、あなたがたを救い、あなたがたが見ている前で、フィルアウンの一族を溺れさせたときのことと思い起せ。また、われが四十夜にわたり、ムーサーと約束を結んだときのこと。そのときあなたがたはかれのいない間に仔牛を神として拝し、不義を行つた。それでも、その後われはあなたがたを許した。必ずあなたがたは感謝するであろう。（第2章47・52節）

われは、イスラエルの子孫に安全な居住の地を定め、凡ての良いものを授けた。かれらに（悪い）知識が来るまでは意見の相異はなかつた。本当にあなたの主は、審判の日にかれらが争つていたことについて、かれらの間を裁決されるであろう。（第10章93節）

クルアーンがユダヤ教徒を非難するのは、クルアーンがユダヤ教の教えに反していると見なす行為をユダヤ教徒が行つた場合だけである。これは注目に値する（聖書も複数箇所でユダヤ教徒が神に背いたとみなしている。／列王記II 17・7・23など）。しかしクルアーンは、ユダヤ教徒を民族として非難したり、特定の民族や人種として中傷したり、あるいは

コブ)、またはイブラーヒームの長男イスマーイール(イシュマエル)であるにもかかわらず、現在のイスラエル人の「帰郷の法律」から自ずと除外される。パレスチナのムスリムやキリスト教徒の誰しも、数千年も前から祖先の土地である祖国から自分たちが追放されるとか、その地で二流市民として暮らさなければならないよそ者とは思っていない。彼らは、「パレスチナ人などという民族はない。彼らは存在しないのである」と言ったゴルダ・メイヤーの言葉¹²や「この国で両者が一緒に暮らす余裕はないことをわれわれ自身の間で明確にしなければならない」と発言したユダヤ国民基金の元理事長であるジョセフ・ワイスの言葉¹³を決して受け入れることはできないのである。

ムスリムはパレスチナ問題を宗教間の対立ではなく、異なる解釈と目的を持つた二つの集団の対立であると見なしている。イブラーヒームに由来する三大宗教のいずれも、パレスチナ問題の解決は平和的な試みによるものでなければならないと考えている。真に平和的な解決とは正義と公平に基づくものであり、それが永続的な唯一の解決方法である。その実現のためには先見性のある政治力が必要となる。

私たちは、パレスチナの地が寛容なる精神と神々しさが表わすイブラーヒームゆかりの三大宗教の聖地として多様性を包括する統一を讃え、分裂するのではなくひとつになつていくことを信じている。そしてこの三大宗教の信徒たちが謙虚に神の声に耳を傾け、心を

¹² *Sunday Times* (London), 1969, 15 June. R. Garaudy, *The Case of Israel* (London: Shorouk International, 1983).

¹³ *Davar* ([Israel]), 1967, 29 September.

またイブラーヒームが、ある御言葉で主から試みられ、かれがそれを果たしたときを思い起せ。「われはあなたを、人びとの導師としよう。」と主は仰せられた。かれは「またわたしの子孫までですか。」と申し上げたところ、「われの約束は、悪行をした者たちには及ばない。」と仰せられた。

(第2章124節)

現在アラブ人とユダヤ人の間にみられる対立は、神がイブラーヒームに与えた契約について聖書が近視眼的に強調していることに起因している。「わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土をあなたとあなたの後のあなたの子孫に、永遠の所有として与える。」(創世記17:8)。パレスチナ問題の複雑さは、「イブラーヒームの子孫」をユダヤ教徒に限定する彼らの信仰が原因である。現在のユダヤ教徒の多くは、約百年前まで主にムスリムとキリスト教徒のパレスチナ人が暮らし、少数のユダヤ教徒の集団と平和に共存していた土地に自分たちだけが居住権を持つていると信じている。のちに多くのパレスチナ人たちは、イスラエルを建国したシオニストたちによつて祖国を追わることとなつた。¹¹さらにキリスト教またはイスラームに改宗したイスラエルの子孫は、イスラエルの正統の子孫(イブラーヒームの息子のイスハーア(イサク)の息子の預言者ヤアコーブ(ヤ

¹¹ この移住の歴史は、Elias Chacour著の "Blood Brothers" (Grand Rapids: Chosen Books, 1984) を参照。

ヤ教徒はスペインから追放された。ムスリムとユダヤ教徒は、過去の約束に反して、自らの宗教を守ることは違法とされた。キリスト教に改宗しなければ、死刑または追放の刑に処せられたのである。多くのユダヤ教徒は、イスラームのハリーファ（カリフ）が統治するトルコへ行く道を選んだ。スルタンは彼らを寛大に受け入れ、フェルディナンドとイザベルがユダヤ教徒を追放したことを次のように嘲った。「彼らは自分たちの王国を衰退させ、私の王国を豊かにした」。ムスリムによるスペイン統治時代はユダヤ教徒が文明の発展に大きく貢献した時代であった。その最も有名な例が偉大なマイモニデスである。彼はゴルドバのムスリムの学者イブン・ルシュド（アヴェロエス）の弟子であった。マイモニデスはのちにエジプトに移住し、サラーフィーディーン（十字軍で有名なサラディン）の侍医となつたのである。

イスラエルの学者、歴史家であり、元外務大臣であつたアッバ・エバンは、彼の著書「My People (わが民)」¹⁵（テレビのシリーズ番組となつた）のなかで、「歴史上ユダヤ人が差別される」となく公平に扱われた時代が二つあつた。それはまずムスリム統治時代のスペイン、次が現在のアメリカ合衆国である」と述べている。何世紀もの間、ユダヤ人はイスラーム諸国で安全を保障され繁栄を享受してきた。今日に至るまで、多くのイスラーム諸国はユダヤ人社会を受け入れ、パレスチナ問題があるにもかかわらず、彼らはムスリムやキリ

¹⁵ Ebban, Abba. *My people*. New York: Behrman, 1968.

開くならば、良識と宗教の双方が問題解決の道筋を指示してくれるであろう。

歴史的にムスリムとユダヤ教徒の関係は不安定になることはあったが、イスラームが信仰上ユダヤ教に悪意を抱いたためではない。対立はそのときの状況によるものであり、正当な理由に基づいたものではない。しかし、私たちはムスリムの歴史が常にイスラームの教えを正しく代表してきたと主張すべきではない。ことに独裁的な支配体制の下では、ユダヤ教徒もキリスト教徒も虐待されてきたが、ムスリムも例外ではない。彼らもまた同様にひどく苦しめられてきた。ムスリムの世界では二十世紀のホロコーストをはじめ、ヨーロッパのキリスト教世界で何世紀にもわたってユダヤ人が苦しんだ残虐行為のようなものを彼らに味わわせたことはない。ユダヤ教徒が神の殺人者の汚名を着せられ、いく度も大虐殺という償いをさせられてきたのはキリスト教世界においてであった。ヨーロッパ人们は敵がムスリムであったときでさえ、常に多くのユダヤ教徒を巻き添えにしてきた。最初の十字軍は、ヨーロッパのユダヤ人の大量虐殺で始められ、そこに「私たちは東方で神の敵と戦う長い進軍を始めた。私たちの面前でまず注意しなければならないのは、最大の敵ユダヤ教徒である。彼らをまず処分しなければならない」といった悪意に満ちた理由づけがなされたのである。

一四九二年、スペインのフェルディナンドとイザベルがムスリムに勝利した結果、ユダ

¹⁴ Cohn, Norman. *The Pursuit of the Millennium*. Bamber Gascoigne, *The Christians* (London: Jonathan Cape, 1977).

があったことである。』

こうして、かの女はかれ（息子）を妊娠したので、遠い所に引き籠つた。だが分娩の苦痛のために、ナツメヤシの幹に赴き、かの女は言つた。「ああ、こんなことになる前に、わたしは亡きものになり、忘却の中に消えたかった。」そのとき（声があつて）かの女を下の方から呼んだ。「悲しんではならない。主はあなたの足もとに小川を創られた。またナツメヤシの幹を、あなたの方に振り動かせ。新鮮な熟したナツメヤシの実が落ちてこよう。食べかつ飲んで、あなたの目を冷しなさい。それでもし誰かを見たならば、『わたしは慈悲深き主に、齋戒の約束をしました。それで今日は、誰とも御話いたしません。』と言つてやるがいい。』

それからかの女は、かれ（息子）を抱いて自分の人びとの許に帰つて來た。かれらは言つた。「マルヤムよ、あなたは、何と大変なことをしてくれたのか。ハールーンの姉妹よ、あなたの父は悪い人ではなかつた。母親も不貞の女ではなかつたのだが。」そこでかの女は、かれ（息子）を指さした。かれらは言つた。「どうしてわたしたちは、搖籠の中の赤ん坊に話すことができるようか。」（そのとき）かれ（息子）は言つた。「わたしは、

スト教徒と対等に暮らしている。

キリスト教徒

またこの啓典の中で、マルヤム（の物語）を述べよ。かの女が家族から離れて東の場に引き籠つたとき、かの女はかれらから（身をさえぎる）幕を垂れた。そのときわれはわが聖靈（ジブリール）を遣わした。かれは一人の立派な人間の姿でかの女の前に現われた。かの女は言つた。「あなた（ジブリール）に対して慈悲深き御方の御加護を祈ります。もしあなたが、主を畏れておられるならば（わたしに近寄らないで下さい）」かれは言つた。「わたしは、あなたの主から遣わされた使徒に過ぎない。清純な息子をあなたに授ける（知らせの）ために。」かの女は言つた。「未だかつて、誰もわたしに触れません。またわたしは不貞でもありません。どうしてわたしに息子がありましよう。」かれ（天使）は言つた。「そうであろう。（だが）あなたの主は仰せられる。『それはわれにとつては容易なことである。それでかれ（息子）を人びとへの印となし、またわれからの慈悲とするためである。（これは既に）アッラーの御命令

また天使たちがこう言つたときを思え。「マルヤムよ、本当にアッラーは直接、自身の御言葉で、あなたに吉報を伝えられる。マルヤムの子、その名はマスィーフ・イーサー、かれは現世でも来世でも高い栄誉を得、また（アッラーの）側近の一人であろう。」（第3章45節）

マルヤムの子マスィーフ・イーサーは、只アッラーの使徒である。マルヤムに授けられたかれの御言葉であり、かれからの靈である。（第4章171節）

また自分の貞節を守つた女（マルヤム）である。われはかの女にわが靈を吹き込み、かの女とその子を万有のための印とした。（第21章91節）

ユダヤ教徒とキリスト教徒の間の明確で根本的な違いは、イーサーに対する考え方にある。ムスリムは、イーサーが当時のユダヤの民に送られた正真正銘の神の使徒であつたと信じている。クルアーン曰く、「信仰する者よ、あなたがたはアッラーの助力者になれ。マルヤムの子イーサーが、その弟子たちに次のように言つた。『アッラーの（道の）ために、

本当にアッラーのしもべです。かれは啓典をわたしに与え、またわたしを預言者になりました。またかれは、わたしが何處にいようと祝福を与えます。また生命のある限り礼拝を捧げ、喜捨をするよう、わたしに御命じになりました。またわたしの母に孝養を尽くさせ、高慢な恵まれない者になされませんでした。またわたしの出生の日、死去の日、復活の日に、わたしの上に平安がありますように。」（第19章16・33節）

以上がクルアーンの中のイーサー（イエス）の物語である。クルアーンはイーサーを「イーサー」として二十五回、また「マスイーフ（メシア）」として十一回言及しているが、「マルヤム（マリア）の息子」は2回出てくるだけである。マルヤムはその名で三十四回呼ばれ、「貞節を守ったもの」と二回表現されている。ムスリムは、キリスト教の著名な学者や専門家、さらには嘆かわしいことに聖職者までが彼らの著書の中でイスラームとムスリムをキリストの敵として描いているのを読むと、驚きを通りこしてあきれてしまう。そうした誤解や偏見に満ちたイスラーム観を持つ多くのキリスト教徒は、お互いの教義上の違いにもかかわらず、ムスリムがイーサーとマルヤムに抱いている敬意と愛情について話すと、逆に驚愕する。イスラームはイーサーやマルヤムを「よなく尊重している。その証として、以下のクルアーンの節を引用すれば十分であろう。

以上のことおり、イスラームは、キリストの磔をユダヤ教徒のせいであると責めていない。捕えられ十字架にかけられた者はイーサー（イエス）ではなかつた（おそらくジユーダス・エスカリオット）とする見解は、一部のキリスト教徒の間で受け入れられている。クルアーンは、イーサーを認めないユダヤ教徒を非難し、次のように述べている。

こうしてわれはムーサーに啓典を授け、使徒たちにその後を継がせた。またわれはマルヤムの子イーサーに、明証を授け、更に聖靈でかれを強めた。それなのにあなたがた（ユダヤ人たち）は、使徒が自分たちの心にそわないものをもたらす度に、傲慢になつた。ある者を虚言者呼ばかりし、またある者を殺害した。（第2章87節）

ムスリムは、イーサーが神のお許しを得て行つた奇跡を信じている。それについてクルアーンは次のように記している。

アッラーがこう仰せられたときを思い起せ。「マルヤムの子イーサーよ、あなたとあなたの母が与えられた、われの恩恵を念じなさい。われは聖靈によつてあなたを強め、振り籠の中でも、成人してからも人びとに語らせるようにした。またわれは啓典と英

「誰がわたしの助力者であるのか。」弟子たちは（答えて）、『わたしたちがアッラーの助力者です。』と言った。そのさいイスラエルの子孫たちの一団は信仰し、一団は背を向けた。』

（第61章41節）

イーサーを拒み、かれの母親の不貞を責めた者はクルアーンの中で繰り返し非難されている。

かれらは不信心のため、またマルヤムに対する激しい中傷の言葉のために、「わたしたちはアッラーの使徒、マルヤムの子マスイーフ（メシア）、イーサーを殺したぞ」という言葉のために（心を封じられた）。だがかれらがかれ（イーサー）を殺したのでもなく、またかれを十字架にかけたのでもない。只かれらにそう見えたまでである。本当にこのことについて議論する者は、それに疑問を抱いている。かれらはそれについて（確かに）知識はなく、只臆測するだけである。確實にかれを殺したというわけではなく。いや、アッラーはかれを、御側に召されたのである。アッラーは偉力ならびなく英明であられる。（第4章156・158節）

ここでムスリムとキリスト教徒の違いを考えてみよう。そのなかでも最も重要なことは、処女マルヤム（マリア）の貞節を信じるムスリムが、イーサー（イエス）が神によつて処女懷胎で「創造された」と言うが、神がイエスの父親になつたとは言わない点である。ムスリムにとって、神は父親といった生物的特徴を超えた存在である。クルアーンで述べられているように、神は永遠であり、絶対的存在である。「言え、『かれはアッラー、唯一なる御方であられる。アッラーは、自存され、御産みなさらないし、御産れになられたのではない、かれに比べ得る、何ものもない。』」（第112章4節）。イーサーが文字通り神の子であるという考え方は、イスラームの教えと相容れないものである。（形而上学的に人間はすべて神の子であるということは受け入れられるが）

またマルヤムが神の母であるという教えも受け入れられない。マルヤムもイーサーも人間であり、二人ともイスラームでは高く尊重されているが、イスラームの教えによると、イーサーが聖母マリアの処女懷胎で生まれたからといって、「神がもうけた唯一の子」にはならないのである。クルアーンいわく、「イーサーはアッラーの御許では、丁度アーダムと同じである。かれが泥でかれ（アーダム）を創られ、それに『有れ。』と仰せになる

知と律法と福音をあなたに教えた。またあなたはわれの許しの許に、泥で鳥を形作り、われの許しの許に、これに息吹して鳥とした。あなたはまたわれの許しの許に、生まれつきの盲人と癪患者を癒した。またあなたはわれの許しの許に、死者を甦らせた。またわれはあなたが明証をもつてイスラエルの子孫の許に赴いたとき、かれらの手を押えて守つてやつた。かれらの中の不信心な者は、『これは明らかに魔術に過ぎない。』と言つた。（第5章110節）

こうした称賛はイーサーの誠実な信者、すなわち初期のキリスト教徒や預言者ムハンマドの時代のキリスト教徒にも及んでいる。

それからわが使徒を、かれらの足跡に従わせ、更にマルヤムの子イーサーを遣わし、福音を授け、またかれらに従う者の胸に博愛と慈悲の情を持たせた。（第57章27節）

またあなたは、信仰する者に一番親愛の情を抱いているのは、「わたしたちはキリスト教徒です。」と言う者であることを知るであろう。これはかれらの間に、司祭と修道士がいて、かれらが高慢でないためである。

ムスリムは、新約聖書の中にこれと同じようなイーサーの言葉を見つけている。「なぜわたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善いものはだれもない。」（マルコ10・18）

新約聖書によると、イーサーが十字架にかけられたとき、かれは「エロイ、エロイ、ラマ、サバチャタニ」と嘆いた。翻訳すると「わが神よ、わが神よ、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」である（マルコ15・34）。明らかにかれは自分以外のだれかと話していたと思われる。イスラームには、「三位一体の考え方そのものがありえない」「『三（位）』などと言つてはならない。止めなさい。それがあなたがたのためになる。誠にアッラーは唯一の神であられる。かれに讃えあれ。かれに、何で子があろう。天にあり、地にある凡てのものは、アッラーの有である。」（第4章171節）。ムスリムは、無限を三位に分割または区分できるとは考えない。またイーサー（イエス）や聖霊を神格化することは認められない。ムスリムは、イーサーが「唯一の神」の中の聖なる三人について話したこともなく、また神に関するイーサーの考え方は神が唯一（三位ではない）であることを説いたイーサー以前の預言者の考え方と変わらないと、認めている。さらに、三位一体の考え方は初期のキリスト教徒の間では知られていなかつた。この考え方は歴史的に、紀元三二五

とかれは（人間として）存在した。」（第3章59節）

クルアーンによると、イーサーは自分も母親も神であるとは決して言っていない。

またアッラーがこのように仰せられたときを思ふ。「マルヤムの子イーサーよ、あなたは『アッラーの外に、わたしとわたしの母とを二柱の神とせよ。』と人びとに告げたか。」かれは申し上げた。「あなたに讃えあれ。わたしに権能のないことを、わたしは言うべきでありません。もしわたしがそれを言つたならば、必ずあなたは知つておられます。あなたは、わたしの心の中を知つておられます。だがわたしはあなたの御心の中は知りません。本当にあなたは凡ての奥義を熟知なされていてます。わたしはあなたに命じられたこと以外は、決してかれらに告げません。『わたしの主であり、あなたがたの主であられるアッラーに仕えなさい。』（と言ふ以外には）わたしがかれらの中にいた間は、わたしはかれらの証人であります。あなたがわたしを御呼びになつた後は、あなたがかれらの監視者であり、またあなたは、凡てのことの立証者であります。あなたがたとえかれらを罰せられても、誠にかれらはあなたのしもべです。またあなたがかれらを御赦しなされても、本当にあなたこそは、偉力ならびなく英明であられます。」（第5章116-118節）

かしいところを、あらわに示そうとして言つた。『あなたがたの主が、この樹に近付くことを禁じられたのは、あなたがたが天使になり、または永遠に生きる（のを恐れられた）からである。』そしてかれは、かれら両人に誓つ（て言つ）た。『わたしはあなたがたの心からの忠告者である。』（第7章20・21節）。かれらは悔い改めた後、「その後、アーダムは、主から御言葉を授かり、主はかれの悔悟を許された。本当にかれは、寛大に許される慈悲深い御方であられる。』（第2章37節）。その後アーダムは預言者に昇格し、人類は神の代理人として地上に送られた。それを知つた悪魔はかれらを追跡し墮落させようとしたが、神は悪魔の企みから守るために導きを与えることを約束した。しかし神の教えに背を向けるものはその恩恵を受けることができない。人間はすべて無垢のまま生まれる。自分が選択することで自らを汚して罪人になるのは後になつてからのことである。イスラームでは、罪は子供が親から受け継ぐものではない。

この点に関して、イスラームは責任を負うのが個人であることを強調している。「導かれる者はすべて、ただ自分の魂を益するために導かれ、また迷う者はすべて、ただ自分を損うために迷う。重荷を負う者は、他人の重荷を負うこととはできない。』（第17章15節）イスラームでは、他人の代償の犠牲になるという考え方はない。そのため、イーサー（イエス）が人間の罪を贖うために十字架に磔になるという考え方は受け入れられない。イスラーム

年のニカイア公会議でローマ帝国の教義であると宣言され、皇帝コンスタンティヌスの統治下で総力を上げて強要されたのである。ニュー・カソリック・エンサイクロペディア¹⁶は次のように記している。「『三位一体の神』という考え方とは、四世紀以前にはキリスト教徒の信仰の中に完全には確立されていなかつた。」

ムスリムとキリスト教徒のもう一つの違いは、原罪に対する考え方である。聖書によると、悪魔がハウワー（イブ）をそそのかして禁じられた木の実を食べさせるが、その後、ハウワーはアーダム（アダム）に同じことをそそのかして罪を犯させてしまう。二人は罰せられ共に楽園を追放されることとなるが、最初に罪を犯したハウワーはことに厳しく責められた。「女にこう仰せられた。『わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、かれは、あなたを支配することになる。』」（創世記3：16）。キリスト教に共通する教えは、すべての人間がアーダムとハウワーの罪を受け継ぎ、新生児たちのすべてが原罪を背負つて生まれてくるという点にある。

このことについてクルアーンでは、悪魔がアーダムとハウワーの双方を誘惑し、二人は共に罪を犯すが、その後かれらは悔い改め、共に赦され、そして原罪は終わりを告げると述べられている。「その後悪魔（シャイターン）はかれらに囁き、今まで見えなかつた恥

¹⁶ New Catholic Encyclopedia, s.v. "The Holy Trinity."

すことが奨励されている。「被害に對する償いは、（程度において）同等の被害である。だが赦し和解する者に對して、アッラーは報酬を下さる。」（第42章40節）。「かれらを赦し大目に見てやるがいい。アッラーがあなたがたを赦されることを望まないのか。」（第24章22節）

人はいつでも、どこにいても直接神に赦しを求める事ができる。神と自分との間に仲介者は必要でない。男性も女性も直接創造主と結ばれている。彼らが慈悲と赦しを求める事、神はいつでもそれに應えてくださる。死の床にある人の懺悔に對して「わが子よ、あなたたは赦された」と言うようなことは、イスラームにはない。赦すことは神だけの領分であり、神の役割を代行できるものはいない。事実、イスラームにはキリスト教のような修道院はない。神学を研究するものはいるが、彼らは聖職者ではない。神の慈悲が惜しみないことを望んでも、神が私たちを正義で裁くのか（神は絶対に公正である）、慈悲を受けられるかどうか（神は絶対に慈悲深い）はひとえに神の御心一つであり、私たち生きとし生けるものはすべて神に正義で裁かれるよりは慈悲を授けられることを祈る。良心の呵責は誠実かつ真剣でなければならない。それを心に抱いたなら行動で示さなければならない。誰かが財布を盗み、それを返そうとしないで「神よ、赦してください」と言つて何度祈りを捧げてもそれは受け入れられない。第三者が関与する場合は、まずは公正に行う必要がある。

では、神の赦しは誠実な懺悔と正しい行いによって求められるべきであり、償いの血を求める必要はなく、救済は神の慈悲によつて授けられるのである。「また醜惡な行いをしたり、過失を犯した時、アッラーを念じてその罪過の御赦しを請い、「アッラーの外に、誰が罪を赦すことができましよう。」（と祈る者）、またその犯したことを、故意に繰り返さない者。これらの者への報奨は、主からの寛大な御赦しであり……」（第3章135-136節）

神の赦しを願うことができないほどの重い罪というものはない。「自分の魂に背いて過ちを犯したわがしもべたちに言え、『それでもアッラーの慈悲に對して絶望してはならぬ』アッラーは、本当に凡ての罪を赦される。かれは寛容にして慈悲深くあられる。」（第39章53節）。預言者ムハンマドによると、神は次のように仰せられている。「アーダム（アダム）の子孫よ、あなたたちは山ほどの罪を犯してわたしに近づいてくる。そしてわたしに同位者を配することなく、後悔し、わたしを崇拜する。すると、わたしはあなたたちに近づき大いに赦す。」

イエスの血による贖罪という考え方や選ばれた民（神から特権が授けられた選民）といふ考え方を持たないムスリムが神の赦しを強く望むことは、ムスリム自身が寛大であることに表れている。個人や部族、あるいは国家間のどのような出来事であれ、慈悲深くあることがイスラームの教えの真髓である。法律を介して人を罰する場合でさえ、その者を赦

ければならない。

さて、これまでには宗教間の教義上の違いを論じてきたが、ここでイスラーム諸国とキリスト教の国の間の地政学的な歴史を簡単に振り返ることは、決して見当違いではなかろう。イスラームの預言者ムハンマドの時代、世界は二つの勢力、東方のペルシア帝国と西方の東ローマ帝国に支配されていた。ペルシア人はゾロアスター教徒であり、東ローマ（ビザンチン）の人びとはキリスト教徒であつたため、ムスリムは当然キリスト教徒により親しみを感じた。この二つの帝国の間に長年にわたる軍事的な対立が続いており、イスラームが登場した時代の当初は、キリスト教徒の負け戦が続いていた。しかしがるアーンはこの流れが変わることを預言していた。その預言は現実のものとなつた。「ビザンチン（東ローマ）の民は打ち負かされた。近接する地において（打ち負かされた）。だがかれらは、（この）敗北の後（でさえ）数年のうちに勝利を得よう。過去においても未来においても、凡てはアッラーに属する。その日、ムスリムたちはアッラーの勝利を喜ぶであろう。かれは御望みの者に勝利を授けられる。かれは偉力ならびなく慈悲深き御方であられる。」（第30章2-5節）

数年後、イスラームはアラビア半島で領土を広げ、国家としての統一を成し遂げ、ペルシア帝国と東ローマ帝国に挟まれた地で政治的な力を持つようになった。すると両帝国は

ある。

こういった教義の違いは無視できるほど些細なことではないが、そのことでお互に争つたり憎しみ合うことは馬鹿げているし、何も生み出さない。信仰の違いに関する論争は、礼儀正しい討論を通じて最高の倫理観にゆだねるべきである。「また啓典の民と議論するさいには、立派な（態度で）臨め。かれらの中で不義を行ふ者にたいしては別である。それで言つてやるがいい。『わたしたちは、自分たちに下されたものを信じ、あなたがたに下されたものを信じる。わたしたちの神（アッラー）とあなたがたの神（アッラー）は同じである。わたしたちはかれに服従し、（イスラームに）帰依するのである。』」（第29章

46節）

キリスト教徒とムスリムの間に重大な見解の相違があるにもかかわらず、イスラームはむしろ共通の上台を詳細に説き、それを寛大に享受することの方を大切にしている。「言つてやるがいい。『啓典の民よ、わたしたちとあなたがたとの間の共通のことばの下に来なさい。わたしたちはアッラーにだけ仕え、何ものをもかれに配しない。またわたしたちはアッラーを差し置いて、外のものを主として崇ない。』」それでもし、かれらが背き去るならば、言つてやるがいい。（少なくとも）わたしたちは（神の意思に従う）ムスリムであることを証言する。』（第3章64節）。それ以外では、両者の関係は平和的かつ友好的でな

た書物をアラビア語から翻訳して学んだ。印刷技術が考案されたとき、その印刷物の大半がアラビア語の原文からの翻訳であった。

ムスリムの帝国が衰退するとヨーロッパは反撃に出た。そのなかでも重要な歴史的出来事は東方では十字軍であり、西方ではスペインでのイスラーム支配に対するフェルディナンドとイザベラの勝利であった。その結果、異端審問が行われ、ムスリムとユダヤ教徒はスペインから宗教的に抹殺され、新世界の発見、コンキスタドール（征服者）による統治、国家による奴隸貿易の時代が訪れたのである。

十字軍はイスラーム世界の中核を直接侵略する試みであり、その大義名分はエルサレムのキリスト教の聖地をムスリムの手から奪還することであった。十字軍は二世紀にもわたってキリスト教徒の間に宗教的な熱狂を呼び起こし、今なおヨーロッパ人の心の中に巣食つていて。またその熱狂は何らかの形で西洋の文化を形成している。このことは、今日のキリスト教主流派が十字軍を非難し、植民地主義者が主導した戦争に過ぎないと非難しているにもかかわらず続いている。十字軍はキリスト教という宗教の仮面をかぶった虐殺であつた。まさにキリスト教そのものを侮辱した蛮行であつた。

「十字軍」という言葉（crusade：名詞「十字軍」および動詞「十字軍に加わる」の両方の意味において）は、その中に深く組み込まれた感情的なニュアンスを添えた気高い言葉

イスラーム国家の拡大を重大な脅威と見なし、次第に敵意を募らせていった。両帝国に従属するアラブ人の部族を使い、後には帝国の巨大な軍隊を繰り出すこととなつた。この避けられない軍事的対決の結果は、人数も少なく装備も脆弱なイスラーム軍と強大な敵軍を比べると、ほとんど奇跡と呼べるものであつた。

東方ではペルシア帝国が滅亡し、その支配下にあつた人びとの多くがイスラームに帰依する道を選んだ。西方では東ローマ帝国が衰退し、イスラーム帝国は百年足らずの間に、当時知られていた世界の半分以上を支配下に治めた。そしてイスラーム文明が世界の中心となり、ギリシア文明の遺産をキリスト教会による破壊から守り、宗教学、アラビア文学、言語学のみならず、医学、化学、物理学、天文学、数学（「アルジエブラ（算数）」はアラビア語であり、この学問はムスリムが考へ出した）、音楽、哲学など、さまざまな学問分野において偉大な進歩をもたらすこととなつた。そして、あらゆる人種と宗教の人びとがこの文明の発展に大きく寄与していくことになるのである。

ヨーロッパは暗黒時代から抜け出して最初に驚いたことは、人の精神を（宗教その他で）検閲しないこの文明を目の当たりにしたことであつた。アラビア語は学問の言語であつた。ヨーロッパの大学はその初期の時代にムスリムの学者たちを雇い入れ、何世紀にもわたつてムスリムの著わした書物を教材として使つた。ヨーロッパはギリシアの哲学者が著わし

らが通達を出し自らの十字軍を非難している。「あなた方が剣を抜いたのは異教徒ではなくキリスト教徒に対してであつた。あなた方が占領したのはエルサレムではなくコンスタンチノープルであった。あなた方が求めたものは来世の富ではなく現世の富である。あなた方にとつて神聖なものは何もない。既婚の女性、未亡人、さらには修道女まで犯した。あなた方は神の教会の聖域そのものを奪い、祭壇の神聖なるものを盗み、無数の聖者の像と文化財を略奪した。ギリシア教会はあなた方の悪魔の仕業を見ても驚くに値しない」。十字軍がコンスタンチノープルの同胞キリスト教徒にこれほどの悪行の限りを尽くしたのならば、「異教徒」ムスリムにどれほどのことをしたか想像に難くない。

しかし、現代の重要な画期的出来事は、ムスリムに対するローマ法王庁の見解が根本的に変化したことである。この変化がムスリムとキリスト教徒の相互理解の触媒となることが望まれる。一〇九五年最初に十字軍を呼びかけた教皇ウルバン二世（聖人ウルバンと呼ばれる）は、ムスリムを「神を畏れぬ輩、偶像崇拜者、キリストの敵、犬、永遠の業火に宿命づけられている人間のくず」とまで罵つたが、ローマ法王パウロ六世は、一九六五年の回勅ノストラエターテでムスリムをまったく異なる観点から見なし、「また、教会はムスリムに敬意を払っている」と述べている。さらにその文書で、「ムスリムは唯一神であるイブラーヒーム（アブラハム）の神を崇め、イスラームの信仰はイブラーヒームの唯一

¹⁸ Gascoigne, Bamber. *The Christians*. London: Jonathan Cape, 1977.

として定着した。キリスト教世界は多くのキリスト教徒の聖職者や信者たちと一緒に、内省と自己評価の精神によって十字軍について再教育すべきであると、私たちは考えている。こうした試みは、スペインの宗教裁判やナチス・ドイツのホロコーストについてはかなりの成功を収めている。十字軍の本質を見つめ、歩み寄ろうとする努力は、新しい世界秩序の構築に重要な役割を果たし、それぞれ十億人を超える信徒を抱える二つの世界を和解の道へと導くことができよう。その努力は、ボスニアや他の地域でエセ宗教の仮面を被つた同じ様な悪巧みを阻止するために役立つであろう。

ここで十字軍のことを深く掘り下げて取り上げるつもりはないが、キリスト教徒の著書から引用して若干述べてみたい。一〇九九年七月十五日の最初の十字軍によるエルサレム侵略に関する十字軍側の報告書が手元にある。「わが軍は、抜き身の剣を持って町中を駆け抜けた。かれらは誰も容赦しなかつた。命乞いするものさえ殺した。その場にいた者の足首まで浸かるほどの血が流された。なんと言えばよいのだろうか。生き残れるものはいなかつた。女子供も容赦なく殺された。馬は膝まで、いや鞍まで血に浸かりながら歩んでいた。それこそ神の素晴らしい公正な審判であつた。」¹⁷

一二〇二年、第四回目の十字軍はベニスを出発し、その途上でキリスト教国であったコスタンチノープルを通過したが、そこでも暴れ回り、ひどい殺戮を犯したため、法王自

¹⁷ Cohn, Norman. *The Pursuit of the Millennium*. Bamber Gascoigne 著 *The Christians*, 113 で引用。 (London: Jonathan Cape, London, 1977)

神と結びつくことを喜び、崇拝し、礼拝し、喜捨を与える、またイーサー（イエス）とマルヤム（マリア）を尊敬し、イーサーを神の預言者・使徒と見なしている」と詳細な見解を述べている。

十字軍以降、西洋とイスラーム世界の関係は、ヨーロッパ諸国の植民地主義によつて一層歪められてきた。第一次世界大戦後、多くのイスラーム諸国はヨーロッパ諸国の植民地の地位に甘んじていた。長い植民地闘争の末、政治的な独立を勝ち取つたが、かつての植民地主義は今またその形を変え、米国が主導する新植民地主義となつて生き続けている。彼らは占領軍という軍事力によつてではなく、経済力によつて私たちを支配しているのである。

シャリーアの概要

シャリーアの法源

シャリーアの主な法源は、言うまでもなく神の御言葉であるクルアーンである。クルアーンは、人の営みにまつわるほとんどすべての事柄を取り上げている。信仰体系¹⁹から絶対的道徳律、そして許される行為と禁じられた行為の規範にまでおよんでいる。クルアーンは敬神の原則を説明し、家族法、経済原則、刑法、社会行動、条約、戦争と平和の倫理、政府の形態（民主主義のイスラーム的先駆けであると考えられる）、人権、他国や他宗教との関係、遺産相続、税制など多岐にわたって包括的法制度の枠組みを定めている。クルアーンにおいて取り上げられていない人生の事柄はないと言つても過言ではない。

クルアーンは、アキーダ（信仰箇条）とイバーダート（敬神行為）に関する基本的な枠組みと不变の原則を定めているが、ムアーマラート（対人関係）を定める法律の領域は、ごく僅かの例外を除いて、柔軟な一般的ガイドラインによつて規制されている。そのため、対人関係に関するシャリーアの普遍的な規則は限られている。このことはイスラーム法学の発展（判決の派生）に大いに寄与し、いくつかの学派が生まれ、何世紀にもわたりさま

¹⁹ 第1章～第3章を参照。

イスラームの分析

西洋で使われている「宗教」という言葉は、個人や社会の生活のあらゆる面に影響を持つ包括的なシステムであるイスラームの教えを表現する上で、適切ではない。イスラームの信者に対する全体的な取り決めは、「シャリーア（イスラーム法）」と呼ばれる。シャリーアは敬神、道德律、法制度の三分野に分かれるが、その区分はあくまでも暫定的なものであり、相互に密接に関係している。個人にとって道徳的なことが社会道徳の規範を構成するため、道徳は無法状態で存在し得ない。内的自我（良心と意図）と外的自我（行為と觀察可能な行動）は調和すべきであり、対立すべきものではない。個人は神を敬う手順に従うことによって、このイスラームの真実を取得できる。それ以外のことは、不正であり欺瞞である。

はクルアーンやスンナに抵触したり、シャリーアの目的と矛盾してはならない。この点については手短に後述する。シャリーアとは、あらゆる時代や地域を超えてそのまま適用できる固定した法律ではない。シャリーアは、法律の制定を漸次向上させて、変化する状況に対応する人間の創意工夫を認めている。法学が発展した時代に、預言者とクルアーンの教えに由来するイスラームの原則を新しい状況に対応する新しい判断に適用するという司法上の規則が確立された。この例が「必要は禁止事項を覆す」という原則である。たとえば、豚肉は食べることが禁じられているが、砂漠をさ迷う旅人に残された唯一の食べ物が豚肉であるならば、合法な食べ物が手に入るまで生命活動の維持に必要な量だけ食べることが許される。他にも、「二つの悪事が避けられない場合、よりましな方を選ばなければならぬ」、「公共の利益は個人の利益よりも優先される」、「危ないことは取り除くべきである」といった例を挙げることができる。クルアーンおよびスンナと矛盾しない場合の全体的な規則は、「幸福のあるところには必ず神の法がある」ということである。

ざまな場所や時代に即した豊富な見解が積み重ねられた。シャリーアが固定的なものではなく、また時代遅れではないことを証明している。

シャリーアの二番目の法源は、預言者ムハンマドが預言者の権限において命令、禁止、行動、あるいは承認を与えていたるスンナ（言行）である。スンナは折に触れてクルアーンを説明し、例を挙げ、またいくつかの分野について一般論と補足を挙げて詳細に説明している。スンナの学問的研究、特に預言者ムハンマドが残した言葉を認証していくことは、イスラームの歴史学において最も正確を期さねばならない分野である。スンナの編纂者が報告者と証人のつながりを遡る上で守つた厳しいガイドラインによって、またとりわけ記録されたスンナがクルアーンまたは確立された事実や常識と直接または間接的に対立していないことを確かめたスンナ編纂者たちの多大な努力によって、スンナは正確な学問として成立している。

シャリーアの三番目の法源は、問題がクルアーンまたはスンナで解決されていない場合に機能する。それは、新しい問題をクルアーンまたはスンナすでに決定されていることと同等に扱う演繹的推論のプロセスの中で、類推方法を用いる。このプロセスは「イジュティハード（法学上の推論）」と呼ばれ、選ぶべき最善の策を調べるために利用できる（宗教的、科学的、統計的、社会的）証拠を活用することである。ただし、イジュティハード

ドの素晴らしい教えのひとつに、「アッラーは治療方法のない病気をお創りになつていな
い。治療方法がすでに明らかになっているものもあれば、未知のものもある」という言葉
があり、私たちが研究を続ける励みとなつてゐる。預言者ムハンマドは「町の中にペスト
が蔓延しているとき、町の外にいる者は町の中にはいってはならない。すでに町の中にい
る者は出てきてはならない。」と指示したといわれるが、この教えの中には隔離の原則が
定められている。

農業の奨励も素晴らしい。預言者ムハンマドの教えの中に、（一）最後の審判の日が訪
れたときに、手の中に苗木があるならば、それをできるだけ早く植えなさい、（二）土地
を耕すものはだれでも、その土地の収穫物を食べるもののたちのために、たとえ鳥や動物、
さらには収穫物を盗む泥棒のためにさえ報いられる、（三）戦争の手段として木を伐採し
たり燃やしてはならないといわれてゐる。この教えは、環境に配慮し、自然や生命を尊ぶ
ことを命じてゐる。クルアーンの中で水の循環について記されており、預言者ムハンマド
は「水の循環を守り、水の流れを汚してはいけない」と命じてゐる。また「鳥や動物は、
食糧とする以外に殺めてはならない」と説き、動物を慈しみ、むやみに荷役を課してはい
けないと教えてゐる。

シャリーアの目的

シャリーアの最終的な目的は、現世および来世における人びとの幸福である。大まかにいうと、共同体の求めるものは絶対に必要なもの、一般的に必要なもの、補足的に必要なもの（生活を楽しませるもの）に分類され、その重要度の高い順で並んでいる。最も重要なものは最初の分類であり、「シャリーアの五つの目的」と一般的に呼ばれている。その目的は、（一）生命活動の維持と保護、（二）知性の維持と保護、（三）宗教、（四）所有権と財産、（五）種の繁栄と存続である。この五つの目的はさらに細かく分類され、一見したところ些細な詳細を含む小分類に分けられる。適切な道徳的規範および法的規範を伴うこの広大なテーマにここでは深く入り込まないでおくが、各分類の本質的な考え方を概観して、その全容を明らかにしたい。

生命活動の維持と保護 ここには生きる権利とそれを守る義務が含まれる。当然殺人は禁止されるが、合法な戦争や裁判の死刑判決など、いくつかの例外が定められている。病気の治療や予防によって健康を維持することはイスラームの義務である。具体的には食事制限、心身の健康の奨励、また家庭や町の環境衛生のルールなどが挙げられる。ムハンマ

はひとえにムスリムだけでなく、すべての人にとって基本的な権利である。したがって入信を強いることはイスラームの教えに反している。クルアーンでは、「宗教には強制が附てはならない」（第2章256節）と命じている。礼拝所の建築は認められるべきであり、礼拝所に対する侵害はその土地で災いを広げていると見なされる。ムスリムが宗教を理由に攻撃された場合、かれらには防衛する権利と義務がある。

私有財産の保護　所有権は侵すべからざる権利であり、正当な手段で得られた富の蓄財に異議や制限はない。イスラームでは、利子取得、詐欺、窃盗、独占など不当な手段による蓄財は非合法と見なされる。商取引と交換の規則は定められている。資本を持つ権利は、社会の必要性に見合った納税と寄付などの義務を伴う。「ザカート²⁰（喜捨）」は、ムスリムにとって義務であり、その額は財産の約二・五%に相当する。農業、牧畜、不動産、産業による収入には別の課税方式が適用される。各個人の福祉は社会全体の共同責任であり、人は離島で暮らすように振舞うことはできない。

種の繁栄と存続　結婚式を挙げ、婚姻届に署名する婚姻契約による正式な結婚が、男女が家族を築き子供をつくる唯一の合法な方法である（シャリーアは、認められない婚姻関

²⁰ クルアーンいわく、「アッラーがもし、或る人びとに他の人々から身を守らせなかつたならば、修道院も、キリスト教会も、ユダヤ教堂も、またアッラーの御名が常に唱念されているマスジド（イスラームの礼拝堂）も、きっと打ち壊されたであろう。」（第22章40節）

²¹ 文字通りの意味は浄化と成長。ザカートは、合法かつ本当に必要な額以上の富を所有するすべてのムスリムにとって義務である。合法的に必要な額を除いた残高の2.5%を貧しい人たちに与えなければならない。

知性の維持と保護 知性は人間の特質である。知性で善悪を判断し、神の創造と自分自身や周囲の自然を探求することができる。知性を働かせて深く考へることは宗教的な義務であり、クルアーンは人間に授けられた知性を働かせない者を非難している。思想や表現の自由は基本的な人権である。

イスラームでは、知識の探求は権利だけではなく義務でもある。クルアーンが最初に啓示されたときの言葉は、「読め」という命令であり、クルアーンでは、「かれらは同じでない。知識を持つものもいれば、知識を持たないものもいる。また光も闇も同じではない」、「かれのしもべの中で、博学なものほど神に従う」と記されている。科学的な研究は、法的な用語で言い換えると、「神の伝承を神の創造物の中に明らかにすることであり」、それは能力あるものの義務である。知性の検閲は拒否されており、この点について、他人に対してその権限を持つと主張することはできない。知性は検閲から守られるだけではなく、抑圧、恐怖、不安やストレスからも守られるべきである。アルコールや薬物で知性を麻痺させることは、イスラームでは厳しく禁じられている。

宗教の自由 多くのイスラーム学者は宗教の自由を第一にしているが、生命と知性の品位を保つことができなければ、宗教的な義務を果たすことはできない。宗教と敬神の自由

人の人間として独立した所有、相続、教育の絶対的な権利を有している。男女は人間および精神的な存在として平等であり、イスラームの義務（禁止事項）も男女に等しく適用される。

教会と国家

ヨーロッパが教会と国家の分離を決めたことは賢明であった。初期のキリスト教会は（聖書の教えと比べて）生活のあらゆる面を支配していたが、それはイーサー（イエス）の教えに従っていたからではない。思想の自由と科学の進歩を妨げる教会の権力は、多くの有名な史実に反映されている。後には、米国も同じ理由から政教分離のよく似た道を歩んだ。ひとつのが宗教的に多様な社会で他の人々を支配したり、宗教の自由に介入させないためであつた。初期の米国移民たちは、ヨーロッパのキリスト教世界を支配していた不寛容と迫害から逃げ出したのである。

私は、教会と国家の分離はキリスト教の本質的な考え方と一致していると考えている。キリスト教の教えの主要な目的は人間の魂を浄化し、人間の品格を高めることであり、国

係を詳細に説明している)。血筋の正当性(親の身元が分かっている合法な出生)および親子関係を正確に知る権利は絶対条件である。子育てでは、生後二年間授乳することが望ましいとされている。

婚外交渉(婚前交渉を含む)は罪であり、信用できる四人の証人がいれば法的な処罰の対象となる。家族計画(自然のまたは人工的な手段)は許されるが、生命を抹殺することは許されない(中絶・胎児は生存権、遺産や贈与の相続・受領権を持っている)。受胎の努力や不妊治療は許されているが、それはあくまでシャリーアで認められている範囲内のことである。

西洋式の養子縁組はイスラームでは認められていないが、里親や貧しい子供の支援は慈善行為として奨励されている。ただし、実際に血のつながりがないのに血縁であると偽ることは認められていない。子供には出生の真実が知らされる。家庭の中で一緒に育てられた血の繋がりのない子供が成人して、里親の実子に結婚を申し込んだ場合、二人は兄妹であるという理由でそのプロポーズを拒むことはできない。かれらは実の兄妹ではない。

シャリーアでは、配偶者や親子の間の権利と義務が詳しく説明されている。家族の方や、相続の決まりが定められている。家庭の扶養は夫の義務であるが、妻の経済的貢献は彼女の選択にまかされている。女性には働く権利があり(家事と両立できる場合)、一

トーは、日ごと無意味になつてゐる。そして物事がこの同じ方向に進み続けるならば、これらのもつとをすべて削除する憲法改正が現実に施行されるまで長くかかるのである。

イスラーム諸国のムスリムはイスラーム法が統治することを望んでいると聞いた西洋人は、一齊に非難し、落胆する。教会と国家を分離せざるを得なかつたヨーロッパの不幸な歴史のせいだ、西洋人はたちどころに政教一致の考え方を拒絶し、ヨーロッパが教会の抑圧的な権威の下で苦しんだ暗黒時代への逆戻りと同じであると考えてしまう。

イスラームの状況を見ると、明らかに政教分離の原則を適用することはできない。キリスト教世界には国家がないが、イスラームには教会がないために、一方の状況をそのまま他方に当てはめることはできない。イスラームには学者はあるが、聖職者はいない。また司祭職の教育機関はない。一部のイスラーム諸国ではイスラームの学問を修めた卒業生が特別な衣装を身につけることはあるが、そのことに特別な宗教的意味はない。彼らが聖職者になつたり、一般的のムスリムよりも高い地位にあるということはない。イスラームの初期の時代には、特別な服装を身につけることはなかつた。むしろ、軍人や警察官の制服、医者の白衣など、特別な集団の特別な衣装は後に考案され社会的に認められたものである。宗教の知識や研究はすべての人に開かれており、宗教の解釈はエリート集団の独占や特権

家組織を求める事ではない。新約聖書によると、イーサーの王国は現世ではない。新約聖書によると、イーサーはローマ帝国の皇帝に敬意を払つことが合法かどうかをたずねられたとき、皇帝の肖像が彫られているコインを見て、次のように答えていた。「カエサルのものはカエサルに、しかし神のものは神に返しなさい」。米国のムスリムは他のあらゆる公正な人びとと同じように、偏狭な考えに陥ることなく、また他人を迫害することなく、あらゆる宗教の自由を認める多元的な考え方を評価している。実際のところ、この考え方にはイスラームの教えと共通するものである。

欧米の多くのムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒が感じている懸念をここで表現することは時宜を得ているであろう。彼らは、政教分離の原則が悪用され、利用されたせいで、神の存在、また神から授けられた道徳や品性の普遍的な価値が人びとの日常生活から取り除かれてしまつたと感じている。神が「死んだ」か否かに関する論争は、過去四十年間米国のメディアで繰り広げられ、多くの人びとの考え方へ影響を及ぼしてきた。神は死んでいないと信じる多くの人びとは、実際のところ、個人また国家としていかに生きるべきかについて、神がわれわれに教える権限を認めなくなつてしまつた。道徳的な行いを呼び掛けたり、ポルノや猥褻やその他の社会的な病理に反対することは、政教分離の原則に反していると非難される。「神の下での一つの国家」や、「私たちは神を信頼する」といったモッ

うことが一方的に妨げられているようにおもわれる。西洋諸国は、世俗的独裁者と似非イスラーム的独裁者の両方を支援している。後者は自らをイスラーム的であると自称するが、実際には人権の保護、男女の基本的自由、人民による人民のための政府などのイスラーム的統治の本質とはかけ離れている。現実には、眞のイスラーム国家を代表していると認められる国家は存在しない。健全な民主的プロセスでイスラーム政党の勝利がもたらされる間際になると、いつも主流派の民主主義政党と君臨する独裁者との間の矛盾した見苦しい同盟が即座に介入し、イスラーム政党に勝利をもたらす試みを頓挫させる。イスラーム政党の是非を証明させる機会を与えるとはしない。なんと残念なことであろうか。民主主義政党にとって民主主義そのものよりは現状維持の方が重要なのである。

イスラーム国家をイスラーム法によつて統治するという要求に対する反論の一つは、イスラーム国家の市民となるキリスト教徒やユダヤ教徒のマイノリティの地位に関するものである。この反対論はマスコミと政治家が騒ぎ立て、誇張してしまつたが、現実には何ら信憑性はない。イスラームの制度では、他に類を見ないことがあるが、キリスト教徒やユダヤ教徒の共同体に対して彼らの宗教の教えに従つて法的な問題を処理させていることは、ほとんど知られていない。イスラーム社会におけるマイノリティの問題はわずかであり、家族の問題（結婚、離婚、相続その他）に関連している。それ以外では、かれらの聖

ではない。学問上の専門知識は評価され尊敬されるが、決して神聖化されることはない。また宗教学者だけが政府を運営すべきであるという考え方は、イスラームの教えではない。宗教学者は当然、さまざまな管理部門の技能知識まで持ち合わせていない。官職は個人の能力に基いて与えられるべきであり、その地位はムスリムおよびムスリムでない人々に開かれている。

上述したシャリーア（イスラーム法）の目指すところを概観しただけでも、その適用範囲が個人的な行動の範囲から、政府の領域にまで及んでいることがわかる。シャリーアは立法の原典であり、法律が導き出される土台である。キリスト教社会の世俗主義はキリスト教と矛盾するものではないが、同じことがイスラームには当てはまらない。というのも、世俗主義はクルアーンおよびスンナの多くの命令を無視、棚上げし、または置き換えることになり、イスラームの基本的な教義に反するからである。キリスト教社会もムスリム社会もそれぞれ宗教の自由と自己決定権を広めているが、これらの事実を正しく認識することによって、キリスト教社会で認められることがムスリム社会では認められないという事実を明らかにすべきである。

イスラーム諸国もキリスト教諸国もお互いに自らの見解を他者へ押し付けるべきではないが、現実にはそうではない。西洋諸国では、ムスリムが自分達の宗教に従つて自治を行

きである。

イスラームは、民主主義を選んだ者が自分たちの公約に誠実であることを要求する。彼らは政権に就くまでは民主主義の美辞麗句を公言し、政権に就いた途端にそれを破棄するという裏切り行為を働くべきではない。イスラーム政党にとつて最悪のシナリオは、政権に就くまで民主主義を掲げながら、約束を実行できず、その後失敗を認めようともせずに、失敗の原因がイスラームのせいであると間違った考え方をすることである。その次の選挙で不正をするか、選挙制度を廃止し、国民が彼らを解任する権利さえも否定し、果ては新たな独裁者になってしまうかである。イスラーム政党はこの点に関してまだ試されていないが、試みる機会を与えずに判断するのは公平ではない。

このようなイスラーム政党の敵対者として国民の意思に反して政権にしがみつく者たちが失格であることが明らかにされてきた。世界の主要民主主義国家は、道義的その他の面で彼らへの支援を拒むべきである。もしイスラーム政党が政権に就くことがあれば、私たちは彼らに同じことをしないように忠告する。必要なことはイスラームの法律だけではなく、とりわけイスラーム的な性格や品性が求められているのである。私たちから見れば、自分たちはシャリーアによつて統治していると主張し、さらには豪語しているような周知の実例は、シャリーアに関する公正さまたは知識、あるいは両方を欠落しているといえる。

典またはその代わりになるものと対立することなく、マイノリティが不当に扱われることはない。また、多数派が（宗教的な信念から）主張する法律の前においても、健全な民主主義の原則に従つて、少数派は多数派と同等の地位を持つ。

しかしながら、シャリーアを導入する問題について若干の意見と懸念を公にしなければ、十分正直であるとはいえないであろう。多くの場合、スローガンや感情に流された世界に陥つてしまっている。一部の過度に熱狂的な若者がシャリーアを導入する問題を他宗教の信者との対立に変えてしまった。しかし、シャリーアはムスリムの若者達に全く逆の行動を求めている。その行動とは、恐怖心を消し去り、不安を緩和させ、実践的な方法で良き市民の倫理観を披露することである。これは、主流派のムスリムや大多数のイスラーム運動が積極的に追求している目標であるが、西洋のマスコミや政治学者の間で取り上げられるることはほとんどない。

民主主義的な選挙を決断するイスラーム政党は同じように助言が必要である。彼らはイスラームの魅力的な旗の下で選挙を闘っているが、シャリーアの目標を実現するために自ら作成した詳細な計画を選挙民に示すべきである。「イスラーム」は、かれらの国に課せられた複雑な経済的、社会的、政治的問題を解決する魔法の言葉ではない。シャリーアの枠の中で適切な解決方法をもたらすために、徹底した専門的かつ特化した研究を立案すべ

を特筆しておくべきであろう。二十世紀初頭、ムスリム知識人の多くが西洋に魅せられたあまりに、西洋が経験したことを良くも悪くもすべてを受け入れるようになると要求した場合と同じように、現在では、西洋の道徳的退廃と政治的な不公正に幻滅するあまりに、多くの者が民主主義を含む西洋的なものはすべて拒絶するようになった。イスラーム諸国の世俗的独裁者たちは当然、独裁者であるがゆえに民主主義を毛嫌いしている。彼らにとって、自国のムスリム大衆に民主主義が反イスラーム的であると説明することは、彼らの利害に適っている。見かけはイスラームを装い、イスラーム的であると主張する独裁者は、民主主義がイスラームの信仰とは相容れないものであるという考え方を広め、マキヤベリズムの役割を積極的に演じるお抱えの御用宗教学者を雇っている。

イスラームの伝統的な敵対者である西洋のマスメディアや政界は、イスラームを民主主義的な価値を持つ余地のない反民主主義的宗教として描くことに極めて熱心である。その目的は、西洋の一般大衆の心理からイスラームを孤立させることであり、西洋諸国の政府がムスリムに押し付けている厳しい政策や不公平な地位が容易に受け入れられるように、ムスリムを悪者扱いしやすくしている。西洋のメディアと政界は、大多数のイスラーム諸国で民主主義が存在しない問題を取り上げているが、中東の人びとの民主主義への渴望を抑圧している独裁者に唯一効果的な支援を与えてるのが西洋の民主主義国家である。

シャリーアの全体的な状況を考慮せずに、その刑法のわずかに選択した項目に限定することは欺瞞である。支配階級の大掛かりな腐敗や国家資源の貪欲な搾取の責任を問わずに解決しようともせず、微罪に懲罰を課すだけでイスラームを標榜することはできない。

イスラームでは、支配者は国民に対する説明責任があり、国家の主人ではなく下僕であると見なされている。支配階級の違反行為を放免する一方で、庶民や弱者を裁くことはイスラームに反している。シャリーアは基本から始めて微細事項へと施行すべきであり、逆から始めるべきではない。イスラームは、犯罪を減らすために三段階の方針を取り入れている。(教育と指導による)イスラーム的自覚の育成、犯罪をもたらす(社会的および経済的)問題の予防、そして最後に法的処罰であり、この順序が守られる。もちろん法律は許容限度がないことを承知している。

民主主義

近年、イスラームが民主主義と両立できるかを問う議論が行われている。両立できないこと主張する者たちはまったく異質な集団であり、彼らと共に通するものがほとんどないこ

彼の教友は別の配備計画を示した。預言者ムハンマドは教友の忠告を受け入れ、その案を取り入れた結果、ムスリム軍は圧倒的な勝利を収めることができた。

数年後、敵はマディーナのムスリムを攻撃するために大軍を派遣してきた。ムハンマドの意見は、ムスリム軍はマディーナに留まり、敵軍を迎え撃つことであったが、軍事會議の席上、多くの者は出撃し、マディーナの郊外にあるウフドの丘で敵軍と一戦を交えることを望んだ。ムハンマドはシユーラー（協議）の原則にのっとり、多数派の意見に従った。この戦いの当初、ムスリム軍は勝利を収めることができた。そのとき、丘の上にいた射手の大部隊は戦闘が終わつたと思い、自分たちの持場を離れ追撃に加わつた。どんなことがあつても持場を離れてはならないと預言者ムハンマドから厳重に申し渡されていた命令に背いたのである。それを目撃し、ムスリム軍の連隊の乱れに気づいたハーリド・イブン・アル・ワリード（敵軍の騎馬隊を率いていた軍事的天才）は、丘の上に回り背後からムスリム軍に奇襲攻撃を仕掛けてきた。戦場は大混乱となり、ムスリム軍は不利な状況に陥り、手ひどい損害を被つた後、退却を余儀なくされた。ムスリム軍は一度過ちを犯したが、その戦いの直後に次のようなクルアーンの啓示がムハンマドに下された。「あなたがかれら（あなたの信者たち）に優しく対応したのは、アッラーの御恵みであつた。あなたの心が荒々しかつたならば、かれらはあなたから離れ去つたであろう。だからかれら（の過失）を許

るという事実には、決して触れようとはしない。

七世紀初頭に登場したイスラームの制度を、その後何世紀も経つてから発展し始めた西洋の民主主義制度と比べることはできない。また西洋の民主主義制度といえども全てが同じではない。それぞれが民主主義の原則とイデオロギーを共有しているにすぎない。クルアーンは（十四世紀前に）、問題を参加者が協議して解決することを意味する「シユーラー」の原則を明確に詳しく説明した。イスラームの初期の時代（預言者ムハンマドと直接の後継者の時代）に、この原則を実際に運用していたということは民主主義の先駆者であると認められる。

ムハンマドが預言者であるという権限においては、彼に絶対に従わなければならぬが、彼が神から授かった宗教をそのまま伝え、説明するという役割から離れると、自身が普通の人間であり、将来を予言したり、専門分野において他の人よりも知識を持つていると主張できないことを自らが明言していた。ムスリムと偶像崇拜者のアラブ人同盟の間で、歴史的に最も重要な最初の軍事的対立となつたバドルの戦いの前夜、預言者ムハンマドは弱小な軍隊の配備について計画を立てた。そのとき部下がたずねた。「この配備は神の啓示ですか。それならば何も問わずに従わなければなりません。それとも、戦略と計画はあなた御自身のお考えですか。」預言者ムハンマドが、「私の意見である」と答えたところ、

二 指導者の任命は条件付きとする（「私が神に従う限りにおいてのみ、私に従うこと」とハリーファは宣言した）。

三 その意思を与える人びとの権利はその意思を撤回する権利と結びついている（アブー・バクルは、彼が神の掟に逆らった場合、人びとは彼に従う義務はないと言宣言した）。

四 統治者は人々の奉仕者であり、その職務を果たすために人々に雇われている（当初数日間、アブー・バクルが生活の糧を得るために自分の仕事を続けたところ、人びとは、富者でも貧者でもない平均的なムスリムの収入に等しい金額を、彼が専従で働く対価として受け取るよう申し入れた）。

五 国の指導者は、エリートや貴族、さらに特別な利益集団の人質ではない。彼は次のように述べている。「あなたがたの中の弱者は、彼がもらうべきものを私が確保するまで、彼は私に対して強い立場にあり、あなたがたの中の富者は、彼が支払うべきものを私が受け取るまで彼は私に対して弱い立場にある」

し、かれらのために（アッラーの）御赦しを請いなさい。そして諸事にわたり、かれらと相談（シユーラー）しなさい」（第3章159節）。シユーラーは、生活のあらゆる段階をおいても行き渡らせなければならない。クルアーンの中で述べられている一見したところ些細なことでさえシユーラーの対象となる。たとえば、乳児の乳離れの時期に関するクルアーンの命令も両親がお互いに相談し（シユーラー）、双方が納得した上で決めなければならぬ。

預言者ムハンマドは最後の預言者であるがゆえに、預言者ムハンマドの死は預言の終焉を意味していたが、ムスリム共同体の首長が彼の後継者となつた。後継者の選考は開かれた討議によって行われ、複数の候補者の中から、最終的に預言者に最も近い教友であつたアブー・バクルが、大多数の合意によつて初代ハリーファ（カリフ）に選ばれた。その機会に、ムスリム指導者に関して確立されたイスラームの原則が表明され、強化されたが、その大半はアブー・バクル自らが実践した。ここで、ムスリム共同体における指導者の選考プロセスとその役割を定めた重要なルールをまとめてみる。

一 指導者の地位は人びとの意思を反映したものでなければならない（アブー・バクルは引き続きその會議に参加しなかつた者の意見を求め、彼らの同意を確認した）。

国の一端であつたシリアの太守ムアーウィヤは、アリーへの忠誠を拒み大軍を率いてマディーナに進軍した。ムアーウィアがマディーナの攻撃を宣言した理由は、ウスマーンの暗殺者を処罰することにあつた。ムアーウィヤもウスマーンと同じウマイヤ家の出身であつた。ムアーウィヤは、時間を要する正当な法的手続きの結果を待つよりは、報復を要求した。戦場ではアリーの軍勢が勝利したが、ムアーウィヤは機略に富み、その陣営には抜け目のない者たちがいたため、巧妙な調停を勝ち取つた。一部の不満分子がムアーウィヤとアリーの双方を暗殺しようと試みたが、アリーだけ殺害されてしまった。ムスリム国家は強い衝撃を受けたが、交渉の末、アリーの息子で後継者のハサンは、それ以上の流血を避けるためムアーウィヤに権限を委譲し、忠誠を誓つた。

その後、権力の座を搖るぎないものにしたムアーウィヤは、再び人びとに大きな衝撃を与えた。アメと鞭の手段に訴え、息子のヤジードを自らの後継者として認めるよう人々に求めたのである。アリーの次男フサインは、ヤジードへの反乱軍を率いた。ムアーウィヤとハサンは一人ともすでに亡くなっていた。イラクの住民はフサインへの支援を誓つていたが、中央政府の策略と陰謀のもとにフセインを見捨てた。ヤジードの数十万の軍勢と対峙したフサインと七十人の忠実な部下たちは、逃亡や降参することなく、カルバラの地で果敢に闘い全滅した。このことが二百年間同地域を支配することになるウマイヤ朝に

要するに、上述したルールは今日の多くのイスラーム諸国における現実とかけ離れている。イスラーム帝国はその版図を広げ、イスラーム文明の発展が成熟かつ洗練されたように、物事がイスラームの定めたとおりの方向に進展したならば、ムスリムは現代の民主主義を最も良い形で支持し、その欠点を補う政府の形態を実現できたはずである。

預言者ムハンマドの没後しばらくの間、物事は非常に良い方向に進んだ。二代目ハリー・ファ（カリフ）のウマルは、自分が正しいときには支持し、間違っているときには止すことが人々の義務であると訴えた。それに対してある者が「ではあなたが間違っているならば、あなたを正しましょう。たとえ剣に訴えてでも」と答えた。するとハリーファは「あなたがそう言わなければ、あなたは間違っている。そして私たちがその言葉を受け入れなければ私たちが間違っている」と答えた。

残念なことに、この流れは、イスラームの歴史上最も悲しい出来事とは言わずとも、非常に悲しい出来事によって打ち破られてしまった。ハリーファのウスマーンは身内びいきを非難する反乱者によって暗殺されてしまったのである。ウスマーンの死後直ちにハリー・ファの地位を継承したアリーは、預言者ムハンマドの従兄弟であり、娘婿であり、最愛の人物であった。アリーの人柄はきわめて優れていたため、彼がハリーファの地位に就くやいなや、多くの有力者や人びとがこぞって彼に忠誠を誓った。しかし、当時イスラーム帝

ハサンとフサイン、またその一族を敬い、彼らに対して温情や共感、さらには情愛を抱いていることは明白な事実である。

ここまでイスラームの歴史を端的に語ってきたが、それはさておき、話を民主主義の問題に戻することにする。先に述べた歴史の悲話は、民との誓約ではなく、武力と金によって次々と権力を譲渡していく不幸な先例となつた。この不幸な出来事の副産物は、その後のムスリムの歴史を常に悩ませることになる。独裁的支配者は、自分達の不当な統治の容認を喜んで義務付け、正当化してくれる御用知識人を常に見つけていたが、受け入れがたい真実を敢えて口に出す者たちは、命や自由を代償にしなければならなかつた。ハリーフアが優れているときは物事がうまく運んだが、ハリーフアが不適格の場合、うまく行かなかつた。歴史を振り返ってみれば、不適格なハリーフアの方が多かつた。いずれにせよ、国民の権限と支配者に対する国民の権利は蝕まれた。しかしながら、知識を求め、科学に優れ、文明を確立することが宗教的な義務であると信じる多くの人びとが常に存在していたために、イスラーム文明は繁栄した。政府は彼らをこれらの分野で援助したが、支配者に対する国民の権利、あるいは支配者が乱用する権力の規制について話したり書こうとする人びとの努力を抑圧した。イスラーム文明の他の知的分野における優秀な業績と比べると、憲法上の国民の権利に関する書物は説得力があり、素晴らしいものではあるが、その数はわ

とつて最初の歴史的汚点となつたことが、ずっと後に明らかにされた。

この出来事は運動としてのシーア派の誕生を記している。シーア派とは、自らをアリーの党派（アラビア語で「シーア²²」）と呼ぶ強硬派のことである。この運動は実際に政治的反体制の表れとして始められたが、イスラームでは正義の追求が宗教的義務であるため、宗教から政治を分離させることは不可能であった。歳月を経るとともに、シーア派は、ハリーファ（カリフ）の正当な後継者はアリーであり、彼の子孫——長男が繼承——が引き続きその地位を継承すべきであると信じるイスラームの一宗派となつた。

シーア派はその後いくつかの宗派に分かれたため、様々な派生的見解が生まれた。その主流派は十二イマーム派と呼ばれ、彼らは幼少のときに謎の失踪を遂げた十二番目の後継者（イマーム）が待望のマフディー²³となつて再来し、正義によつて統治すると信じている。シーア派は、ムスリム総人口の約十%を占め、残りの九十%が従来からスンニ派と呼ばれている。シーア派は、スンニ派が不当な権威の主張を黙認したことと、スンニ派に恨みを抱く傾向があるが、全てのシーア派は、クルアーンおよびムハンマドが預言者であること信じている。シーア派は毎年カルバラの闘いとフサインの殉教を追悼している。フサインが戦いにおいて最大の危機に直面したとき、自分たちの先祖が彼を見捨てたことを悔やみ、嘆き悲しみ、多くの者が自らの体を鞭打つ。スンニ派の人たちもアリーと二人の息子

²² 宗派を意味する。預言者ムハンマドの従兄弟であり、娘婿であるアリーが、初代ハリーファ（カリフ）のアブー・バケルおよび他のハリーファよりも正当な後継者であると信じるムスリム少數派のこと。シーア派は、イスラームの基本的な教えでは他のムスリムと同じであるが、自分たちを別の宗派であると見なしている。

²³ アル・マフディーとは「導かれた者」の意味で、最後の審判の日の前に現れ、信者を勝利へ導くとハディースで預言されている高潔な指導者。

イスラームの五つの柱

第一章と第二章では、預言者ムハンマドの「私たちは、神、天使、聖典、使徒、最後の審判の日、運命または宿命（宿命を信じることは自由意志の概念を否定するものではないが、その良し悪しに関わらず、誰もコントロールできないものを指している）を信じる」という言葉によって定義された信仰のあり方を取り上げてきた。本書では、これらの項目を盲目的に受け入れるべき「教義」として示しているのではなく、むしろ論理的に説明している。これはまさにクルアーンの考え方と一致している。知性を働かせることを薦め、熟慮すべき徵を指摘し、考えるべき疑問を示している。信仰を押し付けるのではなく確信させるためである。

イスラームの教義（唯一の神を信じること）はその信仰箇条を合わせると、イブラーヒーム（アブラハム）の他の宗教であるキリスト教やユダヤ教の教義と似ている。まさにイスラームは、神の過去の使徒とその信者たちをイスラームに従うムスリムと呼んでいる。「イスラーム」の文字通りの意味は、神の意思に従うことである。ここまで、イスラームと

ずかである。

民主主義をかき乱し、曲解してきたムスリムの同胞に対して、私は民主主義がムスリム国家の厄介者であったことは一度もないと言いたい。ムスリム国家の絶えざる苦しみは、専制政治と独裁者の存在にあつた。私たちの歴史がこうした事実を明らかにできないならば、私たちは盲目であると言わざるを得ない。イスラームは民主主義を認めないと非難する者に対して、それは間違いであると言いたい。しかし、民主主義とイスラームの間には大きな違いがある。西洋の民主主義では、神の対抗者が過半数を支配できるため、神は投票で勝つこともあれば負けることもあります。イスラームにおいて、憲法はシャリーア（イスラーム法）に基づいているため、シャリーアと対立する法律制定は憲法違反となる。シャリアの条件の枠内においてのみ、民主的プロセスは完全な形を取り得るのである。

今日のイスラーム復興の動きは、扇動的な過激派、暴力的な表現、専制的世俗主義かつ擬似宗教政府といったメディアで流布されているイメージをはるかに超えている。静かではあるが啓蒙された大きな流れが宗教の現実を見出し、歴史の教訓に目覚めてきた。他者を攻撃する空疎なスローガンに煽られるのではなく、正当な改革への見識ある努力が求められている。要するに、イスラーム学者は専制政治と不正に蝕まれたイスラーム国家よりも、正義を守る非イスラームの方がましであると、以前から宣言してきた。

笑むことや、路上の危険物を取り除くといった些細なこともその中に数えられる。これらの行為は預言者ムハンマドが信者に命じた。実際に、人の行為はすべてその意図によつて神を敬う行為となりえるのである。さて次に、それぞれの柱について簡単にふれてみよう。

シャハーダ（信仰の告白）　単純な宣言である「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはその使徒であると証言する」ことがイスラームへのパスワードとなる。イスラームに入信する者は、一人の証人の前でこの言葉を誠実に唱えるだけだ。シャハーダはアザン（礼拝の呼びかけ）のときや礼拝の中でも繰り返し唱えられる。しかし、それを単に決まり文句のように唱えるものではない。唯一神を自らの神とすると誓うことは、神が自分を創造し人生を導いてくれる存在であると認めることであり、人や物、気分や欲望など、神以外のものの影響に惑わされることを拒否することである。またムハンマドが神の使徒であると明言する者は、ムハンマドの指導と教えに従うこと、またそれらが神から授けられたものであることを誓っているのである。長年にわたるイスラーム法学や文学の中に、「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはその使徒である」と宣言することが及ぼす広範囲の影響力を取り上げている膨大な著作が残されてきた。

26 断食。サウムは、ラマダーンの月に行なうことがムスリムの義務であり、またその年の残りの間に任意で行なうことが勧められている。ムスリムは断食を通じて神への服従を強め、苦難を乗り越える忍耐力を養い、貧しい人への憐憫の情を持つように訓練する。サウムは、神を敬う形として、厳しい精神的な体験であり、良心的なムスリムにとって、神との関係を深めることができる。

いう宗教とそのシャリーアの一般的な概要を説明してきたが、ここからはイスラームに固有な宗教上の儀式について取り上げていきたい。宗教上の儀式はイスラームの要である。イスラームの共同体を健全な個人によつて構築するために、言い換えると建物を頑丈な角材で作るために、イスラームは個人としてのムスリムを重視している。

義務としてのイスラームの宗教上の儀式は五つある。それについて預言者ムハンマドは次のように説明している。「イスラームには五つの柱がある。それは『アッラーの他に神はなく、ムハンマドはその使徒である』²⁴とシャハーダ（信仰の告白）をすること、一日五回のサラート²⁵（礼拝）を守ること、ザカート（喜捨）を支払うこと、ラマダーン月にサウム（断食）すること、資力がある者がハッジ（巡礼）を行うことである。」あるとき預言者が、「イスラームとは何か」とたずねられたとき、彼はこの五つの柱を挙げた。いうまでもなく、建物は柱でできているのではなく、柱は建物全体を支えるためのものである。イスラームの定義をこの儀式的な行為のみに限定するならば、イスラームの包括的全体的特長、またこれらの儀式的な行為が神を崇拜する者の品性を培うためのものであるという目的を理解しないことになる。

「イスラームの五柱」は、神を敬う最低必要条件である。神を讃えようとして行う定められた行為は、すべて神を敬う行為であり、慈善行為に制限はない。人と出会うときに微

²⁴ 信仰告白。唯一の神の他に神はなく、ムハンマドは神のしもべであり、使徒であると宣言すること。ムスリムになる唯一の前提条件は、誠実な信念を持ってシャハーダを唱えることである。

²⁵ イスラームで定められた義務の礼拝で一日5回行う。その際に、クルアーンの一部を唱え、叩頭し、平伏する。サラートで、ムスリムは創造主と常に対話し、そのときに人生の高いモラルと精神的な使命を常に思い出す。

ドゥー（清め）という。一回のウドゥーで繰り返し礼拝を行うことができるが、睡眠や排泄、放屁の後はウドゥーをやり直さなければならない。性行為の後はグスル（沐浴）が必要となる。女性は、生理中や出産直後は定められた礼拝を行う必要はないが、それが終わるとグスルが必要となる。男性の場合、射精の後はグスルが必要となる。しかし個人的な願いことをする場合は、ウドゥーが保たれているかどうかにかかわらず、いつでも祈ることができる。

サラートは、カアバ神殿（イブラーヒームとその息子のイスマーイールが唯一神を信仰するために建立した最初のマスジド、この地はのちにアラビアのマッカ市となつた）の方角に向かって行う。ムスリムはマッカのカアバ神殿の方角に向かって礼拝に立つ（非常に感動的な光景である）。世界のどこの地にいても、ムスリムは一直線に間を空けることなく並び、メッカの方向に向かって礼拝する。女性は通常男性の後ろの列に並んで礼拝を捧げるが、宗教上の特別なルールではなく、美的な好みであり、女性は平伏叩頭するときに男性が後ろにいるとき落ち着かないからである。

サラートは最初に「アッラーアクバル（神は偉大なり）」という言葉を唱える。礼拝する者は実際に自分の背中を全宇宙に向け、神に対峙するのである。礼拝中に唱える最も重要な言葉は、クルアーンの開端章である。「万有の主、アッラーにこそ凡ての称讃あれ、

²⁸ 清め。ムスリムにとって、サラートは神との謁見であり、そのために、ウドゥーで体と心を清めなければならない。手、腕、顔、足をきれいな水で洗い、頭と首をぬれた指で拭う。その際に、神への礼拝に向かう意図を心に唱える。

²⁹ 文字通りの意味は箱型の建物。カアバは神を信仰するために、預言者イブラーヒーム（アブラハム）と息子のイスマーイール（イシュマエル）がマッカに建てた最初のマスジドである。

³⁰ 神は他の何よりも偉大である。ムスリムは、アザーン（礼拝の呼びかけ）および礼拝のとき、また神に祈願し神を讃えるとき常にこの文句を唱える。

サラート（礼拝）　イスラームで定められている宗教儀式の礼拝は、広い意味での礼拝とは若干異なる独特の特長を持つている。それは時と場所を問わずに自らの気持ちを神に伝え、神の導きと助けと赦しを求めるものである。サラートはクルアーンの中で命じられているが、他の宗教においても称賛されている。イスラームの定められた礼拝は、心と体が一つになるような特別なやり方と内容で一日五回（夜明け前、昼過ぎ、遅い午後、日没後、夜半に）行われる。

サラートは清潔な場所（家庭、マスジド、公園、仕事場など）で、個人または集団で、男女共にまたは男女別々に行われ、集団の場合は一人の男性が「イマーム（導師）」を務め、礼拝を先導する。この一日五回の礼拝はそれぞれ数分間で終了する。金曜日の昼の礼拝は合同（集団）で行うように命じられている。この礼拝の前にはフトバ（説教）が行われるが、それを行うイマームは聖職者ではない。また同じ人物が毎回イマームを務める必要はない。イマームはクルアーンや宗教に関する学識を考慮して選ばれる（宗教学者だけではなく、ビジネスマン、肉体労働者、医師、教師その他の人々が同じようにイマームを務める責任がある）。

サラート（礼拝）は清潔な状態で行わなければならない。礼拝に立つ前に水で口、鼻腔、顔、手と前腕（肘まで）、足（くるぶしまで）を洗い、ぬらした手で頭と耳を拭く。それをウ

27 集団礼拝の導師または共同体の選ばれた学識豊かで敬虔な指導者

ムの三番目の柱であるザカート（喜捨）は慈善とは意味が異なる。それは自発的なものではなく、ムスリムの義務であり、一定額が課せられている。一般的には一年間の収入の必要経費を差し引いた残高の二・五%がザカートの額とされている。実際、余剰資産は四十年後には消滅するという条件が課せられているため、余剰資金を社会に還元させ、公共の利益に役立たせる誘因となっている。お金の他にも、企業の収益、農業や畜産、不動産などの収益については個別の計算方式があり、ザカートの額は極めて詳細に定められている。

ザカートは金持ちの資産に対する貧者の「権利」であり、気まぐれな施しや慈善事業ではない。イスラーム諸国では、ザカートは政府が徴収し、予算の主要財源となり、必要に応じて他の法的な税収で補足される。また、ボランティアのイスラーム組織に与えられ、その組織が責任を持つて公平な分配に努める。またザカートの収益はイスラーム法が機能していない地域（世界各地のムスリム・マイノリティや世俗的政府の支配下にあるムスリムの場合など）の貧者に直接与え、ムスリムではない貧者がその受益者となることもある。ザカートは、共同体の構成員の強い絆となる。預言者ムハンマドは「信徒たちはお互に体の中の臓器のようなものである。一人でも苦しんでいるものがいるならば、それは他の全員の責任である」と述べている。ザカートという言葉は本来アラビア語で「清め」という意味である。お金は必要としている貧しい人びとに適正な額を供出することによつ

慈悲あまねく慈愛深き御方、最後の審きの日の主宰者に。わたしたちはあなたにのみ崇め仕え、あなたにのみ御助けを請い願う。わたしたちを正しい道に導きたまえ、あなたが御恵みを下された人びとの道に、あなたの怒りを受けし者、また踏み迷える人びとの道ではなく。」その後の礼拝では、クルアーンの他の章を唱え、（神に対して）平伏叩頭し、その間に「最も偉大なる主に讃えあれ」、「最高の主に讃えあれ」、「アッラーはかれに感謝する者を聞き入れる」などと唱え、胸の内にあることを懇願する。礼拝の最後は座った姿勢で、シャハーダ（信仰の告白）を繰り返し、神の平安と預言者ムハンマド、預言者イブラーヒーム、そして彼らの一族と信者たちの恩恵を求めて終了する。

サラートは義務の礼拝であれ、任意で行う礼拝であれ、この上なく大きな精神的な糧となり、心に平安、清廉さ、静寂をもたらし、常に神を身近に意識し、感じる機会となる。日々の喧騒から離れ、驚くほど、心を穏やかなものにしてくれる。夜明け前に始まる一日五回の礼拝の時間は、祈る者の心に平安をもたらす治療のようなものであり、礼拝することによって誤った考え方や行いから遠ざかることができるのである。

ザカート（喜捨） 慈善のためにお金を使うことは非常に喜ばしいことであり、ムスリムはできる限り施しをするように命じられている。慈善に上限はない。しかし、イスラ

人びとは断食月の間に信仰心やと慈善の意識を高める。そして断食月が終わると、ムスリムは早朝に特別な集団礼拝を行い、家族や友人同士で集い、イード（宗教的な祭事）³²を祝うのである。ムスリムにとってイードは年二回あり、巡礼の時期にも祝う。

ハッジ（巡礼） イスラームはイブラーヒーム（アブラハム）の一神教の教えと深く関わっているため、この五番目の柱であるハッジは、まさにイブラーヒームの神への服従を祝うための行事である。預言者イブラーヒームは生涯を通して多くの試練に耐え、常に神の命令に従つた。あるとき神は、彼に妻のハージャル（ハガル）と当時一人息子であったイスマーイール（イシュマエル）をアラビア南西部の見るからに荒涼とした土地に連れて行くように命じた。イブラーヒームは妻と子の安全を神に委ね、のちにマツカの町となる場所に二人を置き去りにする。彼が去った後まもなく、二人の食糧は底を尽き、母ハージャルは息子イスマーイールのために狂つたように水を探し求めた。そしてまさに絶望寸前の苦しみを味わっていたとき突如ザムザムの泉から水が奇跡のようにあふれ出たのである。時折二人を訪れていたイブラーヒームはのちに、その地に神を崇める最初のマスジドを建立し、信者たちにその地を訪れハッジ（巡礼）を行うように呼びかけることを神に命じられた。イブラーヒームは息子のイスマーイールと共にマスジドを完成させた。イブラー

³² 祭事。ムスリムには二つのイードがある。一つ目はラマダーン（断食月）の断食終了のお祝いで、二つ目は預言者イブラーヒーム（ア布拉ハム）が神に従つたことを祝う祭事である。ムスリムはこの二つのイードを特別な集団礼拝、施し、また家族や友人との集い等で祝う。

て清めることができる。ムスリムがザカートを支払うのは投資であり、借金返済ではない
という純粹な気持ちを持っている。

サウム（ラマダーンの断食）

ラマダーン（断食月）はイスラームの太陰暦の一部である。イスラーム暦はグレゴリオ暦（一年を三百六十五日と定めている）よりも約十一日少ないため、ラマダーンは毎年約十一日早く訪れる。そのため、断食は生涯を通じてさまざまな季節や天候のときに行われる。ムスリムはラマダーンの間、毎日夜明け前から日没まで、すべての飲食（水さえも）を断つ。性行為も日中は禁じられている。断食中は、怒りや不品行を控えなければならない。

ラマダーンは飢えに苦しむ月ではない。栄養分や水分は夜に補給される。しかし、夜と夜明け前の食事は控えるべきであるといわれている。病人や子供、授乳中の母親、老人は断食を免除されている。ラマダーンは、日々当たり前と思っている習慣を乗り越え、空腹や喉の渴きに耐えた者に自己抑制と意志の力を与える最高の訓練となる（人が自己抑制力を失えば人類は一体どうなるであろうか）。断食は物質的な欲望を乗り越え、精神力を養う非常に豊かな経験の機会を与えてくれる。断食月は気持ちを一新し、精神の再活性化を図る期間である。それはあたかも一年間活動する電池を充電する期間のようなものである。

³¹ イスラーム暦の9番目の月。その月の間、健康な大人のムスリムは飲食と夫婦間の性交を夜明けから日没まで断たなければならない。ラマダーンは毎年11日早く始まる。ムスリムが南半球あるいは北半球のいずれに暮らしていても、一生の間に断食の時間が長くなったり、短くなったりする。

系統の間で続いていた。その後、イスマーイールの遠縁に当たる豪族のクライシユ族の中から、紀元五七〇年にムハンマドが生まれた。父親は彼が生まれる前に亡くなり、母親も幼少期に亡くなつた。ムハンマドは祖父に育てられたが、祖父が亡くなつた後は叔父が彼を育てた。彼は若い時から、その人柄がゆえに「正直な人」と呼ばれ、人びとの尊敬と賞賛的になつた。ムハンマドは二十五歳のとき裕福な未亡人のハディージャと結婚した。彼女は以前から彼に隊商の仕事を任せていたが、彼の人柄を高く評価していた。彼女はムハンマドより十五歳年上であったが、彼女が亡くなるまでの二十八年間幸せな結婚生活を送つた。

ムハンマドはイスラーム以前のジャーヒリーア（無明時代）において、人びとと一緒になつて偶像崇拜などさまざまな悪事を行うことは決してなかつた。彼は時間があるといつでも、マツカ郊外のヒラー山の頂上近くにある洞窟に籠り、瞑想にふけつた。そんなある日、大天使ジブリール（ガブリエル）が彼の前に現れ、神がムハンマドを預言者にしたことを伝えた。そしてクルアーンの最初の啓示を与えた。「読め、『創造なされる御方、あなたの主の御名において。一凝血から、人間を創られた』。読め、『あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって（書くことを）教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である』」（第96章1-5節）。それはラマダーン月であり、その夜はみいつの夜（アラビア語でライラトウルカドル）であった。恐ろしさのあまり、震えおののきながら家に

ヒームにとつて最も厳しい試練は、当然、自分の一人息子を犠牲に捧げるという神の命令に従うことであった。しかし、息子自らが自分を犠牲に捧げるよう父親を励ましたおかげで、父親は神の命令に従うことができた。イブラーヒームの誠実さと信仰を試した神は、息子の命を助け、その身代わりに子羊を犠牲に捧げるよう命じた。

こうして、巡礼はイブラー・ヒームとイスマーイールの故事にちなんで始められ、以来その行事は途切れることなく続けられた。しかし残念なことに、長い年月を経た後、人びとは多神教崇拜に陥り、一神教の神殿を偶像崇拜の館に変えてしまった。多神教徒のアラブ人は各部族で偶像を持ち、名前をつけてはカアバの中に安置した。巡礼はその後も続けられたが、それは神を崇拜する行事としてではなく、賑やかな祭りの行事となり、人びとは飲んだり歌つたりして享楽の限りを尽くした。裸で手をたたき、口笛を吹き、歌いながらカアバの周りをまわるなど、その場の思いつきで新しい儀式が行われるようになつた。劣悪な行事となつた巡礼の儀式は、マッカの人びとを潤すだけであった。当時、彼らの主な収入源は、巡礼の季節、そして東方（アフリカとアジア）と西方（シリアとビザンチン帝国にいたるまで）の間を結ぶ中継貿易としての年二回の隊商にあつた。偽りの聖職者が現れ、神々を代弁し、その供物と誓約を受け入れた。

数千年にわたつて、このような状態がイブラー・ヒームの子孫の内、息子イスマーイールの

組みこまれた異教徒の儀式」と指摘する「専門家」や「学者」がいる。これは、ムスリムにとってなんと失礼な解釈であろうか。

巡礼の季節は太陰暦の十二番目の巡礼月（ズルヒッジャ）と呼ばれている。巡礼はイブーハームが始めた行事であり、イスラームが登場したときすでによく知られていた。ハッジの期間中、女性は顔と手を除いた身体全体を衣服で覆い、男性は縫い目のない白い一枚の布を身にまとい、サンダルやベルトを着用する。服装を同じくしたすべての巡礼者は、皮膚の色、言語、人種、民族、学歴、身分や貧富の差を超え、一つの同胞意識の下で交流し、お互いに喜んで助け合おうとする。ハッジの間、人柄の良さと、人類は「唯一の神」を信じる「一つの家族」であるという信念の純粹さだけが際立つ。人種差別がなく、家族や他の集団が協力し合うため、数百万人の巡礼者の中でだれも道に迷うことはない。

ハッジの儀式は、イブーハームのマスジドで礼拝を捧げ、カアバを周回することから始まる。次に母ハージャル（ハガル）が息子イスマーイール（イシュマエル）のために水を探し求めた故事にならい、サファとマルワの丘を数回往来する。そしてアラファートの荒野に行き礼拝を捧げ、祈願する。ミナーの谷では、悪魔がイブーハームを誘惑して息子を犠牲に捧げさせないようにした場所で三回柱に向かつて投石する。これは悪魔の誘惑に打ち勝つ象徴的な儀式である。ハッジの最も重要な行事は「イードル・アドハー（犠牲祭）」

戻つたムハンマドを、妻ハディーヤは慰め落ち着かせた。そして次のように語つた。「ハイージャの魂を支配する神に誓つて、あなたがこの国の預言者になることを祈ります。あなたは親類縁者を親切にし、客人をもてなし、困つた人を助け、誠実に語りかける人です。神があなたを落胆させることはありません。」

大天使ジブリールはムハンマドが預言者になつてから、何度も姿を現わした。ムハンマドに受けられた使命は真実をもたらし、人びとをイブラーヒーム（アブラハム）の純粋な一神教に戻させることであつたが、彼の言動は、現状維持によつて自分達の地位を保つてゐるマッカの実力者と偶像崇拜の聖職者たちの同盟を最も脅かすものとなつた。それゆえムハンマドと彼の信者たちは十三年間にわたり迫害を受けた後、マディーナに移住し、そこで本拠地にして自己防衛し、立場を強固にしていくことが（クルアーンによつて）許されたのである。最後に、ムハンマドの軍隊はマッカを征服し、かつてムスリムとイスラームを迫害した者たちへの大赦を宣言した。ムハンマドはイブラーヒームのカアバから多神教の偶像を一掃し、その地を本来の姿に戻したのである。そしてハッジ（巡礼）は定められた時期に続けられ、イスラームの五番目の柱として、健康で経済的に余裕のあるすべてのムスリムの男女が生涯に一度行うべき義務となつたのである。

このようにハッジは詳細に説明できる周知の事実にも関わらず、それを「イスラームに

ム) の道徳的遺産を取り壊し、過去において背徳行為であったことを今日の道徳のように思われる形で道徳律を改ざんした近年見られる修正主義は存在しない。これらの背徳行為は、「ラブ」、「ゲイ」、「恋愛関係」、「ボーイフレンド／ガールフレンド」、「愛人」など軽薄な呼び名でこれまで罪であつたことをカモフラージュさせたい（または広めさせる）人びとによつて、当たり障りのない新しい婉曲的な言葉で覆い隠されてしまった。

本書では問題を個別に論じる代わりに、クルアーンおよび預言者ムハンマドの「ハディース³³（言行録）」の引用を取り上げ、イスラームの倫理観の源泉を直接読者に紹介したい。それは特に欧米の読者が知らない情報であり、いわゆる専門家といわれる人びとによる幾重にも積み重ねられた否定的教化とは隔たつた情報である。ムスリム以外の人々に嘘をつき、騙し、彼らを殺すようにクルアーンがムスリムに命じているとか、またムハンマドは自らの野心に酔いしれる好色家で、無慈悲な悪者であると、欧米のラジオやテレビでどれほど聞かされてきたことであろうか。それに対してムスリムは、反論し、正しい答えを公表し、またときには謝罪を得ることもあつたが、惡意ある宣伝活動は今日まで続いている。それでも、私たちが率先して働きかけることで、より多くの人びとがイスラームの真実を知るようになつてゐる。少なくとも一定の人々が眞偽を区別できるようになれば、惡意とステレオタイプを広めるキャンペーン——多くの人間が職業として取り組んできた——

33 預言者ムハンマドの言行を記録したもの。彼の教友が記憶し書き留めたものがのちにさまざまな形で編纂された。ブハーリーとムスリムの二つのハディースが最も真正とされている。他にも、権威あるものとしてムワッタア、アル・ニサーイ、イブン・マージャ、アッティルミズィー、アブー・ダウードなどがある。ハディースと呼ばれる伝承は、イスラーム法のクルアーンに次ぐ法源である。ハディースの學問は、預言者のハディースの信憑性と、それを報告した者たちの信頼性を細密に確認することである。

での集団礼拝と説教である。その後、イブラーヒームの故事にちなんで、犠牲に捧げる子羊を殺す（その肉は貧しい人びとや家族や友人に分け与える）。巡礼に加わっていないムスリムは、（説教を聞いて）集団礼拝を行い、羊を犠牲にささげて犠牲祭を祝う。

イードの祝いはムスリムにとって楽しい機会である。ハッジのときにマッカの近くで犠牲に捧げられる大量の動物の肉は、その場ですぐに消費できないため、サウディアラビア政府は食肉処理工場を建設して（必要なファトワまたは宗教的見解に従つて）、それを缶詰に加工し、イスラーム諸国の貧しい人びとに配つている。ハッジの限られた期間に毎年世界各地から聖地マッカを訪れる大量の巡礼者たち（二百万人以上）を受け入れる施設を提供し、行事の安全な管理運営に責任を持つて いるサウディアラビア政府の努力は多大な賞賛に値する。

イスラームの倫理観

イスラームの倫理観は、キリスト教やユダヤ教の倫理と、律法や福音書に定められた純粋な形において比べることができる。イスラームの道徳には、イブラーヒーム（アブラハ

アッラーが禁じられた殺生を犯すことなく、また姦淫しない者である。だが凡そそんなことをする者は、懲罰される（ばかりでなく）、審判の日には懲罰は倍加され、その（地獄で）屈辱の中に永遠に住むであろう。悔悟して信仰し、善行に励む者は別である。アッラーはこれらの者の、いろいろな非行を変えて善行にされる。アッラーは寛容にして慈悲深くあられる。悔悟して善行に勤しむ者は、本気でアッラーに悔いている者である。嘘の証言をしない者、また無駄話をしている側を通るときも自重して通り過ぎる者。また話題が主の徵に及べば、聾啞者か盲人であるかのように、戯らに知らないふりをしない者。そして、「主よ、心の慰めとなる妻と子孫をわたしたちに与え、主を畏れる者の模範にして下さい。」と（祈つて）言う者。（第25章63・74節）

二 あなたがたの主の御赦しを得るため、競いなさい。天と地程の広い楽園に（入るために）。それは主を畏れる者のために準備されている。順境においてもまた逆境にあっても、（主の贈物を施しに）使う者、怒りを抑えて人びとを許す者、本当にアッラーは、善い行いをなす者を愛でられる。また醜惡な行いをしたり、過失を犯したとき、アッラーを念じてその罪過の御赦しを請い、「アッラーの外に、誰が罪を赦すことができましょう。」（と祈る者）、またその犯したことを、故意に繰り返さない者。これらの者への報奨は、主か

は終わりを告げるであろう。

イスラームの倫理観は、なすべきこととなさざるべきことを単に並べてあるだけではない。地上における神の代理人として人間の役割を理解し、受け入れる人格を養うためであり、人間は自己の内面と外界の自然をその所有者（神）の教えと調和させて管理できるようになるのである。その教えをいくつか取り上げるが、思いつくままに並べているにすぎない。

クルアーンの魅力

慈悲深き御方アッラーのしもべたちは、謙虚に地上を歩く者、また無知の徒が話しかけても、「平安あれ。」と言う者である。また主の御前にひれ伏し、または起立して、夜を過す者。また、「主よ、地獄の懲罰をわたしたちから追払って下さい。本当にあの懲罰は、苦しみの極みです。本当にそれは悪い住まいであり、悪い休み所です。」と言う者である。また（財貨を）使つ際に浪費しない者、また吝嗇でもなく、よくその（極端な者の）中間を保つ者。アッラーとならべて、外のどんな神にも祈らない者、正当な理由がない限り、

いてはならない。本当にアッラーは、自惚れの強い威張り屋を御好みにならない。歩き振りを穏やかにし、声を低くしなさい。本当に声の最も厭わしいのは、口バの声である。」

(第31章13・19節)

四 あなたがたの中、恩恵を与えたれ富裕で能力ある者には、その近親や、貧者とアッラーの道のため移住した者たちのために喜捨しないと、誓わせてはならない。かれらを許し大目に見てやるがいい。アッラーがあなたがたを赦されることを望まないのか。本当にアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。無分別に貞節な信者の女を中傷する者は、現世でも来世でもきっと呪われよう。かれらは厳しい懲罰を受けるであろう。(第24章22・23節)

五 正しく仕えるということは、あなたがたの顔を東または西に向けることではない。つまり正しく仕えるとは、アッラーと最後の(審判の)日、天使たち、諸啓典と預言者たちを信じ、かれを愛するためにその財産を、近親、孤児、貧者、旅路にある者や物乞いや奴隸の解放のために費やし、礼拝の務めを守り、定めの喜捨を行い、約束したときはその約束を果たし、また困苦と逆境と非常時に際しては、よく耐え忍ぶ者。これらこそ真実な者であり、またこれらこそ主を畏れる者である。(第2章177節)

らの寛大な御赦しと、川が下を流れる楽園であり、かれらはその中に永遠に住むであろう。奮闘努力する者への恩恵は何とよいことであろう。（第3章133-136節）

三 さてルクマーンが、自分の息子を戒めてこう言つたときを思い起しなさい。「息子よ、アッラーに（外の神を）同等に配してはならない。それを配するのは、大変な不義である。」われは、両親への態度を人間に指示した。人間の母親は、苦労にやつれてその（子）を胎内で養い、更に離乳まで2年かかる。「われとあなたの父母に感謝しなさい。われに（最後の）帰り所はあるのである。だがもし、あなたの知らないものを、われに（同等に）配することを、かれら（両親）があなたに強いても、かれらに従つてはならない。だが現世では懇切にかれらに仕え、悔悟してわれの許に帰る者に従え。やがてあなたがたはわれに帰り、われはあなたがたの行つたことを告げ知らせるのである。」（ルクマーンは言つた。）「息子よ、たとえ芥子粒程の重さでも、それが岩の中、または天の上、または地の下に（潜んで）いても、アッラーはそれを探し出される。本当にアッラーは深奥の神祕を知つておられ、（それらに）通曉なされる方であられる。」「息子よ、礼拝の務めを守り、善を（人に）勧め惡を禁じ、あなたに降りかかるごとを耐え忍べ。本当にそれはアッラーが人に定められたこと。他人に対する（高慢に）あなたの頬を背けてはならない。また横柄に地上を歩

対し謙虚に翼を低く垂れ（優しくして、「主よ、幼少の頃、わたしを愛育してくれたように、二人の上に御慈悲を御授け下さい。」）と（祈りを）言うがいい。（第17章23・24節）

九 アッラーはあなたがたとあなたがたが（今）敵意を持つ者たちとの間に、あるいは友情を起させることもあるう。本当にアッラーは全能であられ、またアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。アッラーは、宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けなかつた者たち、またあなたがたを家から追放しなかつた者たちに親切を尽し、公正に待遇することを禁じられない。本当にアッラーは公正な者を御好みになられる。（第60章7・8節）

十 あなたがた信仰する者よ、アッラーのために堅固に立つ者として、正義に基いた証人であれ。人びとを憎悪するあまり、あなたがたは（仲間にも敵にも）正義に反してはならない。正義を行ひなさい。それは最も篤信に近いのである。アッラーを畏れなさい。アッラーはあなたがたの行うことを熟知なされる。（第5章8節）

十一 信仰する者よ、あなたがたの仲間に外の者たちを嘲笑させてはならない。それら（嘲笑された方）がかれらよりも優れているかも知れない。女たちにも外の女たちを（嘲笑さ

六 本当にムスリムの（神の意思に従う）男と女、信仰する男と女、献身的な男と女、正直な男と女、堅忍な男と女、謙虚な男と女、施しをする男と女、斎戒（断食）する男と女、貞節な男と女、アッラーを多く唱念する男と女、これらの者のために、アッラーは罪を赦し、偉大な報奨を準備なされる。（第33章35節）

七 本当にアッラーは公正と善行、そして近親に対する贈与を命じ、また凡ての醜い行いと邪惡、そして違反を禁じられる。かれは勧告している。必ずあなたがたは訓戒を心に留めるであろう。あなたがたがアッラーと約束を結んだときは、誓約を成し遂げなさい。誓いを確証した後、それを破つてはならない。あなたがたはアッラーを、はつきり立証者としたのである。本当にアッラーは、あなたがたの行うことを知つておられる。（第16章90-91節）

八 あなたの主は命じられる。かれの外何者をも崇拜してはならない。また両親に孝行しない。もし両親かまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて老齢に達しても、かれらに「ちえつ」とか荒い言葉を使わず、親切な言葉で話しなさい。そして敬愛の情を込め、両親に

の礼拝をゆるがせにする者。（人に）見られるための礼拝をし、わずかの慈善さえを断わる者に。（第107章1・7節）

十五 災いなるかな、量を減らす者こそは。かれらは人から計つて受け取るときは、十分に取り、相手にわたす量や重さを計るときは、少なく計量する者たちである。これらの者は、甦ることを考えないのか、偉大なる日に。その日、（凡ての）人間は、万有の主の御前に立つのではないか。（第83章1・6節）

預言者ムハンマドの言葉

一 人は、自分のために望むことを兄弟のために望まない限り（本当に）信じているとはいえない。

二 悪い行いをする者を見たときは、自ら手を下して変えさせなさい。それができない場合、言葉で変えさせなさい。それができない場合、心で変えさせなさい。これは最も弱い

せては）ならない。その女たちがかの女たちよりも、優れているかも知れない。そして互いに中傷してはならない。また罵り合ってはならない。信仰に入った後は、悪を暗示するような呼名はよくない。それでも止めない者は不義の徒である。信仰する者よ、邪推の多くを祓え。本当に邪推は、時には罪である。無用の詮索をしたり、また互いに陰口してはならない。死んだ兄弟の肉を食べるのを誰が好もうか。あなたがたはそれを忌み嫌うではないか。アッラーを畏れなさい。本当にアッラーは度々赦される方、慈悲深い方であられる。（第49章11・12節）

十二 だが敵がもし和平に傾いたならば、あなたもそれに傾き、アッラーを信頼しなさい。本当にかれは全聴にして全知であられる。（第8章61節）

十三 善と惡は同じではない。（人が惡をしかけても）一層善行で惡を追い払え。そうすれば、互いの間に敵意ある者でも親しい友のようになる。（第41章34節）

十四 あなたは、信仰を偽る者を見たか。かれは、孤児に手荒くする者であり、また貧者に食物を与えることを勧めない者である。災いなるかな、礼拝する者でありながら、自分

七 若者が預言者ムハンマドにたずねた。「私が一番親切にすべき人は誰ですか。」と預言者は「母親である。」と答えた。すると若者は「その次は誰ですか。」と尋ねた。預言者は「母親である。」と答えた。その男はもう一度「その次は誰ですか。」とたずねると、預言者は「母親である。」と答えた。その男はさらにもう一度「その次は誰ですか。」とたずねた。預言者はそのとき始めて「父親である。」と答えた。

八 あなたがたの中で最良の人は妻に優しくする者である。あなたがたの中で私が最も良い者である。

九 預言者ムハンマドが「信仰する者が臆病になりえるでしょうか。」とたずねられると、「それはあり得るだろう。」と答えた。次に「信仰する者が慘めになりえるでしょうか」とたずねられると、「それもあり得るだろう。」と答えた。しかし「信仰する者が嘘つきになりますのでしょうか。」と尋ねられると、「いや、それはありえない。」と答えた。

十 猛暑の日、男は、井戸端で喉の渴いた犬が水を呑めずにいるのを見た。彼は「この犬も

信仰である。

三　あなたの主（神）は仰せられた。「アーダム（アダム）の息子よ、われに呼びかけ、われを求める限りわれはあなたの過去の行いを赦し、忘れよう。アーダムの息子よ、あなたの罪が空の雲に届くほどのものであれ、われの赦しを請うならば、われはあなたを赦す。アーダムの息子よ、あなたが地球の重さほどの罪を抱えてわれにやつてきて、われに誰をも配さず、（心から悔悟して）われに対峙するならば、われは限りない赦しをあなたにもたらすであろう」

四　神はあなたの体や姿を見ているのではない。あなたの心と行いを見ているのである。

五　人びとは櫛の歯のように等しい。あなたがたはすべてアーダムの子孫である。そしてアーダムは塵から作られている。白人であれ黒人であれ、アラブ人であろうがなかろうが、信仰深さの外に優劣はない。

六　強い人は、格闘が強い者ではない。強い人とは、腹が立っているときに自分を抑制できる者である。

十五 神よ。私は悪事や悲しみに対してあなたの庇護を求める。臆病や吝嗇に対してあなたの庇護を求める。負債から、そして人びとから圧倒されることに對してあなたの庇護を求める。

十六 憎しみが人びとの間に居座り、さらに公になり広がると、神は先祖が知らなかつた病を必ず彼らにもたらす。

十七 リキュール（アルコール飲料）は惡魔の母親である。

十八 信仰する者が経験することは何と素晴らしいことか。なぜならすべての出来事は彼にとって善きことである。善い物を受け取ると、（神に）感謝し、それは彼にとっても善いことである。また、逆境に苦しんでいるときは、忍耐強くなり、それがまた彼のためになる。

十九 アーダム（アダム）の子孫が死ぬと、来世において三つのこと（その恩恵が彼に届き

自分と同じように喉が渴いているに違いない」と独り言をいい、井戸のところまで行つて、靴に水を入れて犬に飲ませてやつた。神は彼の行いを喜ばれて、彼の罪を赦した。

十一 偽善者の徴(しるし)は三つある。口を開くと嘘をつく。約束すると(その約束を)破る。信頼されると、その信頼を裏切る。

十二 あなたの主(神)は仰せられる。「われのしもべが手の長さまでわれに近づくと、われは前腕の長さまで彼に近づく。彼がわれに前腕のところまで近づくと、われは両腕を広げたところまで彼に近づく。彼がわれに歩いてやつてくると、われは彼に走つて近づく」「

十三 大天使ジブリールは、神が隣人を相続人にするであろうと私が思えるほど、隣人の世話をするようになると、私に常に忠告した。

十四 最後の審判の日が来ると、呼びかけの声が聞こえる。「他の人びとを赦してきた者は誰だ。あなたの主の御前に出て、報奨を受け取りなさい。赦す者はすべて天国に入ることができる。」

で、上甲板にいる者と船底にいる者のようである。船底の者は水がほしいとき、甲板まで上がり取つてこなくてはならなかつた。すると彼らは「（水を得るために）私たちのところで船に直接穴を開けよう」と言つた。上甲板の者が船底の者の申し出を受け入れるならば、全員が死亡するであろう。上甲板の者が穴を開けさせなければ、全員が無事である。

二十四 上の手（授ける者）の方が下の手（受け取る者）よりもすぐれている。

二十五 預言者ムハンマドは述べた。「兄弟たちを良し悪しに問わらず助けなさい。」そこで預言者に「正しいときに助けることは分かりますが、正しくないときにはどうして助けるのですか。」とたずねる者がいた。預言者は答えた。「悪事をさせないために支えなさい。それが本当に支える（助ける）ことになるのです。」

二十六 これまでいくつもの国が滅びた。それは、貴族の息子が盗んでも放免し、弱者が盜むと罰したからである。

二十七 永遠に生き続けられると思つて現世のために働きなさい。そして明日死ぬかもし

ますように）を除いて、（現世から）完全に切り離される。その三つとはたゆまぬ慈善、外の人びとが恩恵を受け続けられる有用な知識、そして親のために祈る敬虔な子供である。

二十 神が合法としたことの中で神が最も忌み嫌うことが離婚である。信仰する者は（できる限り）愛する妻を見捨てるべきではない。妻にいやな面があるとしても、必ず他によいところがあるはずである。

二十一 神の庇護の他に何もない審判の日に、神の恩寵を受ける者が七人いる。公正な指導者、神に従つて育った若者、マスジドに心を捧げた者、同胞愛を神に捧げた兄弟（姉妹）、一人で神を思い出し、涙を流す者、美しい女性が誘惑したときに「私は神を畏れる」と答える若者、人目に触れずに施しをして、左手が右手の施しを知らない者である。

二十二 生の玉葱とニンニクを食べた者はマスジドの合同礼拝に加わるべきではない（強烈なにおいのせいで周囲の者の気分を悪くさせないためである）。

二十三 神の命令を（信仰深く）守る者は、同じ船に乗っている旅人の集団

を知りなさい。神は逆境にいるあなたのことを分かつておられる。あなたが経験したことはあなたの身に降りかからなかつた場合、またあなたの身に降りかかつたことをあなたが経験できなかつた場合のことを考えなさい。勝利は忍耐を伴う。安堵は苦労の後にやつてくる。また辛いことの後に安心できるである。

れないと思つて来世のために尽くしなさい。

二十八 貧しい人たちが預言者ムハンマドに不満を言った。「金持ちが富を（すべて）奪つてしまふ。彼らは私たちと同じように祈り、同じように断食をして、彼らのお金も喜捨する（この点は私たちが見習えない）」。すると預言者は答えた。「神はあなたの方のために慈善を用意しなかつたのであろうか。神の完璧さを讃えることは慈善である。神への感謝も慈善である。善き事を命じ、悪を禁じることも慈善である。神の他に神がないと言うことも慈善である。妻を愛することも慈善である」。すると彼らは「性的欲望を満たすことも報いられるのですか」とたずねた。預言者は答えた。「自分の欲望を不貞で満足させると、それが罪だと思わないのか。同じように、自分の妻を正当に満足させれば、そのことに報奨が与えられる」。

二十九 預言者ムハンマドは、「神を信じるには」どうすれば一番よいかとたずねられたとき、次のように答えた。「神を目で見ることができなくともまるで見られているがごとく気をつけなさい。かれはあなたを見ている。」

三十 神を信じなさい。あなたの前に神を見出すでしよう。成功しているときに神のこと

(ウ) 死の定義、(エ) 安樂死、(オ) 遺伝子工学の問題が含まれる。

新世界秩序

共産主義の突然の崩壊にともない、「新世界秩序」という言葉が頻繁に人びとの話題に上るようになった。共産主義が崩壊するなどとは世界中の多くの人が予期していなかつたが、何十年も前からイスラームにおいてはムスリムの学者たちがその著作の中で、共産主義と資本主義の双方を批判的に捉え、いつまでも持ちこたえることはできないことを述べてきた。ムスリムの学者たちは、共産主義と資本主義の比較研究の中で、双方のシステムをイスラームの教えに基づく独自のシステムと比べて、どこがどのように違い、何が欠落しているかを明確に論じてきた。

共産主義が崩壊したからといって、それをもって資本主義の勝利と結論づけることはあまりに早計というべきだろう。共産主義にしても資本主義にしても、両者はともに唯物的イデオロギーであり、物質を超えた特徴を持つ存在である人間にとつて不釣合いな考え方である。これら二つのイデオロギーは方向性が全く異なるとはいへ、共通するもう一つの

現代の諸問題

イスラームは、礼拝や祭事、礼拝所など宗教的な事柄だけに限定されない、人生すべてにかかる宗教であり、ムスリムたちが属する社会全体が抱えるさまざまな問題を共有する。ムスリムはこうした問題を解決するために力を合わせて解決策と共通の基盤を模索する中で、イスラーム的な価値観を共有しようとする。

この章では、今日私たちが直面しているさまざまな問題についてイスラームの考え方を説明する。取り上げるテーマは、理論や抽象的な思考はさておき、イスラーム的見解が現在の日常生活に対して適切であるかを調べ、その妥当性を説明する具体的な実例を選んだ。具体的に取り上げたテーマは、(I) 新世界秩序、(II) ジハード³⁴、(III) 家族と性革命、(IV) 生命医学の倫理である。(IV) の中には(ア) 生殖の問題、(イ) 臓器提供と臓器移植、

³⁴ 文字通りの意味は奮闘である。神のために奮闘努力することであり、モラルの向上、性格の改善、また惡を退け善を広めるために、社会的に広い意味で奮闘努力することである。平和的に美しい説教を通じて行う場合もあれば、圧政と不正がはびこり、人間の尊厳、思想・信仰・表現の自由が奪われる場合は、力を行使することもある。

い捨てしても当然と見なし、搾取の対象としている。第三世界の人びとは、自分たちの原材料から作られた最終製品を手に入れるために支払わされる法外な値段と比べればごくわずかな対価でもつて天然資源と原料を奪われているばかりでなく、自国の生産性を高め、「先進工業国」からの輸入依存体質からの脱却を図ろうとするプロジェクトを実行できまいようにされている。

さらに第三世界が貧血で完全に死んでしまわないよう、その購買力を維持させるため、歐米諸国の資本の利益になる借款や援助という名目で定期的に新たな資本が導入されている。

その援助のごくわずかな部分が一般民衆の手に届いているにすぎない。大部分は、体制維持を望む支配階級の国内エリートとその取り巻きが手に入る。支配階級は、借款と援助の条件について民衆の間で公に議論する試みや、また自分達の運営の監視や管理不備に対する責任管理体制を確立させる試みを妨げようとする。労働者の権利を抑圧し、手ぬるい安全手順を放置し、イスラーム世界の多くを含む第三世界の政府の特徴ともいえる恐るべき腐敗が暴露されることを徹底して防ごうとしている。こうした現実は、二つのパラドックスを明らかにしている。一つ目は、中東の多くの国において、西洋諸国が多額の資金を投下すればするほど、国はより貧しくなり、債務も増大する。二つ目に、健全な民主的ブ

誤りは、個人と社会が避けがたい対立関係にあると見なす考え方である。共産主義は社会の側に立つて個人を押しつぶそうとした。その場合、個人が増えれば社会はどうなるであろうか。その結果は抑圧された社会である。

一方の資本主義は個を尊重するあまり、個人を社会の要求からむやみに守ろうとする。このことは個人に利己的な意識を正当なものであるかのように思い上がらせ、自己中心的な意識が対外的に反映され、階級差別、排外的職能組合主義、人種差別、奴隸制度、植民地主義として具現化されていった。資本主義の依拠するところは、資本の唯一の働きと宿命が際限なく拡大し続けるということにある。国内市場が飽和状態になると、海外や第三世界に新たな市場を求めて進出していくことになる。しかし、それは地球という限られた惑星の中で無限に拡大はできないという事実を明らかに無視、もしくはおそらく意図的に無視している。

お金を、もっと多くのお金を求める熱狂的な競争は、需要を満たすよりもむしろ快適さ、快樂、贅沢への欲求を満たすための消費行動を意図し、積極的に広め、そしてその傾向の変遷も計画する。その結果、かけがえのない多くの天然資源は加速度的に破壊されている。そして過剰消費への動きは、犠牲の子羊のように世界中の資源に狙いを定めている。こうした動きは特に、重要な市場でもあり、安価な労働力と原料の供給源である第三世界を使

呼ばれている。

世論を操作し形成する手段として大企業と大資本が所有する巨大なマスメディアの影響の下で、欧米の大衆はこれまで簡単に騙され、政策立案者の手段と方法を疑うことなく容認してきた。しかし、だからといって欧米諸国人の人びとが従属的で疑うことを知らない性質のために生じた最悪な過失というわけではない。今まで欧米諸国的一般大衆が容易に認識できなかつたことは、第三世界における資本のあくなき欲求と貪欲な事業が、見ず知らずの風変わりな人びとが暮らす遠く離れた地域に限られることはないという事実である。政府や大企業は、「拡大、もつと拡大を、資本、もつと資本を、金、もつと金を」という至上命題にかかる場合は、自国民に対しても躊躇することなく同じ行動をとる。米国を例にとれば最も説明しやすい。産業の多くを財政的、人材面でも、安価な労働力が得られる東南アジアなどに移して安価な商品を作る一方、それを本国に持ち込んで売るときは決して安くはしない。このプロセスのせいで、大量の米国人労働者が解雇され、失業者の仲間入りをした。

こうした抑制の利かない資本主義の歩みを永遠に続けていくことは不可能である。それほど遠くない将来、資本主義が袋小路に入ってしまうことは明らかであり、その終焉の証は攻撃、無視、隠蔽されているが、資本主義の終焉は反対する人々が好むと好まざるとに

ロセスに従つて今までに権力を手中に收めようとしている中東の民主化運動に対する欧米の 主要民主主義国による完全な裏切りである。欧米民主主義国は必ず、ムスリムの民主化への渴朥を踏みにじつて独裁者に味方し、必要とあれば軍事力行使して独裁者を支援している。

「安定」という表現は、欧米諸国が介入するときの建前であるが、それが外国の大衆にとつては最悪の可能性であつても、実際の意味は外国資本がその国の資源を最大限搾取できる機会を保持することである。第三世界の国民と次世代は、自国の GNP では返済はもとより利息さえも払うことができないほど膨れ上がった債務を引き継ぐことになる。第三世界の人びとはこの状況を把握しており、苦々しく思つてはいる。彼らはその結果を自分の家庭内や親戚がどうなつてはいるかで分かつており、さらにごく限られた可能性しか与えられていない自分たちの子供達で思い知らされているのである。彼らはそれを不正と呼び、不正を変えようと試みているが、容赦なく弾圧される。欧米諸国の中政治家はこの弾圧に加わり、自国民から見て正当化するために、プロパガンダに役立つ方法と言葉——例えば弾圧された犠牲者はその国の安定を妨げている、欧米諸国の中利益を著しく損なつてはいると言ふなど、——が用いられている。最近まで、そうした正義を求める人びとを「共産主義者」と呼んできた。共産主義が崩壊してからは、彼らは「イスラーム原理主義者」と

こういった状況でイスラームは何ができるのだろうか。イスラームの学者や思想家——マスコミが闇雲にイスラーム的と決め付けた仮面を被せたテロリストや過激派ではない——はこの数十年間にわたり、こうした現代の諸問題を解決するためシャリーアに基づいたイスラーム的システムをどう構築するか詳細に検討してきた。このシステムはもちろん、過去の時代や状況に機能していた枠組みをそのまま模範したようなものではない。また、このシステムは決してイスラームのためだけではなく、ムスリムだけに限定したものではない。人類の幸福は私たちに共通した課題であり、国境を越えた人々の交流が盛んになつているこの地球において、人類がますます一つの運命共同体になつている。次に、このシステムの主な特徴を述べてみたい。

人間に対する権威

人間はこの宇宙で最高の存在ではなく、最高の存在である神に対して説明責任を負わなければならない存在である。ドストエフスキイは、神など存在しなくともあらゆることが可能であり、すべてを合理的に説明し、正当化できる、と述べている。人間は神を追い出

関わらず避けられないことである。第三世界の資源と安価な労働力という金の卵を産む双子のガチョウは、いつまでも生き続けられるはずがない。手遅れになる前に劇的な変化が起らなければ、この地球は最終的には終焉の日を迎えるを得なくなる。

求められることは、単に法律を変えることではなく、考え方を変えることである。対処療法によって状況悪化の速度を多少遅らせることができるかもしれないが、物質至上主義の精神構造が続く限り、終焉の日を避けることはできない。人間関係を我々と他者、北と南、搾取する者と搾取される者、富める者と貧しい者、白人と有色人種、主人と奴隸（または召使）といった対立概念でしかとらえられない限り、将来の希望はない。人類という「船」は、たとえ豪華な一等客室の乗客が貴重品やぜいたくな品々を貯め込んでも沈没する運命に変わりはない。

世界の政治家や資本家が、劇的な自己変革を行うために必要なビジョンや英知や能力を持つているかどうかは疑わしい。彼らがその不吉な道に留まり、人類を奈落の底に導いているのをただ眺めてるのは辛いことである。唯一の望みは、選挙民として最終的な決定者である一般大衆を啓蒙する大掛かりなキャンペーンを打つことである。そして新しい方法を求める要求が生み出されるならば、政治家は自ら変わるか、変革の道から退陣しなければならない。

で絶妙なバランスを取り、すべてのものを公正に取り扱うことである。このバランスを保つには単に法律を規制、強化すればいいというものではなく、神を喜ばせようとする強い願望が必要となる。人間は神を喜ばせようとして、いつも満たされた気持ちになる。神は常に中庸であり、また身近な存在である。実利的な見方からすれば、馬鹿げた全く無意味な考え方である。

イスラームでは、神が貧しい人たちの生活を富者に任せたことを当然であると見なしている。そして新しい世界秩序のもとでは、この原則は国家間の状況に応じて適用される。もちろんこの新しいシステムは達成可能であるが、価値を問わない教育制度、メディアによる洪水のような擦り込み、不正を許す社会では不可能である。現代社会では相互依存が高まり、一体化しているため、たとえ頂点を極めた金持ちであれ、貧困の底辺に暮らすものであれ、決して孤立して生きていくことはできない。

約一四〇〇年前、イスラームの第二代ハリーファ（カリフ）であるオマルは、ある町の住民が貧しさのために亡くなつた時、その町の住民に対して、かれらがその人を殺したようなものであるとして賠償金を支払うことを命じた。預言者ムハンマドは、「社会は身体と同じように一つの臓器が病めば、他の臓器が支えて回復させる」と述べている。すべての市民は、必要最低限度の生活だけではなく、最低限度の快適さを享受する権利がある。

した後、自己崇拜に陥つてしまつてゐる。この宇宙における人間の眞の役割は、神の代理人、受託者になることである。そのためには人間には、創造主の教えに従つて地球を管理するためには自然を全面的に統治する能力が付与されており、決して自分の衝動や誘惑に駆られてはならない。人間に賢明さがあれば、今なお未熟な道具にすぎない科学や恐ろしい罠ともいうべき傲慢さに惑わされて神のように振舞うべきではない。

物の所有権

神は創造主であるがゆえに、すべてのものの究極的な所有者は神である。私たち人間の所有権は、あくまで二次的なものである。人間は、正当な手段であれば富を所有し、制限されることなく富を増やすことができる。しかし同時に、資本には権利だけではなく義務が伴うことを自覚しなければならない。資本の役割はそれを無制限に増やすだけではなく、社会に対する義務を果たすことにある。

共産主義と資本主義の双方に共通する、個人と社会の間には必然的な対立があると見なす考え方には、イスラームには存在しない。イスラームの考え方には、個人と社会の双方の間

人間の平等

人類はすべてアーダム（アダム）とハウワー（イブ）という共通の祖先から生まれた「一つの家族」であり、人は生まれつき平等であるということを、子供たちに幼いときから繰り返し教えるべきである。残念なことに、かつてヨーロッパおよびアメリカで、科学と宗教が一体となり、白人（またはアーリア系人種）が他の人種よりも生まれつき優秀であるとの説が捏造された。その主張の根拠とされた誤った証拠自体は今や否定され葬り去られているが、その後遺症が未だに残っている。西洋の教会では今でも、イーサー（イエス）は金髪の青い目の白人として描かれていることが多い。それはパレスチナ地方でよく見られる髪が褐色でオリーブ色に日焼けした人物ではない。

欧米諸国における人種差別主義の痕跡は、実生活のあらゆる面に蔓延しており、それを変えていこうとする動きはまだ十分な勢力とはなっていない。米国の苦難に満ちた市民権運動は何十年にもわたって続けられており、着実に前進しているにもかかわらず、奴隸制度時代の苦い経験が拭い去れたとは言い難い。平等は、一連の法的措置だけで片付けられるものではなく、まず何より心のあり方にかかる。

これまでにアメリカの黒人は、白人文明の歴史を汚してきた奴隸制度の時代について

イスラームでは、施しに頼つて生きることは決して望ましいことではなく、個人の権利には職を得て働く権利が含まれている。それゆえ省力技術などは、労働力不足の解決策としては許されるが、それで仕事を減らし、労働者を失業させることは認められない。人は機械よりも大切な存在であり、法律は集団の福祉よりも優先させるものでなければならない。もちろん技術の進歩を妨げようということではない。むしろ技術の進歩の成果は、労働力と手を携えて進むべきである。イスラームにおいては、労働者と資本家の二極分化を緩和するとともに、労働者が自社の発展への既得権を持つことができるよう、自社株の購入を薦められ、支援されている。

もう一つのイスラームのルールとして、手段としてのお金は、何らかの生産と組み合わせない限りお金を生むことはできない。すなわち利子を取ることはイスラームでは禁じられている。ここ数十年間、無利子銀行に関する多くの文献が出版され、イスラーム諸国だけではなく欧米でも、多くの銀行がこの無利子金融を先駆的に取り入れてきた。

善事業のための）会議で即座に一笑に付された。補助金の削減も第三世界の開発も当面の選択肢とは見なされなかつた。その理由は、補助金では政治的二都合主義、第三世界の開發については政治的戦略である。

自己抑制の必要性

人間固有の能力である自己抑制力が急速に蝕まれてきており、この回復が急務となつてゐる。自己抑制力は、本来人間と動物を区分する基本となるものであるが、現代人の精神性はその能力を台無しにしてきたようである。路上を通り過ぎる車に向けて発砲し、殺人を犯して捕らえられた若者は、「誰でもいいから殺してみたかった」とその動機を語る。現代社会においてこうした例は珍しいものではない。犯罪統計によると、極めて衝動的で破壊的な行動は決して特異なものではなく、ごく日常的な社会現象となつてきている。テレビのニュースや新聞で、だれでも目にすることである。健全な価値観の欠如と、そして衝動や誘惑に駆られた時に必然的に生じる驚くべき自己抑制力のなさが、今日の社会の崩壊を徐々にもたらした根本的な要因である。

— 非白人系の日系アメリカ人は第二次世界中の抑留に対する謝罪と賠償を受け取つてい
るにもかかわらず — 白人たちから「謝罪」を言葉は聞いたことがない。残念なことだ
が、人種的緊張は噴出し続けており、このような暴力事件に関与した者たちにはそれなり
に正当化する理由がある。つい最近起こったロサンゼルスの暴動³⁵はまさにその例である。

アメリカの黒人の地位向上の必要性が叫ばれるたびに取られる措置は一時的には効果が
あるよう見えるが、いつも問題の核心を外れている。銃弾もお金も永久的かつ真の解決
策とはなつていな。すべての人が、他の人たちを平等で愛すべき同胞であると心の底か
ら感じ、信じるときに初めて本当の変化は起こる。法律でいくら規制しても不可能であり、
むしろ教育が果たすべき役割である。私たちの世界は、包括的な教育革命によつてしか変
えられないであろう。その教育革命は、いかなる障壁によつても分断されることのない、
愛情に満ち溢れた統一した社会を創造するという目的のもとに、国境を超えた地球規模で
自由、博愛、平等というスローガンに新しい生命と意義を与えることである。

この変革を実現するためには、新植民地主義の国々を再教育し、第三世界の真の開発を
支援する真の努力と運動させなければならない。ヨーロッパ諸国が自国の農民に支給して
いる補助金だけで、第三世界に大きな変化をもたらし、世界の貧困問題も解決できると推
定してきた。しかし、このような考え方は、多くの国の元閣僚や元首脳たちが集まる（慈

35 1992年4月

戦争と平和

イスラームにおける戦争のルールは非常に明確であり、預言者ムハンマド自身もそのことを明確に説明している。戦闘はいかなる時も、正当な理由と呼べるものに従って、防衛や圧政の排除のためでなければならぬ。罪のない一般市民を殺傷したり、環境を破壊することは許されない。クルアーンには攻撃を停止する際の調停について次のように記している。「もしも信者が二派に分れて争えば、両者の間を調停しなさい。もしかれらの一方が他方に対しても、（一方的に）無法なことをするならば、無法者がアッラーの命令に立ち返るまで戦いなさい。だがかれらが立ち返つたならば、正義と公平を旨としてかれらの間を調停しなさい。本当にアッラーは公正な者を愛される」（第49章9節）

非ムスリムと結ぶ同盟は正当な理由があれば許される。その一例として、預言者ムハンマドはマディーナのユダヤ人と協定を結び、彼らと力を合わせ不信者たちからマディーナを守つた。他の例として、イスラームが出現する遙か以前に、抑圧された人びとを共に支援するためにマツカの部族と結んだ協定について、預言者ムハンマドは次のように述べている。「それはイスラーム以前の協定であるが、イスラームの時代に、私が招かれていれば、その協定に参加していただろう」預言者ムハンマドの軍隊に対する命令は明確で厳格なもの

変革の鍵は、教育とメディアにある。教育は単に知識を教えるだけではなく、物事の善悪、より高い権威に対する説明責任の意識を教えなければならない。そうすることで初めて多くの人びとは、良心の促すことに完全に従うことができる。ムスリムや他の人びとが信じるように、最後の審判の日が来た暁には、暴力、ポルノ、卑猥なことを喧伝して、広めた自らの悪行を突き付けられるマスコミの大御所を羨ましいとは思わないであろう。考えられないようことを軽率に口にしていると、いつの間にか実現できるような気分になる。若者はいろいろ模索し、試しているうちに、放蕩と非道が社会全体に蔓延する。

残念なことに、一部の国は剥き出しの力に頼る見本を自国の若者に巧妙に見せつけている。特にその国が無限に強く、敵が無限に弱いときである。軍事大国が、予測される攻撃を全総力で厳しく取り締まり、実際には抵抗などないとき、価値と原則と呼ばれる隠蔽物が剥げ落ちる。予想よりも厳しい攻撃が続くと、同じ大国が「この任務は容易ではない」と言つて撤退する。攻撃するにしろ、人命の保護を控えるにしても、人命への配慮は皆無である。一九九一年の湾岸戦争のときに、軍の指揮官が語った強烈で暴露的なコメントは、「死体を数えるのはわれわれの仕事ではない」というものであった。当然、彼が言う死体とは敵側の死体である。

ぎないのではないかという疑念が生じる。

かつて到達したことのない文明の絶頂期にある人類は、新世界秩序の到来を祝う二千年期に入り、公正な和平交渉によって戦争のない世界はもはや決して夢物語ではない。

なぜ独立した国際法廷が国家間の紛争を解決できないのだろうか。結局、戦争は善惡の区別を明らかにするためではなく、どちらが強いのか、どちらがより強力な破壊力を持つているかを示すだけである。紛争を誠実かつ公平に処理する能力と願望をもつ司法裁判所——国連と安全保障理事会を除く——が設立されるならば、公正な紛争解決の実現は十分可能である。このような提案が実現されるならば、すべてを完全に変えることができる。文明国が文明国にふさわしい決断をすることである。眞実が明らかにされると、誰も自分達が眞実に反対しているとは言わないが、実際には反対しているのである。眞実は一つの価値であるが、残念なことに政治は価値の見極めができない。これが、現在私たちが直面している現実の脅威である。

強者は法律が定めた正義を認めるだろうか。それとも力が権利になるという考え方固執するのだろうか。軍産複合体制は、時と場合によつて戦争を正当化して、その存在理由を放棄するのだろうか。世界の資源の取り分やその資源を補充する費用を分配するときには、公正さは認められるのだろうか。当然、拒否される。状況が変わり、その変化が上から与

のだった。彼らが闘えるのは戦闘員だけであり、女性、子供、高齢者への攻撃は許されなかつた。修道院や礼拝所にいる非ムスリムの聖職者を傷つけてはならなかつた。また敵の木々を戦争の手段として伐採したり、燃やすことや、動物を食料以外の目的でむやみに撃ち殺することは許されなかつた。これらの規則を見ると、イスラームの崇高な戦争倫理を実行するには、現代の戦争では特別な努力が必要となつてくる。戦闘を軍事関係者だけに正しく限定できたのは、おそらく第一次世界大戦が最後の戦争であつたであろう。一九三〇年代のスペイン内戦を境にルールが変わり始め、第二次世界大戦、朝鮮戦争、さらにベトナム戦争でその変化は一段と顕著なものとなつた。広島と長崎に投下された二つの原子爆弾がまさにその代表例であり、またベトナム戦争における「自由発砲地帯」の絨毯爆撃は、人や動物や樹木を焼き尽くしただけでなく、土壤さえも汚染した。

イスラームの戦争倫理はあまりにも理論的であり現代には適用できないと見なす人びとがいる。しかし、ムスリムや一部の人々はこの問題を別の観点から見ていく。現代の戦争はあまりにも破壊的であるため、もはや戦争そのものを紛争解決の選択肢にすべきではない。戦争はまさに奴隸制のように時代遅れなのである。新世界秩序が、湾岸戦争の圧倒的な軍事攻撃のさなかに発表されたことは凶兆といいうしかない。その後の一連の決定をみると、新世界秩序とは結局、二つの対抗勢力ではなく一つの勢力が取り仕切る古い秩序にす

操のない貪欲で利己的かつ近視眼的な資本主義の擁護者として権力を掌握する者たちが妨げとなってきた。クルアーンには次のように述べられている。「人びとの中には、この世の生活に関する言葉で、あなたの目をくらませる者がある。そしてかれらは、自分の胸に抱くことの証人としてアッラーを呼ぶ。だがこのような人間こそ最も議論好きな敵である。かれらは背を向けるやいなや、地上に惡を広めることにつとめ、収穫物や家畜を荒し廻る。だがアッラーは邪惡を愛されない。」（第2章204-205節）

大企業の激しい抵抗にもかかわらず、政治の世界と一線を隔した環境保護運動が着実にその勢いを増している。一九九〇年の「アース・デイ」では、世界百四十カ国で史上最大の一億人が草の根デモに参加した。選挙で票を失いかねない政治家にとって、この事態はもはや無視することはできなくなっている。国際的な環境保護団体を設立し、各 government が事前に同意に参加し、その提案に自主的に注意を払う時代が到来している。もちろん、その提案をまとめるにあたっては公正の問題をおろそかにしてはならない。

えられたものでない限り、公正さは現在の秩序を治める者への冒とくになる。正義は、民衆の下からの運動によつてもたらされるであろう。

環境問題

貧しい開発途上国は、食糧を購入し、債務を返済し、軍隊に武器を供給し、独裁者を守り、支配者やエリート階級の飽くなき欲求を満たすために、自分たちの天然資源を枯渇させていることを非難される。豊かな国々では大量消費の生活様式を取り揃え、贅沢品を増やし、快樂にふける富裕層をより豊かにするために、先進工業国は生態系を破壊し、環境を汚染し、動植物を死滅させている。こうした現象は、科学技術がかつてない劇的な手法で生物圏に影響を及ぼすことのできる時代に起こっている。まして、この事態は、全面的な近大戦争によつてもたらされる永久的な大量破壊によるものではなく、平和時に起こっているのである。私たちは「将来」を担保に法外な利率で借り入れているが、正気のまともな試算によると、私たちは後世の人々が返済できないほど債務を抱えているのである。事態回避のためにいくつかの救済策と実行可能なプランが提起されてきたが、予期した通り、節

つ入手しやすい避妊方法——強制ではなく——を使いたい家族に普及させるニーズがあることは事実であり、イスラームはそのことを咎めてはいない。私たちの唯一の懸念は、人口問題の責任を第三世界の国々にだけ押し付けるでは眞実のすべてを明らかにしていないということである。実際にこの問題は多様な側面をもつていて、スタンフォード大学生物科学部のポール＆アン・エールリッヒは雑誌『ナショナル・ジオグラフィック (National Geographic Magazine)』に、次のように書いている。第三世界に責任を押し付けることは、アメリカで赤ん坊が一人産まれることで、「たとえばバングラデシュの赤ん坊一人の出産と比べて、百倍以上の圧力を世界の資源と環境に与えている」という事実を無視している。この二人の学者は、貧しい国々の人口問題は彼らを貧困から抜け出せなくしているが、豊かな国の人団問題は文明を支える地球の能力を破壊していると指摘している。³⁷

第三世界の人口増加に歯止めをかける方法については、一九七四年にブカレストで開催された世界人口会議などによつて論議されてきた。歴史上の先例——ヨーロッパで出生率を減少させた状況——を調べると、良識的に見れば人口の減少は開発によるものであり、産児制限などの結果でないことを示している。開発が最善の避妊薬である。不安定さが多産の自然な刺激になることも周知の現象である。しかし資本主義諸国は第三世界の出生率規制を過度に重視する。資本主義国の関心事は、人類の福祉に対する単なる博愛また

³⁷ 引用：Michael Henderson, *Hope for a Change* (Salem: Grosvenor Books, 1991), 24.

世界の人口が利用可能な資源を上まわる早いペースで増え続けている中で、爆発的な人口増大への懸念が生じるのは当然である。人口増加の大半が第三世界で起こっているため、第三世界の国々は無責任であると非難され、欧米諸国からその責任を問われている。懲罰的ともいえるような措置が検討され、アメリカを始めとする多くの支援国は、その援助を産児制限や家族計画の普及と結びつける措置を検討してきた。さらにひどいことに、ジョン・マーチン博士は、「現代の医師にとってマキヤベリの方がヒポクラテスよりも役に立つのだろうか」³⁶という記事の中で、第三世界でのワクチン接種プログラムなどの保健対策の妥当性を問う欧米諸国の意見を取り上げている。その意見によると、これらのワクチン接種によつて余りにも多くの子供が生き残り、彼らが資源を消費するため、結果的には飢餓と死亡のサイクルが繰り返されているというのである。言い換えると、第三世界の死亡率削減に制限を設ける呼びかけである。このような記事の中にマキヤベリズムの名前が含まれていると、人道主義から「プラグマティズム」への移行は一部の人びとに道徳にかなつてゐるようと思えるのである。

しかし、そこに問題があることは誰しも否定することができない。安全で信頼でき、か

³⁶ World Health Forum, vol. 14, 1993, 105

るような印象を与えていた。

新世界秩序は地球という大きな「村」のニーズに合わせるべきである。私たちの地球は本来一つの存在なのである。この世界を持つ者と持たざる者に分けるのは避けられないとか、富者と貧者は一生相容れない運命にあると考えてはいけない。富裕層は慎ましく満足すること、そして自分たちの生活様式に取り入れた多くの贅沢品を公共の利益のために喜んで手放すことが必要である。贅沢品は生活に絶対欠かせないものではない。人類という大家族に必要なものを届けたという満足感が得られる。これほどの喜びを与えてくれることが他にありえるだろうか。神の恵みは均等にもたらされなければならない。

ジハード

「ジハード」という言葉はこの数十年欧米諸国のメディアで頻繁に取り上げられてきたが、直接あるいは巧妙に「聖戦」を意味する言葉として使われてきた。「聖戦」という言葉は本来、中世ヨーロッパの十字軍の時代にムスリムに対する戦いの意味で考案された。イスラームの辞書には聖戦に対応する言葉はなく、実際にジハードとはそのような意味で

は利他的な配慮とは程遠いところにある。

アメリカン・エンタープライズ・インスティテュートのニコラス・エバースタッド博士は、雑誌「フォーリン・アフェアーズ（Foreign Affairs）」の一九九一年夏号に記載した報告書——本来、長距離計画に関する米陸軍会議のために作成された——の中で、第三世界の諸国における人口の比例増加が国際社会の政治秩序および大国のバランスに及ぼす重要性を警告している。三世代後には、欧米諸国における八人の曾祖父母はわずか四五人の子孫しか持っていないが、多くのアフリカや中東諸国では、三百人以上の子孫を持つことになると指摘している。つまり現在の主要先進国は、将来人口の最も少ない国となるのである。

「アメリカの安全保障および海外権益に関する世界的人口増加の重要性」に関する研究（国家安全保障研究メモランダム二〇〇³⁸）は、世界の複雑な政治的・経済的・軍事的重要性と現在の世界の厳しい現実を明らかにする極めて示唆に富む文書である。人口要因は、革命が起きる誘引や外国の経済的権益の没収あるいは制限への勢いになりえる。貧困、人口増加、ことに若年人口の増加³⁹が開発を迫り、外国の投資条件を見直させ、軍隊への徴兵が現実的な失業対策と見なされるならば、軍事力を拡大させることができる。この文書はところどころで、あたかも工業先進国が開発途上国に対してすでに先制攻撃を仕掛けてい

38 米国立公文書館、National Security Study Memorandum 200（国家安全保障研究メモランダム 200）のファイル、RC273

39 第三世界に共通する現象、出産率の上昇（特に若年層）により人口の大半が若年層であり、平均寿命が先進国よりも低い。

9節)。このように軍事行動は、ジハードの様々な努力の一つであり、軍事行動がジハードのすべてではない。預言者ムハンマドは軍事行動から戻ってきたときに、教友たちに次のように強調した。「本日、私たちは小さなジハード（戦争）から大きなジハード（自己抑制と向上）に戻った」

ジハードは決して他の宗教に対する宣戦布告ではない。まして一部のメディアや政治家が納得させようとしているような、キリスト教徒やユダヤ教徒に向けられた戦闘ではない。イスラームは断じて他の宗教を攻撃するものではない。キリスト教徒やユダヤ教徒は、ムスリムにとって同じ神を信仰しイブラーヒーム（アブラハム）の伝統を受け継ぐ同じ仲間なのである。

イスラームにおける「正義の戦い」の厳しい基準は、従うべき道徳的・倫理的制約と同様におざなりにされてきた。現代の武力衝突はこのような厳しい道徳基準にはそぐわない。すべての陣営が正義の基準に合意するならば、戦争の代わりに別の紛争解決を用いるべきである。世界中の人がひとの賢明で断固たる世論が、戦争を起こそうとする心の動きを抑制することができる。その鍵は人の心の変化にこそある。人間関係で人を許すことが建設的な役割を果たすように、許すことが国際関係においても可能である。そのためには武力ではなく正義が最終的な調停の役割を果たさなければならない。

はない。

「ジハード」とは「奮闘、努力する」という意味である。本来の意味は、自らをより高い倫理的なレベルにまで到達させるために、下品な行為や性向から身を慎み、節操を保ち耐える訓練をする内面的な努力である。イスラームの教えは個人の内面的な世界に限られたものではなく、社会や人類全体の繁栄にまで及んでいるため、ムスリムは自分の属している社会や世界全体で起こっていることから孤立して自分を高めていくことはできない。イスラーム国家に関するクルアーンの命令は、「公正なことを命じ、邪悪なことを禁じる」（第3章104節）ことを義務としている。クルアーンによると、この義務はムスリムに限られたものではなく、地上における神の代理人である人類全体に当てはまる。しかしムスリムは、他の人がどうであれ、その義務を怠ることはできない。それを果たす手段は一樣ではない。現代の世界では、法律、外交、仲裁、経済、政治などさまざまな手段がある。イスラームでは、悪を避けるために他に有効な方法がない場合は武力の行使も排除しない。国連憲章に明記されているように、少なくとも理論上で、侵略を止める集団安全保障の原則および集団介入の先駆けが、クルアーンの中に見出される。「もしも信者が二つに分れて争えば、（両者の間を）調停しなさい。もしかれらの一方が他方に対して、（一方的に）無法なことをするならば、無法者がアッラーの命令に立ち返るまで戦いなさい」（第49章

証を受けなければならない。

結婚は、配偶者に対する相互の約束を意味し、お互いの権利と責任、また自分たちの子供に対する相互の権利と責任を明確にすることである。子供たちは、嫡出である権利――自分の両親が誰であるかを知り、両親との関係から恩恵を受け、正式な結婚で生まれること――を持つている。愛されて育つ権利、身体的にも精神的にも扶養される権利、教育を受ける権利、成熟した有用な市民として人生に直面し、責任を担えるようになる権利を持つっている。

老いて自活能力がなくなつた親の世話をすることは子供の宗教上の義務であり、そのことに不満を抱いたり苛立ちを見せてはいけない。子供が親のめんどうを見ることは、神の思し召しだ。いつの日か子供たちもその恩恵を被る。彼らも自分が親になり老いるとまた子供に世話をしてもらわなければならぬ。

イスラームでは、家族が団結しその絆を強めていくことは極めて重要なことである。それは家族の枠を超えて、広く親戚関係にまで広がる。それをクルアーンは「身内（子宮）の関係」と呼ぶ。血縁者に優しくしたり、必要に応じて金銭的な援助をすることは義務であり、また報いられる慈善行為である。両親が亡くなつた後は親のために祈り、親の友人とも交友関係を保ち、彼らに対しても礼儀正しく、必要に応じて援助しなければならない。

ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒を始め伝統を守ってきた人たちは歴史上、自分たちの宗教や哲学の貴重な教えを誠実に守ろうとしなくなつたことを改めて正直に認めなければならぬ。私たちはすべて過ちを犯し、これからも過ちを犯し続けるであろう。ムスリムもその例外ではない。宗教は何度も野心に燃えた暴君に悪用され、愚かな大衆によつて冒涜されてきた。この問題は宗教のせいではない。人類はむしろより良い教育、人間の尊厳・権利・自由に常に関心を持つこと、正義の追及を怠らないことが必要であり、そのためには、政治的・経済的強欲さの抑制を差し置いても、取り組む必要がある。

家族と性革命

預言者ムハンマドは「女性は男性の伴侶である」と述べている。人類の単位は個々の男性または女性ではなく、（水の最小単位が酸素または水素ではなく、酸素と水素が結びついているように）婚姻で結ばれた家族をつくる男女である。イスラームはユダヤ教、キリスト教、その他の多くの宗教と同じように、家族を形作る男女の結婚が神聖な結びつきであることを命じている。クルアーンは結婚を「宗教上の誓約」とし、契約として書面で認

た観念だが、人びとが無神論を受け入れたり、神を微小化するにつれて、変化は避けがたいものであった。無神論の場合は神の存在を否定する。神を矮小化する場合、神の存在は認めるが神を敬う気持ちはほとんど持たなくなる。神は敬うが、自分達の都合に合わせる。通常、教会に行くのは週末に限られ、それ以外のプライバシーや日常生活で何をするかは神の干渉を受けない。こうした信仰心の衰えが「性革命」の時代をもたらし、宗教的な価値を根本的に変えてしまったのである。

性革命は、多くの人びとが考へているように一九六〇年代になつて始まつたわけではない。また自然な社会的変化を受け入れた結果でもない。性に関する社会的モラルを変えたいと思つた者たちによって入念に計画された粘り強い努力の結果である。性革命は、教会が国民の生活を詮索できないよう縛め出された時代の中で、科学技術の可能性に対する社会の過度の陶酔状態から始まつたのである。科学が眞の知識の源として宗教を失脚させたと信じた多くの人びとは、知性こそ人間のあらゆる問題を解決する手段であると信じ、すべての伝統的な価値は科学の新しい法則に従うべきであると考えた。しかし、人間の知性が自ら認めるように不完全な道具であること、また限界を持つ人間の知性が、絶対的道徳律に関わる事柄について絶対的な判断を下す能力を持つていないと自明の事実を、このように性急で浅薄な人びとは見誤つたのである。人間が日夜努力して多くの知識を求

イスラームにおいて、結婚は二つの役割を持っている。そしてその役割を合法的に助けるのは結婚だけである。一つ目は、身体的にも精神的にもお互いに相手の願望を満たし、一体となることである。「またかれがあなたがた自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれの印の一つである。あなたがたはかの女らによって安らぎを得るよう（取り計られ）、あなたがたの間に愛と情けの念を植え付けられる。」（第30章21節）。もう一つの役割は子供を産み子孫を持つことである。「またアッラーはあなたがたのために、あなたがたの間から配偶者を定め、配偶者からあなたがたのために子女や孫を与えられる。また良いものを与えられる。それでもかれらは虚偽を信仰して、アッラーの恩恵を拒否するのか。」（第16章72節）。

結婚は性と生殖のために法的に唯一認められている形態であり、婚外交渉は重大な罪である。またイスラームでは、違反者を特定し、二人が実際に性的に一緒になつていることを見たと証言する四人の証人がいる場合——しぐさ等から推測して、性交を行つたと單に見受けられるとか可能性があるだけではない——法律上の罪を問うことができる。不倫を告発する証人となる法的基準は厳しい。なぜなら間違つた告発は、家族の絆を壊しかねない深刻な事態を招くからである。

結婚前の純潔や結婚後の貞節を守るといった道徳規範は、かつて欧米諸国で広まってい

純潔といった価値は空虚なものとなり、もはや死語となつた。さまざまな教義や主義主張は、自由の枠組みを広げてゴーサインが得られるようにした。個人主義を尊重する社会では、人々のあらゆる気まぐれが人権と認められるようになった。

このような社会に押し寄せた高波が、宗教とその価値を守る伝統的な守護者であるべき聖職者たちを襲つたことは、道徳にとつてもう一つの痛手となつた。この波に影響された聖職者はトロイの木馬⁴⁰となつた。聖職者は、宗教界から離れて自由の信奉者に加わる代わりに、宗教そのものに働きかけ始めた。聖書の内容を解釈し直し、聖書の新解釈学を構築することで、宗教の歴史全体を通じて忌むべき不埒な背徳行為とされたことを、合法で許されると言い渡した。こういつた聖職者の多くは、自らが避けるべき病原菌に侵されるようになつた。宗教上の理由による独身主義は結婚を控えるであるが、性交を慎むためではないなどと解釈する聖職者さえ出てくるようになつた⁴¹。

その結果は予想通り、社会全体に無秩序な性行動が氾濫した。結婚前の純潔や結婚後の貞節の観念が失われたため、男女の特別な絆としての性が汚されている。その結果、乱交が広がり、レイプ、望まれない妊娠や中絶、合法な両親の嫡出の権利を奪われた望まれない子供の出生、若年層の出産が増えている。さらに、一般家族の子供の十五%が非嫡出といった時代に家族の信頼は損なわれている。そのことに加えて、性感染症の流行のせいで

40 訳注：トロイ戦争でギリシャ連合軍はトロイ軍を欺くために空洞の大きな木馬に兵士を潜ませた木馬。

41 Keith L. Woodward et al., "Gays in the Clergy (聖職者の同性愛)," Newsweek, February 23, 1987, 58.

めて、さらなる研究を深める存在であるという単純な事実は、私たちにとつてまだまだ学ぶべきことが多くあることを明らかにしている。人間がすでにあらゆる知識を獲得し、知性が完璧であると私たちが本当に信じているのなら、私たちの生命や環境に関する知識を追求するために行つてはいるすべて研究を投げ出していたはずである。その方が無駄な研究予算を使う必要もなくなる。しかし、現実はそうではない。クルアーンは次のように述べられている。「あなたがた（人類）に授かつた知識は微少に過ぎない。」（第17章85節）。

神を人間と入れ替えるために、二つの世界大戦の間に、人びとの間に敵意と対立を引き起こしたのは人間の過ちではなく宗教だとして、「宗教抜きの道徳」と呼ばれる運動が起つた。この運動を起つたメンバーは、必ずしも宗教を持ち出さなくとも高い道徳的基準は達成できると見なし、その基準を「中立の道徳」と呼んだ。当初、公にこの運動を支持する者はわずかであつたが、聖書の内容と科学的発見の間に矛盾があることから、人びとが宗教を信用しなくなつたため、「中立の道徳」を支持する動きは徐々に広まつていつた。そして宗教への関心が薄れるにつれ神は失脚し、新たな道徳規範が登場してきた。その中では過去に不道徳であったことが今では当たり前となり、世俗的ヒューマニズムは、人間の価値は人間が決めるべきであり、非人間的規範または超自然的な規範に合わせる必要がないと、最後にはあからさまに公言するようになつた。物質主義が蔓延し、名譽、貞節、

まれて生きている。これは、ムスリムだけの問題ではない。ユダヤ教徒やキリスト教徒も同じように神の倫理を守り、それを子供たちに伝えていくために懸命の努力をしている。ムスリムと他の宗教の信者たちは、聖職者であれ、一般人であれ、教会であれ、手を取り合っている。

子供には早い時期に神について教え（第一章参照）、神を信じることは神の教えを受け入れ、守ることであるという考え方を植えつける。神の教えに従っているならば、他人が従わなくても気にすることはない。神を信じることは、多数派の中に入ることである。神の創造物はすべて同じように神の法に従っているからである。

信仰は周囲の圧力や誘惑に抵抗する信念を育んでくれる。「みんなもしているから」という言訳ができなくなる。信仰の基本を子供に教え込むこの「抵抗力を身に付けさせる方法」は、子供たちが病氣にさらされるよりもずっと以前に免疫を作つておくことにある。体の病氣あれ、倫理的な問題あれ同じことである。兵士が戦闘の最中ではなく、戦闘の前に準備をするのと同じように、将来予測される危険を事前に子供たちと話し合つておけば、子供たちは喫煙、飲酒、薬物、セックスなどの誘惑にさらされたときにどのように態度をとればよいかを前もって決めておくことができる。

結婚前の純潔の教えはむやみに命令するだけではすまない——もちろん、神が命じる

現代人の健康は脅威にさらされている。これらの性病は、新しい病気またはかつて克服されたと思われていた古い病気の再発であるかにかかわらず、既存の抗生物質治療に耐性を得ている病原菌であり、フリー・セックスが広がっているがゆえに、若者を中心に社会に多くの犠牲者が出ていている。

ムスリムにとって、宗教上合法なことと不法なことについて、曖昧さの余地はない。クルアーンは啓示されたときのままの形で一言一句、一文字一文字そのまま残されている。クルアーンは神の御言葉であり、いかなる言語であれ——クルアーンの言葉であるアラビア語を含め——翻訳されたものはクルアーンと呼ぶことはできない。クルアーンに定められている道徳と不道徳はこれからも永遠にその形のまま存続し、その意味を弱めたり操作したり合理化することはできない。特別な解釈をする権限や能力が授けられている聖職者や学者はいない。だからといってすべてのムスリムは信仰深く、罪を犯さないと云うわけではない。もちろん、ムスリムの中には、罪や忌むべきことを犯し、自らの宗教に違反する者がいるが、少なくとも彼らはそれが罪であることを知つており、神に悔い改めるまで良心の呵責にさいなまれる。

道徳向上させるための現実の問題は、非ムスリムの社会に生きるムスリムが抱えている問題の中にある。彼らの子供たちはイスラームの教えと対立する社会的道徳的規範に困

の後まもなく、米国精神医学会は、同性愛をもはや病気と見なすべきではなく、単なる指向または性行為の変異と見なすべきだと宣言した。その後は歴史が示すとおりである。

「ゲイ・パウエル・シンドローム（男性同性愛腸管症候群）」のことがその後、医学雑誌に論文として掲載された。のちにその病気は、エイズとしてニュースに取り上げられるようになり、同性愛者の性行為との関係が明らかとなつた。エイズの問題は、伝染病を封じ込める通常の規則をエイズに課すことができない医療分野から締め出された。エイズは政治的な問題になつた。政治力を得た同性愛の圧力団体は、役人や政治家に圧力をかけ、マスコミや芸術家、聖職者などから多くの支援を得ることとなり、エイズは封じ込められるどころか、逆に広がつた。輸血者、薬物中毒者、子宮内胎児、妻（その他）との異性間性交、汚染された体液に不注意にも触れてしまつた人等に深刻な影響を及ぼした。エイズは世界的な伝染病になり、深刻なペースで広まり続いている。ムスリムはエイズ患者に思いやりと愛情を持ち、最善の医療を願つてゐる。感染していない者には予防的な措置を勧めるが、それはコンドームではない。安全なセックスなどありえない。唯一安全なセックスは、結婚までの純潔と結婚後の貞節を守ることである。

同性愛に関する論争は高まつてゐる。「ありのままで」とか、「なにも恥じることはない」と言われている。疑うことを知らない多くの若者は試してみる中で、実際にどういうこと

とき、われわれは傾聴し、従うことが教えられている。ムスリムとムスリムでない若者との討論の中で、純粹に知的な内容でなければならないが、事例を挙げて具体的に説明できる。「男女平等を信じる者は？」と尋ねると、満場一致で「イエス」と答える。「正義を信じる人は？」と尋ねると、再び満場一致で「イエス」と答える。その後、二人のパートナーの関係でお互いの負担が等しくないと主張をすると、全員が認める。フリーセックスの場合、その後の負担は男女平等ではない。なぜなら女性の方が敗者になる可能性が高いからである。捨てられ、妊娠して中絶するか、出産して子供を養子に出すか、非嫡出子を産んで残りの人生を一人で育てるしか道はない。この結末を踏まえて、「これが正義といえるだろうか？」と質問すると、全員が「ノー」と大きな声で答える。

同性愛の運動は、性革命の時代からかなり遅れて始まった。もちろん同性愛は新たに生み出されたものではなく、実際にはあらゆる文化や人びとの間に存在してきた。しかしその数は、大抵今日よりも遥かに少なかつた。ところがその影響力は、政府への働きかけや組織化された運動によってこの二十年間で急激に大きくなつた。ある学術会議に出席すると、その中で科学的な方法論を用い肛門性交の安全性を科学的に「証明する」論文が発表された。当時一九七〇年代の初めであつたが、その研究結果は単純に一般常識に反しているように思えた。私は学者としてそのとき初めて、一部の研究者の誠意を疑い始めた。そ

る。「自己抑制の遺伝子」と呼ばれているものである。

生命医学の倫理

生殖の問題

出産規制

臓器提供・移植

産児制限

母乳による授乳

神経組織の移植
無脳胎児

避妊リング

生殖腺の移植

中絶

避妊手術

死の定義

であるかを「発見する」。同性愛は合意が前提条件であるが、北欧のロビー団体はその年齢を四歳に下げようとしている。カリフォルニアでは毎年「ゲイ・プライド・デー（ゲイを自慢する日）」を祝い、マスコミが取材する。一部の学区では「ゲイ・プライド月」を決めて、偏見や先入観を取り除こうとしている。男性同士または女性同士の家庭が家族の代替形態として紹介されている。

最近、科学は同性愛指向への解剖学的または遺伝子的基礎の可能性を研究し始めた。ムスリムは興味を示さない。私たちにとつて物事は極めて単純である。我々は宗教をつくるのではなく、授けられた教えに従うだけである。私たちの信仰を他人に押し付けることはできないが、私たちは同性愛的行為を明確に非難しているクルアーンおよび預言者ムハンマドの教えの信憑性を信じている。人が同性愛の性向を持つているとか、「同性愛遺伝子」を持つっているといったことに関係なく、人の感情や欲望が行動を決定づけることはできない。衝動に駆られることがあるかもしれないが（同性愛性交、結婚外異性間性交、飲酒、凶悪犯罪や窃盗など）、心に思つていてることを必ずしも行動に移す必要はない。「信仰する男も女も、アッラーとその使徒が、何かを決められたとき、勝手に選択すべきではない。アッラーとその使徒に背く者は、明らかに迷つて（横道に）逸れた者である。」（第33章36節）人間は、議論の余地のないある遺伝子を持つており、それが欠けていると人間ではなくな

重視した。彼の預言的予言によると、「いつの日か、他の国々が食べ物のお皿に群がる飢えた人々のようにあなたがたのところにやってくる」イスラーム国の人口が少ないためであるかを聞かれると、彼は言つた。「いや、その時あなたがたは多勢であるが、（質において）あなたがたは激流の表面の泡のようであろう」

イスラームの歴史を見ると、イスラーム法学者たちは健康や社会経済的能力、また美しさを保ちたい女性の願望など、多くの理由から家族計画を認めてきた。避妊は自然な方法と人工的な方法の両方が認められているが、体に有害であつたり、人口妊娠中絶薬であつてはならない。また避妊は強制や圧力によるものではなく、個々の家族が選択するべきである。人口政策を導入している国では、行き届いた啓蒙活動によつて避妊技術の普及に努めているが、その判断は家族に委ねられるべきである。

欧米諸国が第三世界に向けて立案した人口プログラムに関する懸念は、すでに前述した。第三世界の国々は、自分達の国民から人口という数の力を奪おうとしたり、一部の地域で多数派である人々をマイノリティにしようと試みる「人口戦争」を懸念している。また、製造された国——欧米諸国——では使用が禁じられている避妊具が安全基準の緩いイスラーム諸国や第三世界の国々に大量に輸出されている事実を危惧している。欧米の投資は第三世界が持つ資源の開発に今なお多く向けられ、そのためには必要な技術の移転は積極

不妊治療

安樂死

人工授精

体外受精

遺伝子工学

代理母

この節では、生命倫理の分野における最前線のテーマで、イスラームの合意が確立している問題について、イスラームの見解を説明する。

生殖の問題

受胎規制

〔避妊〕 イスラームでは、避妊が結婚と生殖機能を根本的に分離しない限り許されている。預言者ムハンマドの時代から避妊は行われていたが、ムハンマドはその利用にあたっては夫婦双方で決めなければならないと明言していた。イスラーム諸国では一般的に、出産して人口を増やすことが薦められていたが、ムハンマドは数を増やすだけではなく質を

ではない。現代版の避妊リングには殺精子銅イオンを放出する銅線が入っているか、プロゲステロン・ホルモンが含まれている。このホルモンは子宮頸管粘膜を厚くするため、精子が通過できなくなる。こういった最新の避妊器具の機能から判断すると、世界保健機構も認めているように、避妊リングは中絶ではなく避妊器具に分類される。

「中絶」 イスラームの社会では妊娠中絶反対派も賛成派もない。イスラームは、中絶は人の生命の侵害であり避妊とは根本的に異なるものと見なしている。そこで当然生じてくる疑問は、「人の生命」の概念が子宮内の胎児の生命を含んでいるかどうかである。イスラーム法によると、胎児は「人の生命」に含まれている。イスラームは胎児に「不完全なデインマ（法的人格の存在）」の地位を認めている。「デインマ」とは権利と義務を認める法的概念であり、胎児のデインマは、権利はあるが義務がないという意味で不完全である。胎児の権利の一部が下記に示される。

一 妻の妊娠中に夫が亡くなつた場合、相続法では胎児が生まれた場合に父親の相続人としての地位を認めている。他の相続人は定められた法律上の比率に従つて取り分を受け取

的に行われている。

「授乳」 イスラームでは母乳で育てることを強く薦めている。授乳は家族計画の方法として個々の家族にとって確実に信頼できる避妊方法ではないが、母乳で育てる母親のコミュニティの受胎率下落を測定した結果、集団ベースでは、他のすべての避妊方法を組み合わせたものよりも効果があると推定されてきた。クルアーンは授乳に触れており、その自然な授乳期間は二年間としている。

イスラームでは、授乳を単に栄養上——または家族計画——の観点から薦めているわけではない。それは「価値」であり、母と子の間に特別な絆を育むものと見なしている。というのも生みの母ではない女性が乳児に授乳した場合、その女性はイスラーム法で「授乳した親」と呼ばれ、特別な地位を得て乳児の「乳母」と呼ばれている。その価値を強調するために「乳母」は、結婚に関する法律では生みの母親の地位を与えられている。乳母の実子は授乳した子供の「乳兄弟」と見なされ、乳兄弟とは結婚できない。

「避妊リング（IUD）」 避妊リングが実際に中絶を引き起こすことで避妊の役割を果たすのであれば、その方法は認められない。この場合の避妊リングは着床を回避するため

生命の始まりはいつかという問題は、イスラームの初期の時代から論議されてきたテーマである。中絶が認められないということは、生命の存在が証明できるかどうかにかかっている。かつて一部の法学者は四ヶ月以内の中絶を認め、他の者たちは妊娠七週間以内とした。約千年前、著名な学者であるガザーリーは、生命の始まりとは母親が胎動の形で感じる前の段階の感知できない生命の段階であると正確に記した。最近の法学会議は、現代のテクノロジーの活用を考慮に入れ、この問題を検討し、個人の生命の始まりと呼べる段階は、次に挙げる条件を「すべて」満たすべきであると結論づけている。(一) 明白で十分定義された出来事であること、(二) 生命の基本的な特徴を示していること、すなわち成長していること(三) その成長が中止されない場合、一般的に知られているように生命の後の段階を踏んで自然に成長していること、(四) 人類全体の特徴である遺伝子パターン、また特定の個人に限定された特徴である遺伝子パターンを含むこと、(五) 上記四つを組み合わせた他の段階が先行しないことである。明らかに、これらの基礎条件は受精と呼ばれる。

ただし、妊娠が母親に深刻な事態をもたらしかねないとき、中絶は認められる。シャリーア

るが、胎児の取り分は出産まで取り置かれる。

二 胎児が妊娠中に流産し、咳や胎動など生存の兆候を示した後に亡くなつた場合で、この胎児が法的相続権を持つ者が妊娠期間中に亡くなつた場合、この胎児はその者の財産を相続する権利が認められる。この胎児が亡くなつた後は、胎児相続したものはその法的相続人が引き続き相続する。

三 罪を犯し死刑判決を受けた女性の妊娠が判明した場合、刑の執行は女性が出産し、子どもが乳離れするまで延期される。これは妊娠時期に関係なく適用される。たとえ妊娠が初期段階であろうとも、最初から胎児の生きる権利を認めていた。それは非合法な妊娠にも適用される。婚外交渉で妊娠した胎児にも生命の権利が与えられている。すべての宗派や法学派は全会一致でこのルールを支持している。

四 たとえ不注意であつても、中絶を行つた場合に課せられる罰金がある。これは「ゴーラ」と呼ばれている。攻撃や意図的な行為が中絶を引き起こした場合は、裁判所が適切な処罰を課す。

「人工授精」 人工授精は夫の精子である場合にのみ許される（A I H）。生殖は結婚の契約を結んだ夫婦およびその夫婦の要素においてのみ合法であり、ドナーの精子（A I D）を用いることができない。

「体外受精（I V F）」 一般的に「試験管ベビー」の技術として知られているこの処置は、イスラームでは夫婦間でのみ、すなわち結婚の契約の範囲内において認められている。その結婚の契約は有効かつ存続しているものでなければならない。結婚の契約は離婚や夫の死亡によって終了するので、女性は精子バンクに保存した亡き夫や元夫の精子で妊娠することはできない。夫婦以外の第三者が関与した体外受精や、遺伝子の材料（精子または卵子）の代理人は、夫婦を結び付けていた結婚契約への不法介入となるため認められていない。「外来精子」、「外来卵子」、「外来子宮（夫婦の胎児を妊娠する）」も認められていない。

「代理母」 女性が他の夫婦の胎児を自分の子宮の中に身ごもる代理母は、イスラームでは絶対に認められていない。これは正当な結婚契約を逸脱した妊娠も含んでいる。本来一つであるべき母性を、遺伝子部分と生物的的部分に二分することになる。代理母にかかわった女性の間で親の権利をめぐって合意できなかつたとき、アメリカでは裁判などの問題が

アは母親を土台、その胎児を派生物と見なしているため、母親を救うために胎児の処理が求められている場合、胎児を犠牲にすることは許されている。胎児が先天的に生命を維持できないような病気や異常を抱えている場合には中絶を認めるべきであると主張する人びともいる。その場合、中絶は妊娠四ヶ月以内に行わなければならぬ。

「避妊手術」 医師の明確な指示によつて行われる場合は別として、避妊手術は一般的に回避されるべきである。しかし、すでに子供を多く産んでいたり女性や出産年齢が終わりに近づきつつある女性が避妊手術を受けることは認められている。その場合、夫婦双方に事前に通告し、自主的な合意を得なければならぬ。一旦手術を済ませると、後日気が変わつても元通りに戻せる保証はないといふ通告する必要がある。手術が患者にとって最善の策であると確信できない場合、医師には手術の実施を断る権利がある。

不妊治療

妊娠を求めるることは合法であり、個人はその目的のために必要な措置を講じることができる。ただし、その措置はシャリーアに違反してはならない。

したがつて、こう着状態を即座に解決する次の二つの法的決定が実施される場合は別として、ドナーが生体、死体にかかわらず、その体を切開して、臓器を摘出することは許されない。最初の決定は「必要性が禁止を無効にする」である。二番目の判断は「二つの弊害が避けられない場合、より小さい弊害を選ぶべきである」である。生命を守る方が、人体や死体の尊厳を守るよりも重要なとき、またドナーの体を傷つけることが患者を死なせるよりも弊害が少ないと、臓器提供や臓器移植の措置は認められている。その場合、医学的に確認される範囲内で、ドナーの生命に危険が及ぼしてはならない。ドナーまたは亡くなつたドナーの親族が提供の意思を示しているときは、圧力を受けることなく自由に同意するルールに従わなければならぬ。

「神経組織の移植」　近年の実験で、神経組織の移植によって一部の疾病的治療の可能性が出てきた。その組織の供給源が、副腎髓質や動物の胎児、または人間の胎児で自然死による自発的流産の場合は合法とされる。この目的のために、生きている胎児または成長可能な胎児を犠牲にすることは非合法である。合法的な中絶——母体を守るため——による胎児の組織は移植可能である。移植のために胎児を作つたり、中絶させることは非合法である。

起こっている。赤ん坊の運命を左右するこうした契約は、あたかも赤ん坊を商品のように扱つており、明らかに人間性を無視している。代理母の影響が広範囲であることは明らかではあるが、まだ一般には十分に認識されていない。歴史上、女性が自分の新生児を他人に渡すことを事前に合意した上で、妊娠全体と出産を積極的に選ぶようなことがあつただろうか。大半の場合、価格を交渉して行われ、「母性」が「価値」から対価に貶められる。これが一般的に広く行われるようになると、世代間の絆に対し長期的に破壊的な影響を及ぼすであろう。

臓器提供と臓器移植

クルアーンは次のように述べている。「そして一人の命を救つた者は誰でも、人類全体の命を救つたことになる」。おそらく、この教えを実現する上で、生命維持に不可欠な臓器が壊れている場合に提供された臓器を移植することほど素晴らしい方法は他にないであろう。イスラームの規則を総合的に判断した結果、この結論に達した。

基本的に、人の体を生死にかかわらず傷つけることはイスラームの法律に反している。

臓など——の移植用摘出など、医学的な問題の決定にとつて極めて重要である。さらに、この定義は法律上の問題と直接関係している。たとえば複数の相続人が相次いで亡くなつた場合に相続する遺産の配分、また夫の死後未亡人が再婚するまで待機する期間——四ヶ月十日、妊娠している場合は妊娠の終わりまで——の始まりを決めることが挙げられる。

近年の法学会議では、一部の生理的機能が人工生命維持装置で維持されている場合でも、完全な脳死（脳幹の死を含む）に基づく新しい死の定義が認められるようになった。この新しい定義は、致死傷害の概念を認めた古い法的基準に「類推」方法を用いることで可能になつた。数百年前は、人が刺されて内臓が飛び出ている場合、犠牲者が死に際の動きなど、専門的には「死者の動き」と呼ばれる徴候を示し続けている場合でも、致死傷害であると判断された。二番目の攻撃者が犠牲者を完全な死に至らしめた場合でも、殺人罪に問われるるのは最初の攻撃者である。二番目の攻撃者は起訴されるが殺人罪ではない。体の臓器や組織が人工的に維持されて生存している脳死者は、生き返ることは科学的には不可能であるため、「死者の動き」の状態と見なされてきた。この状態の者の生命維持装置を外すことや、その心臓を生きたまま摘出して、心臓の障害が回復する見込みのない患者に移植することは犯罪ではない。

「無脳胎児」 無脳胎児は、頭蓋冠と脳の半球が欠落する先天性異常が原因である。出産直後は生存しているが、数日の内に死亡する。無脳児が生存している間は、移植用臓器として利用すべきではない。その生命の人工的停止は違法である。脳（幹）死と認められるまで、その組織を健全に保つために人工蘇生法で維持できる。その組織は脳死後初めて取り出すことが認められる。

「生殖腺の移植」 精子を生成し射精機能を持つ睾丸や排卵機能を持つ卵巢を他人に移植することは違法である。移植された精子や卵子は被移植者のものではなく元々ドナーのものであるため、血筋をあいまいにさせ、正式な結婚で結ばれていない配偶子を受胎させることになる。無精子もしくは無排卵となる（配偶子を生成しない）生殖腺は、ホルモンが出ていている場合でも移植禁止の対象にはならないが、不妊治療に利用する意味はない。

死の定義

死の瞬間の定義は、人工生命維持装置の取り外し容認の決定や単数の重要臓器

— 心

須条件および予防措置を定めている。

「人に自殺する権利はあるのか」イスラームは自殺を権利として認めていない。むしろ違反行為と見なしている。人は自らを創り出しているのではなく、自分の体を所有していない。自分の体を勞わり、養い、守ることを任されている。神が生命を所有し、与えているのである。命を与える、奪い去る神の権利を侵してはならない。自殺を企てることは、イスラームにおいては犯罪であり、重大な罪である。クルアーンは次のように述べている。「またあなたがた自身を、殺し（たり害し） てはならない。誠にアッラーはあなたがたに慈悲深くあられる」（第4章29節）。

預言者ムハンマドは、自殺に對して次のように警告している。「鉄の器具を用いて自殺する者はすべて地獄で永遠にそれを持ち続ける。毒を手に取り自殺する者は地獄でその毒をすすり続ける。山から飛び降りて自殺する者は地獄の底へ永遠に落ち続ける」

「安樂死　— 慈悲による殺人？」　シャリーア（イスラーム法）は人の命を奪うことができる条件　— 人命の尊厳の一般的規則の例外　— を記載し明確に定めているが、そこに「慈悲による殺人」は含まれない。またそれを認めてもいい。人の命は、他の条件

安樂死はオランダで合法化された。アメリカでは二つの州で住民投票にかけられたが否決されている。だがその法案を成立させようとする運動は活発なものとなってきた。イスラームは安樂死について独自の明確な見解を持つている。

「人命」人命の尊厳は、ムーサー（モーゼ）やイーサー（イエス）、ムハンマドの時代以前から神が命じている基本的な価値である。アーダム（アダム）の二人息子の弟ハービル（アベル）が兄のカービル（カイン）に殺されたことについて、神はクルアーンの中で次のように仰せられた。「そのことのためにわれはイスラエルの子孫に対し、掟を定めた。人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである。人の命を救う者は、全人類の命を救つたのと同じである（と定めた）」（第5章32節）。またクルアーンには次のように示されている。「正当な理由による以外は、アッラーが尊いものとされた生命を奪つてはならない」（第6章151節、第17章33節）。シャリーア（イスラーム法）は、人の命を奪うことが認められる条件の定義について非常に詳しく論じ、戦時および平時（刑法の項目として）において、その使用を制限する厳格な必

当に限りない報酬を受ける」(第39章10節)。「あなたに降りかかることをすべて(病であれ)
耐え忍べ。本当にそれはアッラーが人に定められたこと。」(第31章17節)。

預言者ムハンマドは次のように教えている。「信仰する者が痛みで苦しむとき、たとえ
棘が刺さった程度の痛みであっても、神はかれの罪を赦し、木々が葉を落とすようにかれ
の悪い行いは捨て去られる」

痛みを抑えたり、和らげる手段が十分効かない場合、避けられない痛みを受け入れ、耐
えることが、後に永遠に続く本当の生活である来世で報いられる信じることは、患者に
とって非常に効果的な精神的支えとなる。来世を信じない者にとってこの考え方を受け入
れられないであろうが、来世を信じる者にとって、安楽死は明らかに賛同しがたい。

「経済的要因」 不治の病や高齢者を扶養する費用に関心が高まっていることに疑問の余
地はないが、安楽死賛成派の中には、「死ぬ権利」という考え方を通り越して、「死ぬ義務」
にまで言及している人たちがいる。彼らの主張は、人間という機械は生産期間を過ぎても
生き続けると、その扶養が社会の生産部門にとつて容認し難い負担となるため、徐々に老
化させるよりは、唐突に廃棄すべきであるという考え方である。⁴³

こうした考え方にはイスラームにまったくならない。イスラームは金銭面を考慮するよ

⁴³ Atalli, Jacques. La médecine en accusation. Quoted in Michel Solomon, 'L'Avenir de la Vie,' Coll. Les Visages de L'avenir. (Paris : Seghers, 1981), 273-275.

に関係なく、無条件に尊重すべき本質的な価値を持つている。生きる値打ちのない命という考え方にはイスラームには存在しない。

苦しみを取り除いたり逃れるための自殺を正当とする理由は認められない。預言者ムハンマドは次のように教えている。「昔、苦悩を抱え、我慢を強いた男がナイフを手にとり手首を切って、血まみれとなつて死んだ。そのときの神の御言葉は、『われのしもべが死に急いだ。われはかれに天国を認めない』というものであった。」またある戦いでムスリムの一人が殺されたとき、預言者の教友は彼の戦闘での果敢さをほめ讃え続けていた。ところが驚いたことに、預言者ムハンマドは「彼は地獄行きの運命にある」と教友たちに話した。教友たちが彼の死について調べてみると、彼は大怪我をしたため剣の柄を地面に立て、その先に自分の胸を突き刺し、自害していたのである。

第一回イスラーム医学国際会議で承認されたイスラーム医学倫理法規⁴²は、「自殺などの慈悲による殺人は、この地上での人生は虚しいと信じる無神論的考え方の外では支持できない。激痛を伴い治る見込みのない病気での殺人の主張も反駁されている。一般的に投薬または適切な神経外科的処置で克服できない人間の痛みはない。」

さらに、痛みや苦しみの問題に超越することの意義がある。我慢することや忍耐力はイスラームで高く評価され、大きく報われる価値と見なされている。「よく耐え忍ぶ者は本

⁴² Islamic Code of Medical Ethics (イスラーム医学倫理法規) (Kuwait : Islamic Organization of Medical Sciences, 1981), 65.

に固執しない十分道徳的で精神的な社会を再構築することである。

「臨床的症状」イスラームの社会では、一般的に安楽死の問題は生じない。また生じたとしても、宗教的に非合法であるとして却下される。患者は家族や友人から――患者に精神的（宗教的）な忠告を与える者も含め――可能な限りあらゆる精神的支えや愛情を受け取るべきである。医師もそこに加わり、痛みを和らげる治療的処置を行う。痛みを緩和するために必要な鎮痛剤の投与量が、患者を死なせてしまいかねない致死量に近づく場合または致死量を超える場合に、ジレンマが生じる。医師の側でこの状況を避ける手腕が求められるが、宗教的な観点から見ると、重要な問題は医師の故意である。鎮痛剤は殺すためか、痛みを和らげるためなのかである。故意を法律で実証できないが、イスラームによると、神の絶えざる監視の目は免れない。クルアーンによると、神は「(アッラーは)目つきも、胸に隠すこととも凡て知つておられる。」(第40章19節)。法的な犯罪であると証明できない罪は裁判官の領域を超えていたが、神に対する責任は免れない。

病気の治療法を探すことはイスラームの義務であり、預言者ムハンマドも次のように重ねて述べている。「神のしもべたちよ、治療法を探しなさい。神があらゆる病気に治療法を作られた」また「あなたの体はあなたに対する権利がある」。治療の見込みがない場合、

りは、価値を重視する。病人や老人、そして身寄りのない人びとを世話することは、人びとが時間や努力やお金を喜んで捧げるべき大切な価値であり、こうした行いは当然、親を世話することから始まる。「あなたの主は命じられる。かれの外何者をも崇拜してはならない。また両親に孝行しなさい。もし両親かまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて老齢に達しても、かれらに『ちえつ』とか荒い言葉を使わず、親切な言葉で話しなさい。そして敬愛の情を込め、両親に対し謙虚に翼を低く垂れ（優しくし）て、『主よ、幼少の頃、わたしを愛育してくれたように、一人の上に御慈悲を御受け下さい。』と（祈りを）言うがいい」（第17章23・24節）。このような社会的弱者に対する世話は神が命じ、現世と来世でその見返りが授けられる人徳である。信仰する者たちにとつてこのような行いは背負わされたことではなく、報奨が授けられることと見なしている。お金がすべての実利主義的な社会では、この考え方は無意味であるが、信仰深い人々が神を信じ価値を重視する社会では、大切なことである。

イスラームでは、個人に資力がなく必要とする介護の費用を負担できない場合、それは社会全体の責任となる。金銭的な優先順位は置き換えられ、有意義なことが快樂よりも優先される。人間は有意義なことを優先する方が他の快樂を求めるよりも、実際にはもっと深い喜びを得るものである。もちろん、その喜びを会得するためには、現状の物質的快樂

ける政教分離の概念が、神を人間の問題から締め出すことを意味していないにもかかわらず、同一視され、推し進められている。

二十世紀にナチスドイツが安楽死を行つた歴史は、私たちに大きな衝撃を与えた。知性と専門的知識を持つ医学界の最高位にある人々が安楽死を支持し、率先し、実施した。「生きる価値のない命」という考え方が認められ、受け入れられると、後に戦慄をもたらすに至つたある種の決定を実行する基礎が築かれたのである。安楽死を求める運動はオランダで再び立ち上げられ、欧米を対象に広まつてゐる。安楽死反対派は、患者が自由に選ぶことができると言われている同意に疑問を呈している。患者はすでに大きな個人的苦悩を抱え、自らの病気とその治療が精神的にも経済的にも家族に大きな負担を与えていることを知ることでさらに苦しまなければならぬ。その上、家族が与える承諾には利害が対立する可能性がある。安楽死賛成派と反対派の論争は始まつており、その結果はまだ明らかではないが、イスラームでは神学上の教えが確立されているためこういった論争は起りえない。

治療を求めるることは必ずしも必要ではなくなる。この教えは外科治療および薬物治療の両方に言えることである。大多数の学者の見解によると、人工生命維持装置にも同じことがいえる。生きている人間の権利である日常の扶養は、「治療」とは見なされない。飲食物、通常の看護など、日常の扶養は患者が生きている限り差し控えるべきではない。

イスラーム医学倫理法規は、次のように明記している。「生命を守る上で、医師は自らの限界を認識し、それを超えることがないように慎重でなければならない。生命が回復できないことが科学的に確実な場合、思い切った方法で無闇に患者を植物状態に留めたり、冷凍その他の人工的な手段で保存することは無駄である。医師が維持すべきものは生命のプロセスであり、死のプロセスではない。ただし、いずれの場合においても、医師は患者を死なせるために積極的な処置を行つてはならない。」

解釈

安楽死の議論は、社会の全体的な思想的背景から孤立させることはできない。神、そして神が定めたシャリーア（イスラーム法）を信じるムスリムは、この問題について、無神論者あるいは神の存在は認めるが人間の行為の善悪を定める神の権限を認めない人びとは当然異なる見解を持つている。現代のキリスト教世界の多くの国では、教会と国家を分

として適用できないとするのが大多数の意見である。この節を無闇に当てはめると、治療のために必要な様々な種類の外科手術と相反することになる。これらの手術の中には、神の創造を一部変えることがある。

多くの倫理的な問題は遺伝子工学の発達と共に生じている。細菌戦争で用いられる新種の毒性バクテリアの作成は、組み換えDNAのテクノロジーが最初に報告された一九七〇年代初めに大きな関心事となつた。このような技術の応用は明らかに間違つてゐる。遺伝的疾患の診断、改良、治療、予防などへの応用は望ましく、また勧められるべきである。遺伝子交換は、分子レベルとは言え実質的には移植手術である。遺伝子工学の薬学的可能

性は、多くの疾病的治療において限りなく大きな展望をもたらしている。また農業や畜産業における遺伝子工学の可能性は世界中の飢餓の問題の解決に役立つかもしれない。

遺伝子工学に関する主な問題は、未知の予測できない将来の分野にある。体細胞だけでなく、生殖細胞に新種の遺伝子を移植する可能性は、のちの世代に影響を及ぼし、悲劇的な自己増殖的突然変異と結びつく可能性がある。放射線の危険性はしばらくの間一見したことろ分からず、その被害も治療できるものではなかつた。遺伝子工学の将来の結果はもつとはるかに深刻である。

遺伝物質を一つの種から他の種へ取り込むことは実際に、混ぜ合わせた特徴を持つ新し

遺伝子工学はイスラームの学者の間で長きに渡る論議を巻き起こしてきたテーマであるが、それは「神の創造物を変える」という一節がクルアーンの中にあるためである。クルアーンによると、悪魔はアーダム（アダム）とハウワー（イブ）を誘惑して、禁じられた木の実を食べる罪を犯させたが、二人が後悔し、神に赦され、神の代理人として地上に住む役目が二人に授けられると、悪魔は落胆した。その後悪魔は、人間が結局は信頼に値しないことを証明できるチャンスをもう一度もらえるように、神に頼んだ。神は悪魔に人間を誘惑する許可を与えたとき——悪魔に自ら従う者だけを誘惑できることを明確にした——悪魔は人間を呪う企みを暴露した。「わたしはあなたのしもべの中、相当の部分の者をきつと連れさるでしょう。またわたしはきっとかれらを迷わせて、その虚しい欲望に耽らせ、またかれらに命じて家畜の耳を切り、アッラーの創造を変形させます」（第4章118・119節）。この一節は、遺伝子工学に関連する問題について、イスラーム学者の判断や医師の意見に深く影響してきた。たとえば、この節は男性から女性またはその逆の性転換手術の問題に該当する。この一節は明らかに、性転換のようなラディカルで不自然な外科手術に適用されるが、このクルアーンの節は遺伝子工学を全面的かつ根本的に禁じるもの

終わりに

この本を読んだ後、他の本と同じように部屋の隅に積み置かれてしまうとすれば残念なことである。洞察力のある読者が、私が書いたことを信じて、それを心に留めてくれたとしても、私の最終的な目的は叶えられない。認識の段階が精神運動の段階まで進まなければ、私の使命は達せられないのである。本書に記された知識が、読者の気持ちに何ら訴えず、行動に反映されなければ、私の著作は実を結ばない木のように不毛のままである。

人間は心の中を真空にしておくことはできない。そこは愛や憎しみ、あるいは無関心で満たされるはずである。私は歳を取り、長年イスラームの信仰について研究し、内省、洞察してきた結果、今心の中が愛で満ち溢れているのを感じている。それは何か特定のものに向けられた愛ではない。私は自分の仲間である人間や動物、鳥や木々、そして私たちが暮らす地球、さらに宇宙への愛を感じている。私の心の奥底でそれらが広がっていくことを望んでいる。

愛は政治や経済、産業や経営、労働や事業、そしてもちろん戦争などに置き換えることはできない。しかし人びとの行動は、必然的にその発射台ともいえる態度や考え方によつ

い種の創造を意味する。知られざることを解明し、達成されていないことを達成しようとする人間の性癖によって向こう見ずには追求していくならば、人間は生物上の段階にまだ現れていない生命の形態と直面させられることになるであろう。もしそうなれば、科学者はすべてをコントロールできると考えるかもしれないが、現実はそうではない。人間の子孫を操作することは、病気との闘いの領域を超えて、望ましいと見なされる身体的特性を重視することになり、エリート主義、また望ましい特性を持たない（正常な）個人の差別につながりかねない。最悪の例は、行動を形成する遺伝子を分離して行動を操作しようとすると試みである。人格、また個人的責任および説明責任の人の能力を変えようすることは、イスラームでは明らかに非難される。

遺伝子工学の技術そのものは巨額の投資資本を惹きつけ、投資家たちは当然、投資に対する最大限の見返りを求める。多くの科学者たちは、浮世離れした象牙の塔から出て金銭的見返りを求めるようになり、また「」の利益を省みない開かれた科学者の協力の精神を放棄し、企業秘密と特許申請に専念するようになった。平等、正義、公益に関する道徳上の懸念が表されてきた。おそらく、遺伝子工学に関する包括的な公開討論の場を設け、その倫理規範を前向きに検討し作成する時期が来ている。将来の長い道のりではあるが、今まさに始まろうとしている。

て推し進められる。残念なことにこれまで、個人レベル、国際的なレベルにもかかわらず利己主義や強欲、教条主義や無神経さが蔓延してきた。もしそれらを取り除くことができるならば、すべての人びとが幸せになるであろう。まして、人類の共通の利益のために自らの人生を犠牲にしようとする人びとも幸せを感じるであろう。

基本的な動機としての愛の哲学は決して新しいものではないが、現代の人びとはそれを真剣に受け入れようとはしない。愛の教えは宗教や人種を超えて広がっている。愛にこだわる理由は、お互いに手を差し伸べ、仲間になるためである。善良さが人々の間で広がるならば、マイノリティに留まることが身を守ることにはならない。愛は人類すべてが求めているものである。人びとは物質的な解決や無神論の欺瞞にうんざりしている。人びとは精神的に飢え、癒しを求めている。人生に善良さと品位を求め、その道に向かつて率先し努力する最低限度の人びとがいれば、やがて圧倒的な力で持つて連鎖反応を生み出すことができる。世界は変わるであろう。だが、その変化は、愛が重要であると信じる人びとによる勤勉で利他的な努力なくして、決して実現できないであろう。

ムスリムの考え方を解説

16億人が信奉するイスラームの教え

11011年3月110日 第一刷発行

著 者 ハッサン・ハーフーム

訳 者 久米智恵

発行所 イスラミックセンター・ジャパン

〒156-1004

東京都世田谷区大原1-16-11

電話(03)34560161-6

FAX(03)34560161-6

<http://www.islamcenter.or.jp>

info@islamcenter.or.jp

ISBN978-4-900122-11-6

定価：本体 800 円+税



ハッサン・ハトフト

まれに、世の中の考え方を大きく変えてしまう本が出てくることがある。作者も傑出している。「ムスリムの考え方を知る」は、まさにそのような本である。ハッサン・ハトフト博士は、単純な観察から始めた。当初、エジプト出身の医師として英国に在住し、その後米国で10年以上暮らした日々の中で、西洋とイスラームの二つの文化を見つめ続けたのちに、「イスラームは、実像とか離れたイメージが西洋で広がっている」ことに気付いた。

著者の博識な知性（医師、思想家、教育者、詩人）が、読者をイスラームの広範囲にわたる旅にいざなう。本書は、イスラーム的生き方を鋭くかつ分かりやすく「分析」している明解な内面的ガイドブックである。皮相な現象の背後にある知的活動、行間に秘められた心、理論的根拠、神の最高の叡智、神の存在を探り、解明している。

ムスリムではない人々にとって、またハトフト博士が「ユダヤ教とキリスト教とイスラーム教に共通した教えに従う人々」とうまく言い表している人々にとって、本書の知性に導かれた航海は、明るく照らされた示唆に富む旅である。ムスリムには、自らの信仰を考え直す機会をあたえ、新たなミレニアムの前途に現れるディレンマに対して、時宜を得た心強い答えを指し示している。

「ムスリムの考え方を知る」は、現代社会の問題をイスラームの観点から取り上げている。聰明で人間味溢れる著者が、利己主義、「神の矮小化」、無神論の時代に生きる人々に語りかけている。「批判的精神をもった一握りの人々」が理解と協力を惜しまなければ、本当の変化が起こる、と著者の希望に満ちた声が響き渡る。

真の姿を知つてもらうことは、まさに基本的人権である。ハトフト博士は、「これこそイスラームの真実であり、望むべきイスラームの世界である」と記している。

米国人は必ずや、著者の歯に衣着せぬ誠実さを好ましく受け入れるであろう。洞察力に富む英知がちりばめられている。（ハーバード・ロー・スクール、フランク・ヴォーゲル）

本書は宗教学の教室（私の教室も含め）で重要な役割を果たすであろう。（カリフォルニア州立大学宗教学部、クレー・ダグラス）

ハトフト博士は、どんな宗教コミュニティであれ、人々が見過ごせない現代の問題を取り上げている。かつてイマム・アル・ガザリのような偉大なムスリム学者が取り仕切った知的対話に、読者を導いている。（ハーヴード大学、スレイマン・ニヤン）